

## 2022年度 横浜市ESD推進コンソーシアム 実践報告書

### 主な掲載内容

- ◆ 横浜市 ユネスコスクール・ESD推進校実践報告事例
- ◆ 横浜市ESDコンソーシアム委員の調査研究
- ◆ 横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会レポート

ESDって...なんだろう？

横浜市教育委員会

令和4年度 文部科学省SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業

編集・発行 横浜市教育委員会事務局小中学校企画課

〒231-0005

横浜市中区本町6-50-10 横浜市ESD推進コンソーシアム

E-mail: ky-esd@city.yokohama.jp



横浜市では、平成 28 年度(2016 年度)の文部科学省「グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業」の採択を受けて以来、全ての横浜市立学校で、ESD の理念に基づく教育が広がるような取組を展開してきました。事業の推進においては、多様な組織が参加・連携した「横浜市 ESD 推進コンソーシアム」を立ち上げ、以下のような ESD に関連するキーワードのもとで、取組が展開されてきました。

表:「横浜市 ESD 推進コンソーシアム」で活用されてきた ESD 関連のキーワード

- 持続可能な開発のための教育(ESD)
- ホールスクール・アプローチ
- 多様な主体とのパートナーシップ
- ESD のレンズ:見直す(批判的)、つなげる(統合的)、変わる(変容的)、地域で世界へ(文脈的)
- SDGs の特徴:普遍性、包摂性、参画性、統合性、透明性
- SDGs を学ぶ、SDGs に学ぶ、SDGs と学ぶ
- カリキュラムデザインと学校運営の連関
- 未来につながる、未来につなげる
- 「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会
- 学びの可視化、プログラムの評価

本取組では、当初から ESD を学校全体で取り組むこと(ホールスクール・アプローチ)を軸に据え、展開をしてきました。「ホールスクール・アプローチ」は、(1)学校におけるガバナンスと能力開発、(2)学校施設の運営、(3)カリキュラムの編成・実施と教授・学習活動、(4)学社連携の 4 領域に配慮をしたものであり、その相互性が強調されたアプローチと言えるでしょう。本取組においても、カリキュラムデザインと学校運営を連関させたアプローチを採用し、さまざまな取組を「見直す、つなげる、変わる、地域で・世界で」のレンズで考えることを、教職員、学校関係者、保護者、児童生徒とともに深めてきました。地域と世界、学級・学年と学校、教科と総合、能力と態度などのように、一見、異なる文脈で語られることが多い用語を関連づけ、学校全体が持続可能性に向き合う取組を深めてきました。

令和 4 年度(2022 年度)においては、昨年度に引き続き、文部科学省「SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業」(教育(学習)効果の評価・普及)の採択を受け、学びの可視化やプログラムの評価に挑んできました。とりわけ、この数年の「変容」は、**教職員、児童生徒らが、持続可能な未来に向けた教育・学習について主体的に考え、関わることにより、各々の学校の個性や文脈が活かされた取組が多く見られるようになってきました。**日々の授業研究や教員研修、年度末の報告会などを通して、自身の取組を発表・共有するだけでなく、お互いのいいところを尊重し合いながら、さらに学校の個性や文脈を活かした取組として「変容」させてきている点に特徴が見られるようになってきました。これらの個性ある学校の変容は、**変動の激しい社会(VUCA 社会)**を踏まえ、当初から ESD を学校全体で取り組むことを軸に据えるという「ホールスクール・アプローチ」によるものだと思います。

この冊子に見出される知見が、横浜の、国内各地の、ひいては世界各国の持続可能な未来に向けた教育のさらなる展開の一助になれば幸いです。

横浜市 ESD 推進コンソーシアム・コーディネーター  
東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授

佐藤 真久

## 本市のESDの推進事業について

### 第1期（2016～2018年度）

2016年度の文部科学省の「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」に採択され、横浜市教育委員会として、横浜市ESD推進コンソーシアム（以下、コンソーシアム）を組織し、横浜市立学校でのESDの推進を始めた。本市のESD推進校（以下、推進校）の特色は、**資料1**に示したユネスコスクールのみでの活動だけではなく、教育委員会が主体となって推進校を指定し、推進を図ってきた点である。

#### 資料1

横浜市立学校のユネスコスクール加盟校

2010年 永田台小学校

2012年 市ヶ尾中学校

2013年 幸ヶ谷小学校

2018年 東高等学校

2021年 三保小学校（キャンディーデート）

2022年 みなとみらい本町小学校

本市におけるESDの黎明期においては、「持続可能な開発のための教育」をどのように解釈して、学校教育に位置付けるかということや、推進校を増やすことに注力してきた。そのために、学校と教育委員会だけでなく、大学や行政、企業やNGO・NPOなどの関係者でコンソーシアムを組織し、年に数回、会合を開き、方向性を確認したり、各学校の取組を支援する方策を検討したりしてきた。

数年間は、毎年1月に行われる、コンソーシアムの交流報告会に参加する教職員から、「ESDの概念が広すぎて何をしたら良いか分からない。」「また新しいことを始めることに負担感がある。」「環境教育と何が違うか分からない。」などの声があり、実践者によっても捉え方が異なる

り、学校へどのように浸透させていくかが課題と感じられることも多くあった。そのため、1年目の推進校をスタート校と位置づけ、負担感がないように、他の推進校のグッド・プラクティスを実践できるように支援をしたり、校内での授業研究会や研修会に指導主事を派遣したりして、教職員との対話を通してESDの概念の理解を深めることを続けてきた。これらの取組は現在も続けている。

このような試行錯誤の中でも、初年度に作成した「ESD推進のための教職員研修資料」は大きな成果と言える。この研修資料では、ESDを「カリキュラムデザイン」と「学校運営」の2つの視点で捉えなおすことを大きなコンセプトとしている。

ESDを考えるキーワードとして、UNESCO2012のESDを充実させる「4つのレンズ」批判的レンズ、統合的レンズ、変容的レンズ、文脈的レンズをそれぞれ、①「見直す」②「つなげる」③「変わる」④「地域で、世界へ」という学校で理解しやすい言葉に置き換えることを試みた。換言すると、ESDは何か新しい教育活動に取り組むことではなく、これまでの教育活動を見直し、教科等や学校行事や委員会活動等の関連性を意識すること、そのことによる新たな価値の発見や気づきによる変容が起こること、学校や地域の身近な課題解決と地球規模の課題とのつながりに気づくこと（Think globally Act locally）などの重要性を示すことができた。また、ホールスクールアプローチ<sup>1</sup>の重要性や自己変容が社会変容につながるといったESDの基本的な考え方について発信する資料ともなり、校内研修でも活用された。

さらに、「能力と態度」、「学級・学年と学校全体（職員室も含む）」、「教科と総合的な学習の時間等」、「地域と世界」といったように、対概念を対比させ、関連性を図ることによって、オーバ

<sup>1</sup> 「ESD for 2030」においても、その優先行動分野の二つ目に「機関包括型アプローチ」として組織全体でESDを推進することが有効であると提言されている。ユネスコは、学校全体としてESDに取り組むことを、「ホールスクールアプローチ：Whole School Approach」と呼んでいる。

ロード状態のカリキュラムの精選や分掌、担当、教科等の専門などに細分化されやすい学校の教育活動を、ホールスクールアプローチとしてE S Dを通して見直すきっかけを示唆する内容となっている。

また、第1期の前後に起こった世界的な潮流や本市の教育政策の動向もE S D推進にあたっては大きな原動力となった。

2015年に国際連合で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」のインパクトは大きい。前述の通り、E S Dは学校教育の中で何を実践するかが見えにくい部分があったが、17のゴールの視覚化されたイメージとともに、学校教育だけでなく、企業の活動を含む社会全体の中で意識され始めたことも、E S D推進の必要性を考える一助となっていることは言うまでもない。

さらに、2018年に策定し、およそ10年間の横浜の教育の方向性を示す「横浜教育ビジョン2030」（以下、ビジョンとする）において、横浜の教育が目指す人づくりを「自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人」と位置付けたことにも触れたい。ビジョンでは、目指す人づくりについて、「複雑で変化の激しい時代、解が一つではない課題にも柔軟に向き合い、持続可能な社会の実現に向けて、自分たちができることを考え、他者と協働し、解決していくことが重要」であるとしており、このことはE S Dの推進の重要性を示している。ほぼ時を同じくして、中央教育審議会答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016年12月21日）において、第2章 2030年の社会と子供たちの未来の冒頭で、「予測困難の時代に、一人一人が未来の創り手となる」<sup>2</sup>と学習指導要領改訂に向けた強いメッセージが記された。答申を受け、学習指導要領が改訂され、前文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が必

要ということが明文化されたことは言うまでもない。

第1期の中で、もう一つ指摘しておきたいことは、「教職員の働き方」について、E S D推進校で先進的に取り組まれていた点である。昨今、持続可能な教職員の働き方について国を挙げて取り組まれていることであるが、2016年の段階で、推進校の中で、既に身近な課題として共有され意識化されていた。教職員の職業的使命ともいうべき「子どものため」という視点は疑う余地がないが、それだけではなく、「持続可能な働き方」という視点も持ち合わせていて、教職員自身のやりがいを、時間的にも精神的にも保障し、「持続可能なもの」にしていく必要があるという議論が既に起こっていたことは、推進校の教職員に先見性があったと言っても過言ではないだろう。また、学校経営という管理職が行うものという意識が強い中で、推進校の教職員は、学校教育目標の実現のために、自分がどのように学校経営に参画していくかという視点も持ち合わせており、教科等の学習にとどまることなく、既にホールスクールアプローチの萌芽が見られたことは特筆すべきことである。

## 第2期（2019年度～現在）

2019年度からは、文部科学省の事業が「SDGs達成の担い手育成（E S D）推進事業」に変更されたが、本市はこの事業に引き続き採択され、中でも「教育（学習）効果の評価・普及」というテーマで推進を行ってきた。

第2期にこのテーマでE S Dを推進するに当たって、私たちが最も大切にしてきたことは、単にE S Dの教育効果の尺度をつくることやその手法のみを開発することだけを目的にしなかったことである。

そもそも教育（学習）の評価自体が見えにくく、可視化しづらいものという認識に立ち、な

<sup>2</sup> この点に関して、前回答申（2008年1月7日）では、これらかの社会像を「知識基盤社会」と位置づけ「このような社会では自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ、一定の役割を果たす」ための学力（基礎的基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見いだし、解決するための思考力・判断力・表現力等）の育成に重きが置かれていた。

ぜ、「評価」を行うかという目的に着目して検討を行ってきた。評価 (Evaluation) の原義は「価値を引き出す」(Extract-value) ということを基底として、これまでの本市での ESD 推進と ESD 推進による変容の視覚化 (ESD に取り組むことのよさ=価値を引き出す) を関連付けて、研究を推進してきた。

例えば、SDG 4 のアイコンには「質の高い教育をみんなに」と書かれているが、「質の高い教育」という文言は受け取り方によっては多様な解釈が可能である。そこで、原典の外務省和訳に当たると「すべての人々に包摂的かつ公正で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」<sup>3</sup> (傍点は加筆) とある。例えば、識字率などのように比較的測定可能な目標を掲げているわけではなく、ESD が求める、ターゲット 4. 7<sup>4</sup> の実現などは、そもそも測定 (評価) することが難しいことを指摘しておく必要がある。

2019 年度からのミッションは「教育効果の評価」ではあったが、あえて「ESD に取り組むことの価値 (よさ)」として、学校の文脈で理解できることを目指した。このことは、ESD が大切にしている「変容」を視覚化する手法 (評価手法) の開発にとどまらず、学校教育目標やその実現にむけて育成したい「資質・能力」との関係を整理し、「ESD に取り組むことの価値」について教育活動全般を通してどのように実現していくか (ホールスクールアプローチ) という視点を捉え直すことである。換言すれば、これまで取り組んできた教育活動を目的と手段の関係から、見直し、価値づけるという視点で取組を進めてきた。

2020 年は COVID-19 が世界的に拡大をして、日本でも約 3 ヶ月間もの間、全国規模での学校一斉休業を余儀なくされた。再開後も通常の学

校運営が難しい中でも、推進校の中から、「コロナ禍で活動が制限されている中でも自分たちの考えや行動を積極的に発信、広げていこうとする子どもの意識や行動力の高まりが感じられた」という声が聞こえてきたことに、数値だけでは測りしれない ESD を推進してきた強み (価値) を改めて感じるようになった。この時期は、ICT 機器を活用して、オンラインでの交流や集合開催とオンラインで同時開催するハイブリット方式を利用しての教職員や児童生徒の交流を試行錯誤しながら進めてきた時期でもあった。年度末に会場集合で実施していた、児童生徒の交流報告会についても、オンラインを用いて数日に分けて開催することができた。この取組は、現在でも改善を重ねて実施しており、2022 年度は 10 月と 1・2 月に 2 回開催することができた。(詳細は本書第 3 章を参照)

ESD 推進による変容の視覚化の手法についての推進校の取組としては、「持続可能な社会づくり」の構成概念 (例) や ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (例) をもとにした年度始めと年度末に行うアンケート調査や、児童生徒の記述をテキスト・マイニングなどの手法を用いた調査などがあげられる。この取組は学習活動の中で児童生徒の変容を教師が視覚化するだけでなく、生徒会活動の振り返りの中で生徒自身が変容を視覚化して、自分たちの活動の改善に取り組んでいる中学校もあった。

横浜市立みなとみらい本町小学校では、「みなとみらいを創る子」という学校教育目標を掲げ、開校当初 (2018 年度) から、参加型形成的評価である「協働型プログラム評価」に取り組んでいる。この評価手法はいわゆる、説明責任を果たすための「総括的な評価」ではなく、実践を行う前や実践途中に実施され、その実践がもっと良くなるためにはどうしたらよいかという、開

<sup>3</sup> Goal 4 Ensure inclusive and equitable education and promote lifelong learning opportunities for all

<sup>4</sup> 2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

発や改善に資する内発的な評価である。この評価に取り組むことにより、上位の学校教育目標と具体的な教育活動とがロジックで結びつき（目的と手段のつながり）、教職員だけが個々の教育活動を理解しているだけでなく、「協働型プログラム評価」自体が、保護者や地域等との異なる当事者間での理解を深めるコミュニケーション・ツールとしての役割を果たしている。また、効果という去何%などという「数値化されたもの」に偏る傾向があるが、このような既存の指標にとらわれず、「自分たちの実現したい価値」をどう具現化していくかを関係者が議論を積み重ねることが重要で、指標は必ずしも数字ではなくてもよい。現在は、この評価手法を学校運営協議会での実施したりや学級運営の視点でも導入されたりしている。（詳細は本報告書第2章を参照）

2020年には、推進校の児童生徒と教職員に、東京大学大学院による「E S Dに対する知識・態度・行動」に関する質問紙調査を行っている。<sup>5</sup>この調査によって、「ホールスクールアプローチ」によるE S Dの取組が積極的に進められていることが児童生徒の知識・態度・行動に対してポジティブな影響を及ぼしていることが明らかになった。一方で、この調査結果では、子どもたちの学びが深まるなかで、世の中には難しい問題があることを理解し、自分はまだ知らないことが多いということを謙虚に受け容れてしまう意識が働いているといった可能性があり、結果については検証の必要性がある。つまり、児童生徒が熟考するプロセスを通して、表層的に見ていた社会課題は、解決が難しく時に無力感を感じることもあるかもしれないことを質問紙調査は示唆している。教師自身が考えている児童生徒の変容と、児童生徒個人の回答との「ズレ」にしっかりと着目し、その理由を分析して教師が個人を理解することが必要なことも重要な視点として捉えることができた。

この傾向は教師にも当てはまり、E S Dに関する研修をより多く受けている教師ほど、E S Dを実践するための知識や教授法について十分な理解ができていないと感じていると調査結果から分かってきている。この点は重要な指摘で、何かの実践や活動に取り組んだことによって調査結果が必ずしも右肩上がりに数値が伸びる訳ではないということである。

最後に、今後の展望を示してまとめとする。現在策定されている、第4期横浜市教育振興基本計画の大きな柱である「持続可能な社会の創り手の育成」では、2つの事業を一体的に推進していくこととした。2つの事業とは、「SDGs達成の担い手育成」と「キャリア教育」（本市では自分づくり教育と呼んでいる。）のことである。個人がいくら幸せであっても、その社会が公正で持続可能な社会でなければ、真の幸福な人生は実現しない。事業の一体化には、社会づくりと自分づくりの両立をめざす意図が含まれている。本市ではこれまで別の事業として推進してきたが、次年度以降は事業の一体化の推進を図りたい。

また、本市で実施している学力・学習状況調査「生活・学習意識調査」に新たな質問項目として、「学習を通して見いだした地域や社会の課題を、自分たちで解決できると思いますか。」を加えた。この質問項目を新設した意図は、これからの学校教育は、「〇〇力の育成」といった、その時々々の社会の要請による人材育成にとどまることなく、児童生徒とともに「あるべき社会像」を構想することが必要で、その社会は児童生徒自身で実現できるという意味を含んでいる。

今後とも、社会変容を標榜するE S Dの実践に、新しい価値創造や価値共創の可能性を追究していきたい。

<sup>5</sup> 2020年度E S D推進校22校に対する調査を実施した。概要については、2020年度横浜市E S D推進コンソーシアム実践報告書第3章を参照されたい。

# 目次

はじめに 横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター  
東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久  
本報告書の発行にあたり（本市のESD推進事業）

## 目次

<b>第1章 横浜市立 ユネスコスクール・ESD推進校の実践事例</b>	<b>9</b>
1 永田台小学校	10
2 幸ヶ谷小学校	12
3 市ヶ尾中学校	14
4 東高等学校	16
5 みなとみらい本町小学校	18
6 三保小学校	20
7 羽沢小学校	22
8 日枝小学校	24
9 恩田小学校	26
10 荏田西小学校	28
11 大門小学校	30
12 中和田中学校	32
13 西本郷中学校	34
14 西柴中学校	36
15 本牧中学校	38
16 小田中学校	40
17 中川西中学校	42
18 相沢小学校	44
19 旭小学校	46
20 本牧南小学校	48
21 飯島小学校	50
22 新井中学校	52
23 南希望が丘中学校	54
24 豊田小学校	56
25 鉄小学校	57
26 並木中学校	58
27 希望が丘中学校	60
28 緑園義務教育学校	61

（1～5の学校はユネスコスクール・6はユネスコ・スクールキャンディデート  
6～23の学校は継続校・24～28は新規校）

第2章 協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する  
調査研究報告書ver. 4（総括編） 63

横浜市ESD推進コンソーシアム委員

東洋大学／インド工科大学 教授 米原 あき

第3章 2022年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会  
（教育委員会としてのESDの推進） 83

児童生徒の部

教職員の部

参考資料

交流報告会チラシ



# 第1章

横浜市立 ユネスコスクール・ESD 推進校  
実践事例

横浜市立永田台小学校

学校教育目標「一人ひとりが輝く永田台」

ESDを通して育成したい資質・能力

「人ものこととのつながりを尊重する力」「未来を予測して解決する力」「協同的に取り組む態度」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

カタツムリくんも、アスレチックがすきなんだ！



今日にはんじんとキャベツをもってきたよ！食べてくれるかな

カニ池は永田台のシンボルだから、きれいにして生き物や植物を入れたいな。



カラスが来ることや世話の問題を考え、生き物を入れないことに決定。



高齢者の方には、まず家から出てきてもらって、楽しく運動してもらおうのが大切なんだ。

初めて会った人のことを知ると楽しい！嬉しい！



### ○2年生 生活科「カタツムリたんけんたい」

5月に入ると、登校中に毎朝カタツムリを発見していた2年生の子どもたち。「学校をカタツムリでいっぱいになりたい。」というある子どもの願いから、教室での飼育活動がスタートした。カタツムリが喜んでくれるように、食べ物や虫かごの環境、さわり方を工夫しながらお世話を続けた。疑問に思ったことは、みんなで話し合って解決策を考えた。一人一虫かご準備して飼育を続けていくことで、最初はカタツムリに触れなかった児童も、進んで対象に関わっていく姿が見られるようになった。また、「私と同じで…」と、自分とカタツムリを重ね合わせてお世話をする児童が表れた。ふり返りでは、飼育活動を通して自分のよさを発見するだけでなく、助け合って飼育をしてきた友達のよさに目を向けたり、また、他の生き物も大切にしていきたいという思いをもったりすることができた。

### ○4年生 総合的な学習の時間

#### 「自然を大事に 永田台プロジェクト4-1」

ESDに関する取り組みたいと考えていた本学級の児童だが、社会科で南区の緑地率が減っている実態を知り、自分達で自然を作りたいという思いをもち、この活動が始まった。昨年度自分たちが作った屋上ビオトープの分析をしたり、行政担当者や専門家に学校に自然を作ることが環境にとってどれだけ有益なのかを話してもらったりして、生き物のことを考えた自然作りを行っている。学校のカニ池整備・花壇整備・落ち葉プール造成・鳥の巣箱づくりに取り組んでおり、持続可能な自然環境にするために何をするのかじっくりと話し合いながら活動を進めた。

### ○6年生 総合的な学習の時間

#### 「すごろくワールド～3世代を元気に仲よし大作戦～」

南区最大の高齢化率である地域の実態から、「心も体も頭も元気になって3世代が仲良くなれるすごろくを作りたい。」という願いの実現に向けて活動した。高齢者体験では、思うように動かない体の辛さによって心も暗くなってしまうことを実感し、いつも支えてくれている地域の方への感謝の気持ちを深めた。また、区主催の健康イベントに参加している人から「おしゃべりしながら運動することが楽しい。」という話を聞き、健康であるためには人との繋がりが欠かせないことを学んだ。何度も交流会を開催し、3世代のふれあいを重ねることで、人との関わりで大切なことは「その人自身を知ること」だと気づき、人と繋がることの難しさや尊さを実感することができた。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 学校教育目標をESDで育む資質能力の三つの柱で整理し、位置付けた研究

年度始めに、具体的な子どもの姿で育てたい力を共有した。そして、育てたい力は、ユネスコスクールの理念（平和、国際理解、環境、ESD、SDGsの推進）を教育実践していくこととも重なる部分は大いにあることが分かった。永田台小学校の学校教育目標からユネスコスクールとしての意義とつながりのあるところに色付けてみると、ほぼ網羅していることに気付く。このように、学校教育目標の実現を目指すことが、ESDを通して育成したい資質・能力と紐づいていることを共通理解し、スタートした。

学校教育目標「一人一人が輝く永田台」

	知	徳	体	心	身
知識・技能の習得	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。
思考力、判断力、問題解決力	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。
学びに向かう力、人間性	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。	基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、自ら学びを深め、発展させる。

ESDで育む能力・態度  
持続可能な社会づくりの構成概念(例)  
ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)

### (2) ケアリング

毎年、職員が入れ替わってもESDが根付き、発展していける持続可能な学校づくりが可能になっているのはなぜだろう…と考えた。その根底には、「ケアリングを土台としたESDの取組」がある。この「ケアリング」は、もはや永田台のESDといっても過言ではなく、全ての学校教育活動の根底に流れている。

年度始めでは、「互いを知り合うこと」を大切に、教育観や子ども観を大切にしていることを伝え合う関係作りを重視する。時には学校地域コーディネーターの方にも参加していただき、永田台の町を中心に据えた材開発をしている。職員と地域の方との温かい関係性・協働性の高さが、良い授業を作り、“みんな”で子どもを育てていくエンパワーとなっている。そしてそれこそが【真の働きがい改革】に繋がっていることを、永田台小は地域を巻き込みながら体現しようとしている。

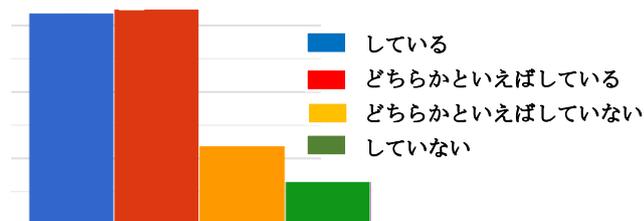


## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 子ども同士で学び合う姿

「知りたい！分かってほしい！伝えたい！」と子どもにとって必要感のある学びを職員が共同研究として進めていくことで、対話が自然に繋がる授業に変わってきた。その結果「自分の意見に思いをもち、伝えることができている。」と感じている子どもが多いことがわかった。体験活動を充実させていくことで、概念的知識の結びつきや内省の深まりを促している。これは生活科・総合的な学習の時間を柱にしたESDの実践を積み重ねてきた成果ともいえる。

授業では自分の考えをもって、ノートに書いたり発表したりしていますか。



(「永田台っ子のくらし」アンケート)

### (2) 地域に広がるESDの輪

地域に開かれた教育活動を意識的に実践してきたことで、地域の方を「〇〇さん、こんにちは。」と名前と呼ぶ姿や「地域の人を笑顔にしたい。」と自然に語る様子が当たり前に見られるようになってきた。また大人同士のつながりも広く深くなっており、事務職員と学校地域コーディネーターが連携して学校の芝刈り作業や野菜の栽培をしている。このように、学校が中心となって地域の「人と人」を繋ぐ架け橋になっている。

昨年度6年生が創った「ドリーム体操」は、永田台団地で行われる「つながり祭」の名物の一つである。高齢者の方も取り組めるように考えた体操は、子どもも大人も一体となって参加する圧巻な姿が見られるようになった。

横浜市立幸ヶ谷小学校

学校教育目標「自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども」

E S Dを通して育成したい資質・能力

※ 各学級、学年の実態に応じて、本校の資質能力表をもとに策定。

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体



1年 登校班の見守り活動に取り組む様子



4年 生き物調査の様子



4年 清掃活動の様子



6年 ルワンダとの交流の様子

### 1年生 「生活科」

#### 「きらきら なかよし だいさくせん ～つうがくろ たんけん～」

本実践では、自分が毎日通る通学路に目を向けることで、みんなの安心、安全のために多くの人がかかわってくれていることを知った。また、実際に、安全を守ってくれる人たちとの交流を通して感謝の気持ちをもったり、安全のために自分ができること、やりたいことを考えられたりした変化が見られた。

子どもたちからは、普段接していて見守りをしてくれる人を自信たっぷりに紹介する姿や、自分たちも登校班の見守り活動に挑戦する姿が見られた。

### 4年生 「総合的な学習の時間」

#### 「チャレンジ！サステナブルシーフード大作戦！！」

本実践では、横浜の海や魚を題材に、持続可能な横浜の海の姿に向けて自分たちに何ができるかを問い、体験的活動を通して、学習を深めてきた。

活動では、まず、国土交通省の方と人工干潟での生き物調査を行ったり、お話を伺ったりすることを通して、横浜の海の特徴や課題を知ること、身近な海の姿を自分事としてとらえることができた。

また、中央卸売市場の方との交流や神奈川区の主催の地域清掃イベントに参加をすることを通して、自分たちができることを考え、実行に移していった。例えば、マイバックやフードロスに取り組んだり、学習したことをポスターにして紹介したりする姿などである。さらに、学習活動をユネスコスクール交流発表会で積極的に伝えることもできた。

### 6年生 「総合的な学習の時間」

#### 「平和と平等の虹を架けよう」

本実践では、SDGs10の「人や国の不平等をなくそう」をテーマに①アートマイルプロジェクト ②他校との交流 ③ユネスコスクールの役割についてのプロジェクトを、差別や不平等の視点から考察し実践してきた。

特に①については、アフリカのルワンダの学校と交流を重ね、不平等について話し合うだけでなく、自分たちがその解決に向けて、どのような行動ができるか意見交流した。

話し合いを重ねる中で、日本の子どもたちは、ルワンダへの文房具支援活動を思いつき、ルワンダの子どもたちにも意見を聞きながら全校に呼び掛けて、活動を展開した。また自分たちとルワンダの子どもたちと協同で、学習のメッセージを込めた壁画を完成する予定である。

子どもたちは国を超えた人権意識が芽生えるとともに、身近にある差別や不平等、また自分の普段の言動にも目を向けて考えを深める姿が見られた。

## 2 ESDの価値を引き出すために

### 試行錯誤したこと

#### (1) 本校の重点研究について

本校では、「自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども」と学校教育目標が掲げており、ESDを柱に学校教育目標の達成に向けて力をつくしてきた。特に、総合的な学習の時間、生活科の実践においては、長年にわたって積み重ねてきた経緯があり、その成果は内外に評価されている。

この3年は、「子どもと教師の変容を促す効果的なリフレクション研究」とのテーマ設定の下、リフレクション(Reflection 以下、リフレクション)を取り上げて重点研究を行っている。一昨年より、「～自分、友だち、社会の幸せをつくる資質・能力の育成～」との副題を付し、

学校教育目標の達成に向けて、子どもの資質能力の育成に効果的なリフレクションの在り方について研究を進めてきた。

資質能力の育成にあたっては、毎年、資質能力表(表1)を作成し、年度途中にワークショップ形式で見直す時間を設けており、職員からも効果的であるとの肯定的な意見が多く出ている。

表1 資質能力表

#### (2) 研究の目的

研究の目的は、大きく二つある。一つが子どもの資質能力の向上に資する効果的なリフレクションの在り方を探ることであり、2つ目は、同僚性向上と教師の信念の更新に効果的なリフレクションの在り方を探ることにある。これは、本校がESDのホールスクールアプローチの視点から、児童の資質能力の育成だけでなく教職員の働き方ややりがい、また校務の在り方も含めた学校教育全体をESDで捉えなおすことを重視していることによる。

#### (3) 教職員のリフレクション

児童の実践概要は、1に示しているが、職員の

リフレクション研究の在り方として、研究会では「協同的なリフレクション」を取り入れている。これはリフレクションをテーマに設定してから、研究会の在り方を毎年模索して、修正を繰り返し定着してきたものである。概略として授業者の振り返りをもとに、参加者が小グループで話し合い、対話を重ねていく。授業の正解を探ることを目的とせず、授業者と参加者の内省を深めながら、協同性を高めることを目的とした実践である。

また、夏には校務の改善について全職員が参加して話し合った。ここではリフレクションをより促す手法としてPMIといった思考ツールを取り入れて対話を重ねた。学校の当たり前を当たり前として受け止めず、持続可能な学校の在り方を探る手法とした実践である。実際に、夏での研修を受けて、年度末を待たずに、改善に動いた業務が複数ある。



上記の実践を行ってきた結果、同僚からは同僚性の向上を実感したり、学校の変容を実感したりする声が多く出ている。

## 3 学校全体でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

以上、本校のリフレクション実践と成果の一端を紹介してきた。こうした変容は、児童と教職員がともにリフレクションを起点に変容を繰り返すことで、生まれた成果であると考えている。しかしながら、たとえ、そのような変容がみられない児童や教職員がいても、「誰一人取り残さない」との信念のもと、関わっていくこそがESD実践であることを、本校では確認し合ってきた。引き続き、持続可能な社会の創り手の育成に向けて、本校の実践を高めるよう努めていきたい。

横浜市立市ケ尾中学校

学校教育理念【 自立貢献 】 学校教育目標「〇自分で解決する力を大切にします。(知・公・開)  
〇心豊かに生きる力を大切にします。(徳・体)」

E S Dを通して育成したい資質・能力

「ものごとを多面的・総合的に考える力」「協働して課題解決するためのコミュニケーション力」  
「他者や社会との関わりを大切にして協力する力」

1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体



「9年間で育てる子ども達」

生徒会本部・生活委員会

「だれにとっても居心地のよい学校づくり」

いじめのない学校づくりとして、「多様性を認め合い共に支えることができる」「笑顔とあいさつがあふれる」をキーワードに、市ケ尾中学校ブロックの荏田西小学校、東市ケ尾小学校と共にできる活動や行動に取り組んでいる。

「小中合同あいさつ運動」は、昨年度からの取組で「のぼり」「あいさつうちわ」「元気のどるBGM」を準備して、朝から温かい気持ちになれるように元気にあいさつ運動を行った。身近なコミュニケーションから居心地の良い学校づくりを目指した。



「木のしおり」と「カバー」  
気軽にできるアクションを紹介。

図書委員会 「木がる(気軽)にアクション!

木のしおりプロジェクト」

昨年度、全校で学習した「木のストロープロジェクト」から、さらに自分たちができる行動を考え、活動を始めた。横浜市の水源がある山梨県道志村の森の間伐材から作った「木紙」で、「木のしおり」を作成した。同時に、木のしおりのカバーに気軽にできる地球に優しいアクションの紹介を記載している。このプロジェクトを色々な人たちに知ってもらうため、学区の小学校図書委員会を訪問して、しおりを届けたり、地域の図書館での展示を行ったりと地域での活動を行った。

身近なことの中にも「持続可能な未来」のためにできることがあるということを多くの人に伝え、広げていきたい。



「『ポップ』の展示」 この学習を行うのは、  
2回目であり、生徒の視点で選んだブックリストの更なる蓄積となる。

1年「国語」 「SDGsにつながる本を紹介しよう」

学校司書と連携し、図書室にある本を1冊選びSDGsとの関連を考え、紹介するポップを作る授業を行った。「現在世界が解決すべき課題について知り、自分の考えをもつこと。」「読む人に考えてほしいことや知ってほしいことを捉えること。」を目標に取り組んだ。

「持続可能な未来」に向け、SDGsを達成させるヒントが身近にあることを理解できる学びとなった。



「自然教室の学び プレゼンテーション」

2年「総合的な学習の時間」 「自然の中で絆を育む」

自然教室の学びをSDGsと関連付け、自分の言葉で伝えた。体験したことや考えたことを共有することで、同じ思いの仲間との共感体験を積むことができた。課題解決に向け、協働していくためのコミュニケーション力の育成につながった。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 「ESDの視点」で「授業」を捉え直す研究

本校は、プロジェクト型の生徒会活動を展開し、活動を先輩から後輩へと継承しながら、「持続可能な社会の創り手」としての資質・能力を育て、同時に、教職員にとってもESDの価値を捉え直し、ESDの啓発、推進を行ってきたのが一つの特徴である。自分達にできる行動を起こしていくことが浸透してきた中で、新しいことを始めるのではなく、今ある教育活動をESDの視点で価値付け、取り組んでいくことも大変重要だと思えるようになった。

そこで、まずは、教員の本分である授業を「ESDの視点で捉え直す」ことを目標に、「持続可能な社会における構成概念」や「ESDで重視する能力・態度」について、指導主事を講師として招き、職員研修を行った。その後、学習指導案を作成し、授業実践を行った。学習指導案の作成においては、「ESD評価規準例集（横浜市立三保小学校）」を参考にした。



「ESDの視点・・・」を難しく感じていた教員もいたが、この研究を通して、「教科として身に付けてほしい能力とリンクしていることが多いことに気付いた。」「日頃の授業の中で必要だと思うめあての中にESDの視点も含まれていることが多いのだと感じた。」などの「気づき」や「自分の授業をESDで再価値付け」ができた学びとなった。しかし、学習指導案の作成については、ESDの視点を言語化することが難しく感じるとの意見が多くあり、課題として残る。

今後は、行事等にもESDの視点を盛り込み、学校の教育活動全てにESDを浸透させて、「持続可能な学校教育活動」を目指す。

## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 市ケ尾中学校ESD×SDGs

この数年、取り組んできたESDが本校の学校教育目標の実現に向けて「どのような位置付けとなるのか」「育成したい資質・能力との関連はどのように関連付けられるか」等を見直すために、ESDを柱にしたカリキュラム・マネジメントを整理し、視覚化した。



また、アンケートを通して、生徒の課題を捉え、「ESDで重視する能力・態度」で焦点化し、育てたい資質と能力として具体化して、示している。

### (2) みんなで共有し、全校型のESDを目指す

生徒会活動のアンケート結果を「グラフ」や「テキストマイニング」で視覚化し、変容を見取っている。前期は、「コミュニケーションを行う力《受信》」が最も数値が高く、「多面的・総合的に考える力」がもっとも低い数値であることがわかった。自由記述からは、「意見」のワードが多く見ることができ、他者の「意見」を取り入れながら活動することの大切さを学んだ生徒が多くいたことがわかった。その他、委員会活動を通して、自分の取り組んでいることが、「誰かのため」「SDGsの達成」に貢献していることを実感し、成長している自分を振り返ることができている様子を見取ることができた。



アンケート結果は、教職員、生徒に提示し、変容や課題などを学校全体で共有できるようにしている。生徒と教職員が「チーム市ケ尾中」となり活動することでより効果的な取組につながっている。その中で「持続可能な社会の創り手」としての生き方や考え方をもち、自ら行動し、社会、地域の変容に貢献できる子ども達を育てていきたい。

## 横浜市立東高等学校

### 学校教育目標

- ・自ら学び、熱心に学習する生徒を育成します（知）
- ・豊かな心と健やかな体を育み、他人を思いやる生徒を育成します（徳・体）
- ・社会の一員として自ら役割を果たすとともに、国際社会の発展に貢献できる生徒を育成します（公・開）

### ESDを通して育成したい資質・能力

「言葉の力」と「聞く力」を身につけ、論理的な思考力と高いコミュニケーション力

「主体的な学び」の成果をもとに、より高い進路目標の実現に向けて挑戦する力

### 1. ESDを通して育成したい資質・能力の具体例



留学生と班の仲間と英語で討論

#### (1) 1年生「グローバルシチズンシップキャンプ」

「グローバル」とは「グローバル」と「ローカル」を合わせた言葉で、世界を見る目をもってまずは地域で活躍していく人材の育成を目標としたイベントである。1年生の6月下旬に設定し、これから本格化する課題探究学習の最初の一步となるように内容も工夫している。

留学生を40人ほど招き、留学生1名と生徒7名ほどのグループを作り、英語でSDGsを題材としたワークショップを2日間行っていく。その中で生徒は大きく変容し、これから始まる東高校での探究活動への理解を深められるようなプログラムを作ることができている。

グローバルシチズンシップキャンプの前後でアンケートや振り返りを実施、生徒の変容を可視化し、それを生徒たちに自覚させるよう工夫している。

この行事はすでに4年間実施し、生徒が英語の力の必要性をはじめ、基礎学力の大切さを自然に感じることもできるイベントに育っている。またこの2日間のイベントを乗り切ることにより自信をつけ、自分の意見を持ち、常に試行錯誤しながら探究を深めていくというサイクルを学ぶことができるイベントになった。



自分の考えを1年生のみんなに向けて話します。

#### (2) 1, 2年生「プレミアムプログラムⅡ」

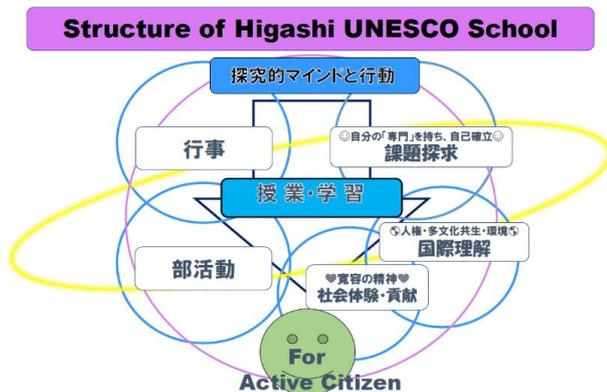
プレミアムプログラムⅠで大学の先生の模擬授業を受講、プレミアムプログラムⅡでは横浜市内のSDGsに関わる企業を招き（令和4年度は34社）、分科会を通して、企業の取り組みを学ぶイベントである。高校では、大学の先生の出張講義を受講したり、自らがオープンキャンパスに参加したりする機会は多いが、その先の企業とコラボする高校はほとんどない。本校はユネスコスクールであり、SDGsを軸に多くの企業とつながることができている。このプログラムも5年目であるが、イベントとしてはかなり成長しており、生徒はもちろん、企業からも、高校生と意見交換したり、SDGsに取り組む他社と知り合ったりできるイベントとして好評である。

高校は進路を考える大切な時間を過ごす場所であるが、生徒にとっては大学卒業後の働く自分をなかなかイメージができず、悩む生徒も多い。そんな生徒たちに、このイベントでチャレンジする勇気や将来を考えるきっかけを与えることができた。

## 2 ESDの価値を引き出すために試行錯誤したこと

### (1) プロジェクト推進部による様々な研究

本校はユネスコスクールになるにあたり、5年前に校務分掌を大きく改編し、新しく「プロジェクト推進部」を作った。校務分掌としてESDに取り組むことで、さまざまな仕組みを作り、それを継続・成長させることができています。プロジェクト推進部では、まずユネスコスクールとしての形を作ることに取り組んだ。



概念図を作成し、既存の様々なことと共存しながら形を作っていくことには、問題も多くあった。それを一つずつ見直し、また、結果を残すことで「知のシャワー」を生徒に浴びせながら探究を深めていくという今の形が徐々に出来上がってきている。また、探究活動については月曜日の7時間目に「イーストタイム」と呼ぶ時間を設定し実施している。年間通じて活動し、調べ学習から探究活動へ深め、最終的にはHUG (ハグ: Higashi discussion Meeting of UNESCO SCHOOL for Glocal citizenship) という20ほどの分科会に分かれ、活発な討論をするというイベントを生徒が運営できるようになった。

### (2) サステイナブル研究部の創部と活躍

サステイナブル研究部 (通称サス研) は、4年前にユネスコスクールの核となる生徒を育成するために創部した。創部してすぐコロナ禍になり、自由に活動できることが多くなかったが、その中でも「地球にちょっといいこと」を合言葉に、自分たちでできることを精一杯行ってきた。その努力が実り、今は地域の方々にも認知され、定期的にボランティアやイベント等に呼んでいただき、お手伝いや部員作成のワークショップを行ったりしている。エアロバイク型の発電機を使い、電気の大切さを伝えるイベントや、ピンクシャツデーというカナダ発祥のいじめ反対イベント、古

着 de ワクチンという古着を回収することで発展途上国の子供たちにポリオワクチンを届ける取組等に参加している。

企業との連携も行った。令和3年度には横浜に本社を持つ株式会社ファンケルと連携し、洗顔パウダーのパッケージデザインを行った。デザインには「SDGsって難しいよ。簡単なことから行動していこう。」という部員の想いが表現されており、多くのマスコミ (NHK 首都圏ニュース、Nスタ、ヒルナンデス、フジテレビ、BS-TBSなどのテレビ、神奈川新聞、日本経済新聞、朝日新聞等の新聞、タウンニュース等の地域紙等) にも取り上げていただいた。社会に認めてもらえた実感は部員の大きな自信となった。



## 3 学校全体でESDに取り組むことによって引き出すことができた価値

### (1) 「東高校はユネスコスクールである」という価値

本校は企業等、外部の団体と多くつながっているが、それらの絆は「ESDを推進するユネスコスクールである」ということが芯となっている。受検生や保護者に対して学校の魅力を伝える際にユネスコスクールであるということは非常に大きい。ESD推進校として様々な事業に取り組み、地道に努力してきたことがこの価値を生んでいる。今後もさらにこの価値を磨きESDの推進に学校全体で取り組んで行く。

### (2) 生徒、職員の変容

日常の会話の中でSDGsのことやESDに関わる話題が東高校には多く存在している。また、生徒は探究活動においてそれぞれテーマを持っているが、そのテーマに関する話題が日々の会話の中に存在する。職員は授業の中で、例えば英語の文章の中でESDに関わることが出てきた場合、自然な形でそれについて生徒と語り合う。また、生徒は自分がテーマを持って探究を行っていることに自信を持っている。その探究が自分の将来や地球の未来につながり、自分事としてさまざまなことに取り組むことができる真のグローバル人材を育成できるよう、さまざまな活動をアップデートしていく。

横浜市立みなとみらい本町小学校

学校教育目標「**「みな」と「みらい」を創る子**

ESDを通して育成したい資質・能力

「多様性を認められる」「多面的・多角的に物事を捉える」「問いを見い出して学び続ける」

「まちに愛着をもつ」「豊かな心をもつ」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

○さんの作っている野菜は元気いっぱいだね。何か秘密があるのかな。



3 すべての人に健康と福祉を



### 2年生 「生活科」

#### 「おいしく野菜を食べよう！」

初めて学年が上がり、生活科の時間で、1年生のときの花の栽培活動の経験を振り返ると、児童から自然と「野菜作りにも挑戦したい。」との声があがった。始めに、プランターの設置や土作りの計画を立てた。

栽培の仕方について、上級生や校内職員にインタビューし、横浜市内の農家の方に来校いただいて助言をもらい、夏野菜の収穫を体験し、野菜への愛着が育くまれた。また、たくさん収穫できた野菜の使い道について、栄養教諭とも連携し、給食に入れてもらった。

冬野菜の栽培では、野菜を育てるだけでなく、如何にして美味しく食べるかという視点も取り入れて活動した。これからは、これまで関わってきた人や、1年生にも美味しい食べ方を伝えていきたいと考えている。

### 3年生 「総合的な学習の時間」

#### 「みんなが楽しめるまち みなとみらい」

総合的な学習の時間に、みんなで探究したいことを出し合うと、たくさんの人たちに喜んでもらえる活動がしたいという思いがあった。

みなとみらいには来た人たちが楽しめる工夫がたくさんあった。さらに調査をすると、「今のままで良い。」と思っている人がいることが分かった。本当にみんなが楽しめているのかと疑問に思い、どのような人のための工夫がどれくらいあるかを調べた。みなとみらいには目や耳が不自由な人が楽しめる工夫が無いことに気づき、だれでも楽しめて、住みたくなるようなまちづくりについて探究を始めた。

視覚障害や聴覚障害のある方と関わり、社会の壁と心の壁があることが分かってきた。その心の壁を乗り越えてみんなが楽しめるまちにするための活動を創っていく。

### 4年生 「総合的な学習の時間」

#### 「リメイク工房 4の2」

社会科の学習からごみを減らすことの大切さについて考えた。そこから、自分たちにできることは何かを考え、布のアップサイクルをすることになった。布のアップサイクルを通して、大学の文化祭に参加し、アップサイクルの大切さを伝えることができた。また、「無駄にしないって大切だね。」と声を掛けてもらうことができた。

ごみを減らす方法は一つではないことや、アップサイクルの方法も一つではないことが分かり、自分たちにできることを考えている。楽しくごみを減らしていく方法をこれからも考え、伝えていく。

けっこう早く歩いても大丈夫なんだね。安心できたかなあ。



11 住み続けられるまちづくりを



ゴールボール面白い！これはみんなが楽しめるね！



伝えるって難しい！でも、楽しんでくれてたよ。



12 つくる責任 つかう責任



## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 児童がロジックモデルを活用したESD推進と学校運営の方法

昨年度までは、ESDにつながる目標達成のために、ロジックモデルで目標を可視化し、アンケート評価をすすめてきた。しかし、アンケート結果や分析をしている中で、児童とロジックモデルについて共有できていないという課題を感じた。

### (2) ESDアンケートの分析をPDCAサイクルで考える職員研修会

児童が主体となってESDを推進できるように、学級目標の達成とロジックモデルの達成を関連付けるようにした。(クラスロジック)

低中学年では、学級目標を作成する際に、児童が思いを担当が整理し、ロジックに表した。また、高学年では、ESDロジックモデルの理解を深め、何ができていれば上位目標を達成したことになるか話し合い、クラスロジックを作成した。

令和4年度 クラスロジックモデル	
クラス目標	みんなが笑顔、仲良く楽しく生活しよう
学級目標	みんなが笑顔で、仲良く楽しく生活しよう
新しいことチャレンジする	友だちの思いとこころを育て、譲り入れる
	友だちの思いとこころを育て、譲り入れる
	目標を立てて、それに向けて取り組む
	「悔しいけどやめず」という気持ちをもつ
知恵で考えあそぶ	友だちのようすを見る、何を考えられているかをききとらう
	やさしい言葉をかけてあげる
	友だちのしたことや褒めようを見て、誇りをもって
	どこしようか決める
	友だちの得意なところ、得意の得意なところを見つめよう

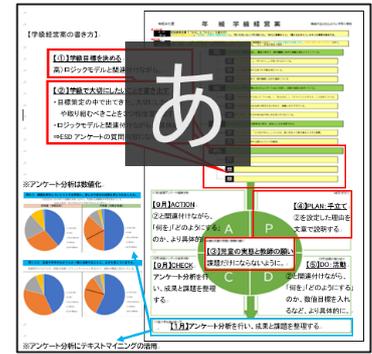
それをもとにして学級ごとのクラスロジックアンケートを実施し、PDCAサイクルに入れて考察をした。アンケート結果(C)から、その結果はどのような活動や取組が関連しているか(D)を考察し、良い結果の項目はそれを生かした活動や取組はどのようなことができるか(P)を検討した。

昨年度までの課題に、児童が何を考えて答えているのかを読み取ることが難しいとあったが、クラスロジックを分析することで、児童の思いや答えの意図を詳しく考察することができた。

### (3) クラスロジックのアンケート結果と学級経営案とのつながり

各学級のクラスロジックと学校運営を関連付けるために、毎年作成している学級経営案の中にクラスロジックを入れられるように、学級経

営案の様式を作成した。学級経営案とクラスロジックを関連させることで、児童と教師がともに主体となったESDの達成が可視化されると考えた。



## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) クラスロジックアンケートの結果を活用した授業づくり

学級目標とESDにつながる上位目標と関連させて、日々の振り返りや授業改善に活かすことができた。アンケート結果から、学級集団のよさと課題が明らかになり、児童同士で関わりあうことが得意な学級では、グループで話し合う活動を充実させたり、ルールを守ることに課題のある学級では道徳の題材決めに取り入れたりした。クラスロジックを学級経営に活用するための方法や効果については今後も実践を積み重ねて分析する必要がある。ESDに取り組んできたことで、高学年児童は探究的な学びの定着がみられる。批判的思考により、課題を見出し、協働的に推進する力が伸びている。

### (2) ロジックモデルの最上位目標を達成するために、地域との連携を広げていく

総合的な学習の時間では、SDGsの達成のために自分たちができることを考え、地域や関連企業とも連携・協働して進めてきた。ESDロジックモデルを地域企業にも広めていき、一緒にESDロジックの達成に向けた活動をしていきたい。その結果、地域が一体となってSDGsの達成に向かっていけると考えている。

その為に、どの学級でも総合的な学習の時間や生活科で地域企業と協働的にできる活動づくりをしている。昨年度よりも地域企業からの活動の提案も多くなり、ESDの推進とSDGsの達成へと向かっていると感じられる。

横浜市立三保小学校

学校教育目標「進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～」

E S Dを通して育成したい資質・能力

「持続可能な社会づくりを担う力」



## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体



みんながもっと仲良くなるためには、どんな遊びにすればいいかな。



リアクションカードを使って、安心して自分の気持ちを伝えられるよ。



ウェビングマップで発想を広げてみた。いろいろな自然との関わりの中で自分たちの生活が成り立っていることが見えてきた。

### 3年生「特別活動（学級活動）」

#### 「3-5集会を開こう」

3年生では、「構成概念」【連携性】と「能力・態度」【⑤《協力》他者と協力する態度】の重点化を図った。

本実践では、能力・態度【⑤協力】を育むために、「係の友達や他の係の考えも聞きながら、計画し、やってみる。」という共通理解のもと話し合い活動を行った。学級集会に向けて、各係ができそうなことを考える中で、みんながもっと仲良く、互いを思いやれる遊びにはどのようなものがあるか、遊び係発案のもと、考えた。自分の立場が分かるリアクションカードを活用することで、友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりする姿が見られた。提案理由を参考にしながら、よりよい方法を見つけていく姿から、クラスの一員として協力することを意識している児童が多く見られた。

### 6年生「理科」

#### 「自然とともに生きる」

6年生では、E S Dで育成を目指す「構成概念」【公平性】と「能力・態度」【②《未来》未来を予測して計画を立てる力】の重点化を図り、授業研究やE S Dの教材開発に取り組んだ。

本実践では、年間を通してこのテーマについて考えさせるものであると同時に、4年間の理科の総まとめとして、環境（空気、水、生物、大地）と人とのつながりを総合的に捉えさせる単元である。その中で生物と水、空気及び食べ物との関わりに着目し、それらを多面的に調べる活動を通して、生物と持続可能な環境との関わりについて理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主により妥当な考えをつくりだす力や生命を尊重する態度の育成を目指した。

ロイロノートスクールのウェビングマップを活用し、個人で発想を広げる時間を確保した。さらに、共有ノートの機能を活用することで、グループで個人の意見を整理・分類しながらまとめることができた。ウェビングマップの活用をして人と自然との関わりについて自由に発想を広げていく中で、様々な恩恵を私たちが受けていることに気づき、それらを次の世代にも受け継がれていくこと【公平性】の理解を深めたり、見つけた課題を解決するためにどのようなことができるかを考え、実行しようとする【未来】へと繋げて考えたりすることができた。

## 2 ESDの価値を引き出すために

### 試行錯誤したこと

本校は、地域の豊かな自然を活用しながら「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進しカリキュラム開発と授業実践を進めてきた。持続可能な社会づくりを担う児童の育成を目指し、環境やキャリアなどの教育課題をクロスカリキュラムにより整理し、全教科等において授業実践を進めてきた。今年度の取組は次の通りである。

#### (1) 持続可能な“授業研究”に向けて

本年度は、各学年2本の授業を公開した。学年の実態に応じて、教科等を揃えて児童の変容を捉えたり、学年の職員で目指す姿を明確にして授業づくりを進めたりした。教科等の教授法を学びながら、カリキュラム・マネジメントのPDCAサイクルの確立に努めた。また、学年の協働研究を軸に置き、「ESD教材研究」に取り組む時間を今年度も継続し、授業のデザイン力や指導力の向上につなげようとした。限られた時間の中で教材研究が充実するとともに、経験年数の浅い職員が多い中で、人材育成を図ることができた。

またICTの活用やESDに関する研修を適宜行い、授業力向上に努めた。

#### (2) ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点化

昨年度に引き続き、ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を学年別に重点化を図り、年間を通して変容を探った。

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性 多様性を尊重する態度	①(参加) 進んで参加する態度
2年生	II 有限性 ものを大切にする態度	④(伝達) コミュニケーションを行う力
3年生	V 連携性 互いに連携・協力する態度	⑤(協力) 他者と協力する態度 ⑥(関連) つながりを尊重する態度
4年生	II 相互性 つながりやかわりを大切にする態度	②(多面) 多面的、総合的に考える力
5年生	VI 責任性 責任と義務を自覚し、自ら進んで行動する態度	①(批判) 批判的に考える力
6年生	IV 公平性 公正・公平に努める態度	②(未来) 未来像を予測して計画を立てる力

#### ▲「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点

今年度の教育活動の成果を知る一つの手立てとして、各学年のESDの重点項目に関するアンケートを作成し、実施することを試み

た。児童一人ひとりが、自分の考え方や行動を振り返り、年度初めと終わりの姿を比較できるようにするとともに、児童が「どのような場面でそう感じたのか」など記述欄を設ける。このことで、数値だけではなく個人の変容に着目していきたいと考える。視覚化することで、児童自身が、変容に気付くとともに、教職員の児童を見取る力を高め、価値付けしていく姿を期待している。

#### ▲ 第3学年 ESDアンケート「重点項目：連携性 協力・関連」

#### 3 学校全体でESDを取り組むことによって引き出すことができた価値

昨年度から行っているピラミッドチャートを活用した学年ごとの年間の足跡やESDカレンダーを活用した「ESD教材研究」の充実などを通して、職員の協働性を高め、授業改善を推進してきた。教科等の授業との関連を図って授業づくりをすることで、SDGsの視点から物事を見ようとする場面が増え、委員会活動では児童から「フードドライブを行いたい。いろいろな国を紹介したい。」などの声が上がった。生活場面でも、自分たちの思いを形にできるように主体的に行動し、計画を立て実行する姿から、学びを止めない雰囲気为学校全体に広がっていくように感じる。

また、どの学年でも「まち」の人・もの・こととのかかわりを大切に、繰り返し、三保の自然や町の人と関わることで、まちを知り、愛着をもつ児童が増えてきている。

今後も、指導方法の一層の工夫や改善を図るとともに、「ESDの指導と評価」についてさらに研究を深めていきたい。

横浜市立羽沢小学校

学校教育目標「E笑顔いっぱい Sすこやかいっぱい D大好きはざわの人とまち」

E S Dを通して育成したい資質・能力

「多面的総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協働する力」「自ら課題を見つけ主体的に最後まで取り組む力」

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体



好み分かる  
ようにいろいろ  
なえさを入れて  
みよう！

屋根をつけて  
暗くしたから喜  
んでくれるとい  
いな！



実際に切ると  
太さがよくわか  
る。みんなで協  
力して切ろう。

小刀は、大変だ  
けど、すごく素  
敵なものでき  
たよ。



ゆるスポーツ  
は誰でも楽しめ  
るものになっ  
ているんだ！

区役所の方や地  
域の老人ホーム  
の職員の方に教  
えてもらおう！



### 2年生 「生活科」

「大すきダンゴムシ！なかよし大きくせん！」

まちたんけんや夏野菜の観察の際にダンゴムシがたくさんいることに気づき、「飼ってみたい」という思いから学習がスタートした。ダンゴムシの生態や住処の特徴を調べたり、調べて分かったことをまとめたりしていく中で、小さな生命にも特徴があり、様々な変化をしていることに気付けるようにした。継続的に飼育する中で見つけた発見や疑問を共有する活動を通して、自分と友達の考えが違うことに気付く姿や、助言を人に求めることの大切さに気付く姿が見られた。

### 5年生 「総合的な学習の時間」

「未来へ TAKE OFF！！竹プロジェクト」

「SDGsについてもっと学びたい」と考えた子どもたちは、地域に竹林があることから、自分たちで竹を材料にした日用品を作り、プラスチックの代わりに竹を使うことができることを PR したいと考えようになった。竹を調べる中で、竹細工を趣味にしている方に教わりながら、竹の可能性や竹細工を教えていただいた方の技術や人柄の素晴らしさを知ることができた。また、竹自体が、非常に成長が早く、竹林を管理することの必要性を知ることで、竹を使用するメリットをさらに知ることができた。自分たちがわかったことを発表することで、より SDGs への関心・地域とのつながりを深めていきたい。

### 5年生 「総合的な学習の時間」

「羽沢ゆるスポーツでお年寄りを元気にしよう！」

地域の自治会長さんから、「地域のお年寄りの元気がなくなっている」と聞いたことをきっかけに、自分たちにはできないことはないかと考えた。区役所の方や地域の老人ホームの職員の方にお年寄りの現状やそれぞれが取り組んでいることなどを教えていただいた。それらを活かして自分たちがゆるスポーツをつかって、地域の方が外に出て、いろいろな人と話したり、運動したりする機会を設けることにした。試行錯誤しながらつくり続けることで、地域には様々な年齢や立場の人が生活し、関わり合い支え合っていることが分かった。また、地域に呼び掛けることで、自分たちの力でもできることがあり、変えることができるということを実感できた。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 学校教育目標と学級でめざすESDの資質能力の具体的な姿をつなげた取組

ESDの推進にあたって、重点研究では単元で育成を目指す「探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力」の記述に合わせた形で、ESDの視点として「構成概念」と「能力態度」を位置付け取り組んでいる。今年度は低学年・中学年・高学年での資質・能力が身に付いた姿を話し合って研究をスタートした。加えて新しい試みとして、学級経営案の形式を一新し、学校教育目標と学級目標をつなげ、さらに学級でめざすESDの資質・能力の具体として重点化を図ったものを明記し学級経営に取り組んでいる。そこで学校教育目標と学級目標、そして、そこで育てたいESDの資質能力がつながり、教職員にも意識されやすくなった。

### SDGsを取り入れた学級経営案

学年・学期	学年	学級経営案	関係者
低学年	1学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	2学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	3学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	4学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	5学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	6学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	7学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	8学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	9学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	10学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	11学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者
低学年	12学期	「探究活動」を通して、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力の身に付いた姿を話し合っている。	児童、保護者

### (2) 日々の教育活動をSDGsと関連づける

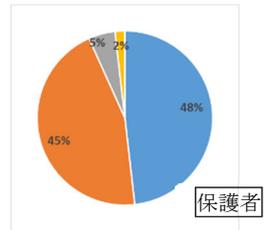
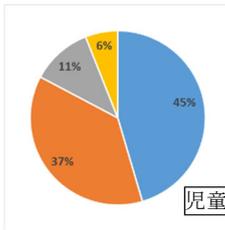
修学旅行や運動会等の大きな行事のローガンにSDGsを関連づけたり、委員会ごとにどのSDGsと関連するか意識付けて取り組んだりした。また学級の生活科や総合的な学習の時間の取組を後期の朝会などを活用して全校に広めた。このことにより、児童が日常の様々な学習がSDGsとつながっていることに気付き、意識も高まりつつある。

## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

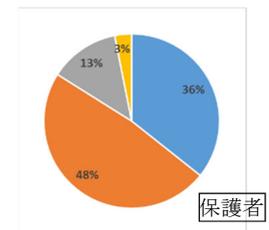
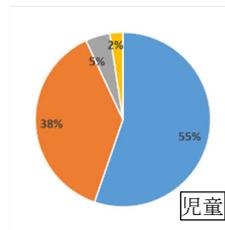
### (1) 学校教育目標の「開」の部分の追加修正を 中期学校経営方針に生かす

子どもたちがはざわのまちに飛び出し、まちや人と関わりながら課題を発見し解決していく姿は以前より増加したが、社会の課題への関心はあまり高くなかった。そこで教職員と話し合い学校教育目標の「開」の部分に「多様性を尊重し、持続可能な社会の実現に向けて行動する子」を加えた。それにより、「高齢化」や「防災」などの課題に取り組む学級が増加した。

R4年度 学校評価 児童（左） 保護者（右）  
■ そう思う ■ まあそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない



学校以外の方との学習や地域を学ぶ学習は楽しいですか。（児童）  
羽沢小学校は、地域の方々と関わりながら、羽沢地域の良さや特徴を学ぶ活動を行っていますか。（保護者）



総合的な学習などで自分達で課題を見つけて自然や地域や環境について学ぶSDGs等の学習は楽しいですか。（児童）  
羽沢小学校は、自然や環境についてSDGsとつなげ、学びが子どもが持続可能な社会の創り手になるよう取り組んでいますか。（保護者）

### (2) 「発信・交流」を重点研究の一部に

菅田の丘小にSDGs研修の講師として職員を派遣、菅田中2年生、菅田の丘小6年生、幸ヶ谷小5年生と授業交流を行った。また、エコフォーラムの発表も2年目となり、それぞれの交流のリフレクションは、子どもたちに社会とつながっているという実感をもたせることに役立った。交流や発信の効果は子どもたちや学校に広がりつつある。

横浜市立日枝小学校

学校教育目標「生き生き日枝っ子」

ESDを通して育成したい資質・能力

「持続可能な開発に関する価値観」「コミュニケーション能力」「体系的な思考力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



幼虫が育つように、土をきれいにしたり腐葉土を作ったりしよう！



安全なまちづくりを目指して、地域の方に防災について発信しました！

おからは栄養価が高いのに、多くは捨てられてしまうなんてもったいない。パンケーキにしたらおいしく食べられると思う。



### 個別支援学級 「生活科・総合的な学習の時間」 「あつまれ！ひえめるの島」

植物を育てていくと、今までの経験を生かして考えながら、わからないことは調べて世話をする。育てていく中で、少ない人数では十分に世話ができないことに気づき、周りに協力を求めることもあった。

昆虫が別の昆虫を食べたり、昆虫が育てている野菜を食べたりしている様子から、生き物同士もそれぞれに生きていて、互いに関わり合っていることに気づき、より昆虫や植物を好きになり身近な自然を大切にできる実感をもつことができる材だった。

生き物同士が互いに関わり合いながら生きていることに気づき、自分も友達や先生、地域の人たちや自然と関わりながら生活をより良くしようとする態度を養った。

### 5年生 「総合的な学習の時間」 「防災に強い日枝のまちづくり」

「自分や周りの人の命を守りたい。」という願いをもち、自分事としてよりよい日枝のまちにするために、小学校や地域の方との避難訓練を計画したり、公園に防災グッズを設置したりと活動が広がった。日常の備えや取り組み、ちょっとした生活の工夫が自助につながることや、地域防災のために自分達にできることを発信する活動を通して手応えをもち、自分達の活動が地域の安全や防災のために意味ある活動であることを実感できる材だった。

防災について学び、安全なまちづくりに参加することで、自分たちの命だけでなく日枝のまちの人の命を助けることにもつながることに気づき、社会に参画しようとする態度を養うことができた。

### 6年生 「総合的な学習の時間」 「おから料理で町の人を笑顔に」

おから料理を探究していき、手応えを感じてくると、自分以外の人に食べてもらいたいと考えた。家で作ってみたり、光のpromenadeで出店したりするなどして、地域の方におからの魅力を発信していく活動を通して地域の人との関わりを深めていった。

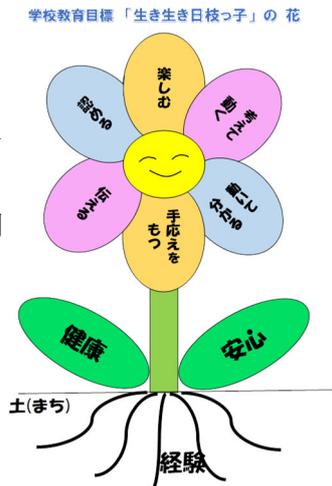
健康への意識を高めるとともに、料理をすることや食べることをもっと好きになってほしい。また、普段廃棄されてしまっている食材が、工夫次第では食品ロスの改善にもつながっていることに気がついてほしい。地域の人に食べてもらう際には、多様な立場になって物事を考える態度を養いながら、繰り返し地域の人とも関わっていこうとする姿を期待して支援した。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 学校教育目標「生き生き日枝っ子」の具現化に向け重点研究を行い、SDGs・特別支援部会、生活科・総合的な学習の時間部会、ICT部会の3つに全職員が分かれた取組

学校教育目標である「生き生き日枝っ子」の姿を花でイメージし、6つの花びらで「資質・能力」を表した。また、「健康」と「安全」の2枚の葉によって花を開くための栄養を作ることを表した。さらに、これまでの経験を根で表し、経験の根を伸ばすことで土壌から栄養を得る。茎は、自分で、根を下ろし、葉を大きくし、花を咲かせることで自分を好きになっていく。これらの力を高め、また相互に関連させ

ながら働かせることによって、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考えた。



### (2) SDGsを児童が身近に感じられるために 学校図書館をSDGsの発信の場にする取組

学校図書館司書が中心となり、学校図書館内にSDGsコーナーを設置。意識的に本を選べるようにしている。

### (3) 教員の感覚だけではない、客観的に見た児童の変容（SDGsサーベイ）

SDGsにまつわる50の質問に答えることを通して、SDGsに関わる関心・意欲・行動を分析することができる。個人ごとに結果を蓄積し、項目ごとの変化を見ることで、自身の変容を感じることができる。また、学年ごとの結果を比較することで、年齢に応じた意識の変化や違いを考察することができる。

## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 多様な教職員の価値観を活かした児童のみと

SDGs・特別支援推進部会が中心になって、児童の見取りについて研究を進めた。この部会には、一般学級担任、個別支援学級担任、国際教室担当、家庭科専科の教員、教職員大学院在学中の教員、栄養士、学校事務職員、図書館司書などなど、多様な教職員が属している。加えて年齢構成も様々で、価値観が異なることが当たり前になっている。「担任じゃないから」「担当の子どもじゃないから」といった発言がなく、互いの専門分野を活かして子どもの見取りを行い、子どもの育ちを見守り、子どもに寄り添った支援を議論し、試行錯誤している。支援の具体的な方法は、教職員それぞれの自己決定・自己選択に基づいており、何事も自分事化して取り組むことを大切にしている。

自己選択・自己決定に基づく議論は、対立を生み出すこともあるが、むしろそれは当然である。それでも部会運営を円滑に進めることができているのは、心理的安全性を高めることを大切に、部会運営をしてきたためであり、大きな成果の一つである。

また、ここで学び得た子どもの見取りの視点を、重点授業研究会における事前検討や、授業研当日、研究会に積極的に参加することで、校内に徐々に広げる動きがでてきている。これが成果の二つ目である。教員以外の教職員が、子どもについて忌憚なく意見を発し、議論に加わる姿は、ホールスクール・アプローチの一端を示していると言える。

子どものもつ可能性、価値観を引き出すには、教職員が物事に関して寛容であることと、中庸であることが重要である。教職員集団がそのような集団であり続けるために、心理的安全性の高い土壌づくり、内発的動機付けに基づく実践、教職員間の価値観共有を、今後も継続する。

横浜市立恩田小学校

学校教育目標「自ら学び ともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」

ESDを通して育成したい資質・能力

【知識及び技能】Ⅰ多様性 Ⅱ相互性 Ⅴ連携性

【思考力、判断力、表現力等】①批判的に思考し、判断する力 ③多面的・総合的に考える力

④コミュニケーションを行う力

【学びに向かう力、人間性等】⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する力

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



### 4年生 「総合的な学習の時間」

#### 「ハッピースマイル😊みんなで折り紙教室」

4年生では、折り紙の活動を通して、SDGsゴール⑩「居心地の良いハッピースマイルな空間づくりを」達成しようという目標を立てて、単元を構想した。

材の決定に向けて、「すきまなび」と称して折り紙に触れる機会を設けたり、紙飛行機大会を実施したりした。材を決定する際には、子どもたちの方から「今年は、絶対折り紙です。」と全会一致で、折り紙での活動を進めていくことに決まった。

初めのうちは、とにかく自分たちで作品作りを楽しんだ。回数を重ねるごとに、複雑な形の箱や、80枚以上使用した大きな鶴など、子どもたちが作り方を自分で調べて夢中になって折り紙に取り組んでいた。完成度の高い作品ができるにつれ、子どもたちの「折り紙愛」を強く実感することができた。ハッピースマイル😊を生み出すために、ペア学年と交流をしたり、地域で活動をされている松井さんに教えてもらったり、折り鶴で区民とつながっている墨田区役所の方とオンラインで連携したりと、多くの人の支えのおかげで学びを深めることができた。「自分たちがやりたいことをやるだけでなく、相手に寄り添うことが大切なんだな。」「力を合わせて、居心地のよいハッピースマイルな空間が創れたから、もっとつながりを増やしていきたい。」「当たり前ではなく、感謝の気持ちを表していきたい。」など実感を伴った理解と前向きな姿が見られた。

### 5年生 「総合的な学習の時間」

#### 「ぐんぐん育て！恩田の稲」

5年生では、一人一つバケツ稲の育成を行った。育てるうえで様々な疑問や課題を見つけ、その都度、地域の農家の方から助言を受け、解決してきた。また、地域の農家の方の田んぼの一角をお借りして、稲刈りや脱穀体験もさせていただいた。収穫できたお米は自分たちだけではなく、仲良し学年である2年生や日頃お世話になっている地域の方や保護者にふるまえるように、相手意識をもちながら活動していくことができた。この活動を通して、自らで課題を見つけ、友達と協同的に解決する基礎を養ったり、普段食べているお米は様々な人の努力によって作られていることを実感したりすることができた。また、オンライン交流会では、「他校と交流することで他校のSDGsに対する取り組みを学びぶことができた。恩田小の委員会でも取り組んでいきたい。」と振り返ることができた。さらに、自分たちの活動をアウトプットする場があったことにより、今までの活動を見直したり、お米作りを成功させた達成感を味わったりすることができた。

お米を育てる大切なことを教えてもらおう



土づくりが大切なんだ

稲刈り体験  
お米を作って育てることは、すごく大変なんだね



## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### □ESDの構成概念と視点を取り入れた重点研究

本校では昨年度と同様に「生活科」「総合的な学習の時間」「算数科」を重点研究の教科とし、評価基準にESDの構成概念と視点を取り入れて研究を進めている。生活科・横浜の時間の時間では、問題解決学習中心となり、その学習活動の中でESDの視点を取り入れやすく、その視点を明確なものとして研究を進めることができた。算数では思考・判断・表現の観点でESD視点を取り入れた。特に問題の練り上げの際に、①批判的に考える力や③多面的・総合的に考える力を見取る単元構想が多かった。しかし、ESD視点を意識しすぎてしまい、算数科として児童に身に付けてほしい力をつけさせることが疎かになってしまうという懸念もあった。これを受けて、ESDの視点の受け止め方・解釈の仕方を教職員でしっかりと行う必要性があり、指導案検討や事後研究会の際にはESD視点をどのように盛り込んでいけるかを話題に挙げていくように努めた。研究を進めていく中で、先にESD視点を意識して単元構成を考えるよりも、単元構成を考えた後に、ESDとつながる部分を見つけていくほうが自然な流れで取り組むことができた。研究当初は算数科にESD視点を組み込むのは少々難儀だと感じたが、普段から児童と共に考えたり、取り組んだりしていることがESD視点到当てはまることが多くあることに気づくことができた。

## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### □児童アンケートによる価値の見取り

本校がESDの視点をもった学び作りを始めて、今年度で5年目に入る。また、昨年に引き続き今年度も、児童の委員会活動をSDGs 17の目標とつなげて展開してきた。

そういった活動を進めてきたことで児童の中でどのような変容があったのかを探るため、

「SDGs 17の目標につながる活動についてのアンケート」を全校児童にロイロノートを活用して実施した。

①：SDGs 17の目標について知っていますか？

3年生以上の児童の多くが理解しており、高学年ではほぼ全ての児童が理解していた。

②：SDGsを知って自分の気持ちや行動に変化はありましたか？

電気をできるだけ使用しない、節水を意識する、食べ残しを減らす、ゴミの分別をする、もう一度使えるものを見直す、エコバッグを使用する等、前年度よりも多くの児童が、SDGsを達成するための行動を考えることができていた。

③：授業で、SDGsに関係する学習をしたことがありますか。

④：それはどんな授業でしたか。

⑤：その学習でうれしかったことや楽しかったこと、できるようになったことは何ですか。

主に生活科・『横浜の時間』で全クラスがSDGsに関わる学習を行った。花・野菜・稲等の成長の楽しさを感じた、交流した人の苦労や努力を知ることができた、仲間と協力して課題解決をしていく達成感を味わえた、誰かから「ありがとう」と言われたときの喜び等、自分たちが取り組んできた活動の良さを児童一人ひとりが感じる事ができた。

アンケートの結果から、生活科・『横浜の時間』を中心としたESDに関わる学習活動に取り組むことで、本校の児童は他者とのかかわる楽しさや、友達と協力して課題を乗り越えていく達成感を味わうことができた。自分たちがこれからの地域・社会へどのように関わっていくのか、身近な人や社会を豊かにしていくには何ができるのかを考える一つのきっかけとなった。見いだした課題に対して詳しい人に尋ねたり、ICT機器を活用して調べたりと、様々な手段のアプローチをして解決する過程を学ぶことができた。人との繋がりや身近な環境を大切にし、自分の行動に自信と責任をもって活動していく子どもたちが、これからの世界を変えていくことを期待している。

# 横浜市立荏田西小学校

学校教育目標

◇心豊かにかかわり、互いに高め合いながら学び続ける子に育てます◇

ESDを通して育成したい資質・能力

【知】課題解決能力 【徳】善悪の判断 【開】視野を広げ考えを深める

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

### 【全校リレーツツジ染め】

創立30周年を迎えるにあたり、全児童が関わる活動を学年リレー形式でつなげ、各教室の「ツツジ染め扇風機カバー」を製作した。

1年生がツツジの花摘みをし、2年生が花びらから染液を作り、4年生が布の三角染めをした。

たくさん摘んで染めてもらおう。



いっぱいもんだらい色になるかな。



愛川体験学習の藍染の時を思い出して慎重に染めよう。

ピンク色に染まった布に3年生が、本校マスコット「えだっくん」を、型紙を使って色付けし、5年生は、30周年の文字を刺繍し、6年生が扇風機カバーになるように縫い合わせた。



ずっと残るから丁寧に描こうね！



2本糸の刺繍は難しい…

使い続けられるようにしっかり縫おう！



### 【3年生】私たちのまち荏田西 陶芸にチャレンジ！

30周年を祝して校内に咲く花たちを飾ろうと、地域の陶芸家に教えてもらいながら花器を作成している。

みんなに喜んでもらえずっと使い続けられるのがいいね。花器にもえだっくんをつけようかな。



### 【4年生】樹木プレートを作成しよう

緑あふれる荏田西小学校の敷地内にある樹木に着目し、樹木プレート、2次元コード付き樹木図マップを作成することを通して、荏田西小学校の豊かさに気付き、より愛着をもってほしいという思いで活動をしている。

### 【5年生】看板アトリニューアル大作戦！

今年度の工事で取り外されることになった平成11年度作成のスローガンをリニューアルしている。これからもずっと愛され続ける荏田西小学校を目指し、児童、保護者、地域の思いを取り込みながら活動している。



卒業生の想いは当時の言葉を残すことで取り入れるのはどうかな。

### 【6年生】荏田西遺産を残そう！

みんなが住む荏田西地区を大切に思ってほしいという思いから、みんなが知らない荏田西の歴史、町づくりを調査し発信することを考えている。



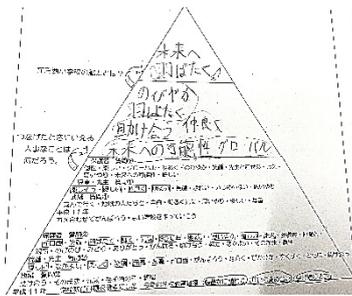
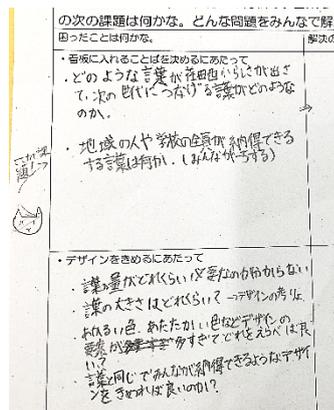
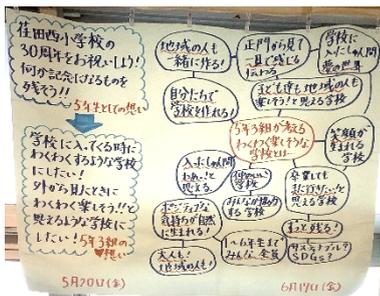
新しい町だと思っていたけれどこんな遺跡があったんだね。大切にしていきたいね。

## 2 ESDの価値を引き出すために試行錯誤したこと

今年度 30 周年を迎える本校では、各学年、各学級のみならず、学校全体として、改めて児童が「荏田西のまち」「学校」の魅力について考える機会をもった。どの活動も勇んでスタートしたものの、ほかの地域や学校にはない荏田西独自の魅力とは何かという壁にぶつかった。また、校内のみならず、地域をも巻き込んでたくさんの思いをアンケートで集めると、様々な人々が、様々な立場で学校への熱い思いを抱いており、それをどう集約してゴールへ運んでいったらいいのか途方にくれた時期もあった。

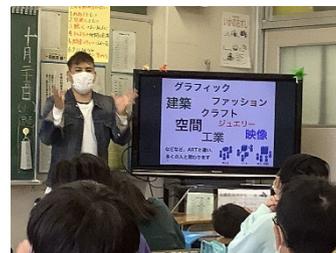
### (1) 個別最適な学びから協働的な学びへ

個別に考えることを通して一人ひとりが自分なりの課題に向き合えるよう思考ツール等を活用し、自分なりの視点や観点で課題を明確にした。その後、学級で話し合い、合意形成しながら、思いや願いを叶えていった。特に今年度は、「30周年を祝う」という共通の目的があったこと、学年リレーを取り入れた「ツツジ染め扇風機カバーの作成」という活動があったことなどから、活動が縦横につながり、より協働的な学びとなったと言える。



### (2) 地域人材の活用

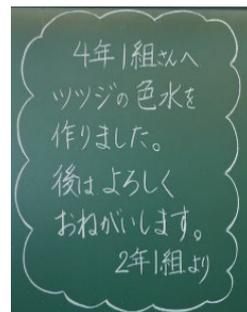
社会参画することを通して、より本物に触れさせたい、という教師の思いから、実際に地域に足を運んだり、地域人材を多く活用したりした。校内に出入りする写真家、地域にある障害者雇用施設の理事長、陶芸家、地域の史学研究者、舞踏家、学芸員、パン屋の店主、大学助教授などさまざまな分野から専門家を招き、プロの視点で話をさせていただくことで、それぞれが抱いた課題の解決に向けてたくさんのヒントを頂いた。



## 3 学校全体でESDを取り組むことによって引き出すことができた価値

ESD推進校となり4年目となるが、11「住み続けられるまちづくり」12「つくる責任つかう責任」などの観点で話し合いがもたれる場面が多くみられた。今年度は特に「30周年を祝おう」という共通のテーマをもとにそれぞれが活動したことで、アプローチの方法は違えど、それぞれに学校や地域を大切にしたい、という思いをもつことができた。また、学年リレーで行う活動により、学校の未来を見据えつつ、学校を大切にしようという思いに一体感が生まれた。

その結果、本校の学校教育目標である、「心豊かにかかわり、互いに高め合いながら学び続ける子」に関して、今までは学級内や学年内にとどまることが多かったが、他学年の活動にも関心をもつという児童の変容が見られた。3年目以降は、「多様な視点で物事を捉え、よりよい生活を自ら創り出そうとする力が発揮できるようにします。」という目標を掲げたが、全ての学年が同じ思いをもって活動をすることで、ともに「よりよい学校を自ら作り出すこと」に価値を見出すことができたと言える。



横浜市立大門小学校

学校教育目標「大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子」

E S Dを通して育成したい資質・能力

「地域の人と関わりながら、自ら課題解決をめざす力」

「世の中の難しい課題と真剣に向き合い、自分たちでできることを実行していく力」

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体



しっかり世話をして、たくさん収穫することができました！



炒るとよい香りがします。  
きなこにしました。



地域の方は商店会のことをどのように思っているのかな？インタビューで聞いてみよう！



商店会の方は「だんだんと人が減っていて、もとの活気を取り戻したい」「商店会を盛り上げるには、地域の人の協力も必要」と言っていた。



J:COMさんにアドバイスをもらいながら、自分たちの思いや地域の方の思いを大切に、魅力が伝わるCMがつくれたよ！

### 3年生 「総合的な学習の時間」

#### 「大豆はすごいプロジェクト 大豆のすごさやヒミツを教えます」

農園活動でお世話になっている K さんから、103粒の黒大豆の種をいただいた。普段食べている大豆との違いに興味津々の子どもたちは、「自分たちで育ててみたい」と、大豆を育てることとなった。土づくりや鳥よけ、自作虫よけスプレアの活動なども行い、秋が深まるころには、103粒の種から約3キログラムの大豆を収穫することができた。自主学习などで大豆の変身や環境とのかかわりについて調べてくる子が増え、自分たちでも調べてみようという活動が深まっていった。大豆は2000年も前から食べられていて、和食の基本となっていること、健康によいことだけでなく、肉に替わるたんぱく源になることもわかり、環境や健康とのつながりも考えることもできた。今後も自分たちで育てた大豆で調理したものを食べたり、給食などで全校児童に食べてもらったりして大豆の秘密にせまり、発信していきたいと考えている。

### 5年生 「総合的な学習の時間」

#### 「5-3CMプロジェクト～OneTeamで商店会を盛り上げよう～」

子どもたちは、瀬谷の商店会に活気がないことに気付いた。商店会の会長 I さんにインタビューをして商店会に対する思いを語っていただいたところ、「商店会の魅力が十分に伝わってなくて、お客さんが減っている。どうにかして、昔の商店会の活気を取り戻したい」という熱い思いがあることが分かった。そこで、子ども達は少しでも活気を取り戻すために、「たくさんの人に商店会の魅力を伝えたい」という考えから、魅力を伝える方法として、CMを選んだ。「CMなら商店会の人と一緒に作れるし、たくさんの人に魅力を伝えることができる」という考えから、瀬谷銀座通り商店会の魅力を伝えていくCMプロジェクトがスタートした。

本単元で連携したケーブルテレビの「J:COM」は、地域の良いところを取り上げることに力を入れており、子どもたちの願いに沿って一緒に活動していただいた。商店会の魅力が伝わるCMを制作するためにお店の方へインタビューを繰り返す中で、商店会のお店の方々が多様な価値観をもっており、自分たちの店や、瀬谷の商店会をずっと大切にしていることを実感できた。また、CMの中で何をもっとも重要なメッセージとして伝えるかを考えることを通して、複数の情報から目的にあったものを選ぶ思考力が高まった。さらに完成したCMを多くの人に見てもらい、瀬谷銀座通り商店会の魅力を伝えることで、活動前に比べてもっと自分たちのまちが好きになり、身近な人にも商店会の魅力を知ってもらおう喜びを感じて、自分たちにも地域の発展のためにできることがあるという実感が得られた。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

- (1) 年度当初に教職員間で生活科、総合的な学習の時間の年間見通し確認するとともに、これまでのESD推進校としての取組の共通理解を図る。
- 校内ESD担当者を中心に、総合的な学習の時間と生活科の基本的な考え方について、全体研修を行った。また、大門小のこれまでのESD推進校としての取組を振り返り、学校全体で本年度の見通しを確認した。

大門小学校 生活科・総合的な学習の時間

◎学習時間について  
70分程度（夕ラサ給食60分程度 遊園活動10分程度）

◎育成をめざす具体的な資質能力（A）学校経営の基盤（「A-1」総合的な学習の時間を基盤として）

大門小学校 総合的な学習の時間の内容	
目標を達成するためにふまけたい資質能力	探究課題の解決を通じて育成をめざす具体的な資質能力
<p>生活科</p> <p>【生活科】 「ひと・もの・こと」の関わりや、その関わりの中で起こる現象や、その関わりの中で起こる現象の人の思いや気持ち、その思いや気持ちのつながりについて、自分自身の思いや気持ちとつなげて考えることができる。</p>	<p>【総合的な学習】 「ひと・もの・こと」の関わりや、その関わりの中で起こる現象や、その関わりの中で起こる現象の人の思いや気持ち、その思いや気持ちのつながりについて、自分自身の思いや気持ちとつなげて考えることができる。</p>
<p>総合的な学習</p> <p>【総合的な学習】 「ひと・もの・こと」の関わりや、その関わりの中で起こる現象や、その関わりの中で起こる現象の人の思いや気持ち、その思いや気持ちのつながりについて、自分自身の思いや気持ちとつなげて考えることができる。</p>	<p>【総合的な学習】 「ひと・もの・こと」の関わりや、その関わりの中で起こる現象や、その関わりの中で起こる現象の人の思いや気持ち、その思いや気持ちのつながりについて、自分自身の思いや気持ちとつなげて考えることができる。</p>

本校の特色でもある「農園活動」を中心に、大門のまちにある「ひと・もの・こと」といった「材」を全体共有する。そういったことから、子どもに身に付けさせたい資質能力を確認する。

## (2) 委員会活動をSDGsの観点と関連させ、子どもたち自身が持続可能な活動を意識しながら学校をよりよくなる。

- 委員会活動の中でSDGsの視点を年度当初から意識させ、取り組みを進めることで、常時活動や情報発信の中にSDGsに関わる行動や言葉が出てくるようになった。高学年が意識して行動することで学校全体に広まり、徐々に下の学年でも意識できるようになった。



農園委員会が取り組むコンポスト



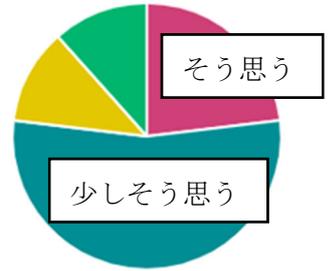
代表委員会の提案の中にもSDGsの視点を入れる

## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

- (1) 教職員がESDの意識をもって学習活動を生み出す

※教職員アンケートより

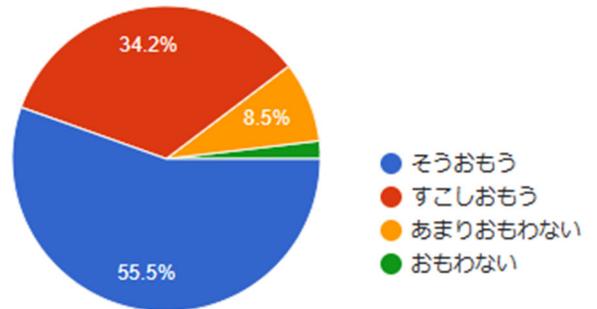
- 「本校の特色である農園活動やESDに計画的に取り組むことができた」というアンケートに対して



「そう思う・少し思う」が76%という値を示した。ESDを意識した研修等を行うことで、総合的な学習の時間等「ひと・もの・こと」を意識した活動内容を学年の中で系統立てて、実践することができた。また、教職員一人ひとりが新たな材の開拓を行い、CM制作や大豆のすごさを伝える活動、校内のU Dを見直す活動等、新たな視点で活動を生み出すことができていた。

- (2) 子どもたちがSDGsの意識をもって学習に取り組む姿勢が高まった

※児童アンケートより



- 「学習や農園活動でSDGsを意識して活動している」という児童アンケートに対して「そう思う・少し思う」という値が89.7%という高い数値を示している。経年変化を見ても、推進校になってから年々増加している。これは子どもたちの中にSDGsの意識が根付き、自分たちが生活や学習の中で意識をもって取り組むことができるようになってきたからである。次年度以降も、教師が子どもたちの意識が高まるように投げかけるとともに、意識をより行動や活動につなげられるよう支援していきたい。

横浜市立中和田中学校

学校教育目標「自ら学び 自他を大切にして 社会に貢献する生徒」を育てます

E S Dを通して育成したい資質・能力

「コミュニケーション能力」

「持続可能な社会の創造に貢献する力」

「生徒が活躍できる地域活動と連携しながら、持続可能な社会の担い手を育てます」

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体

学校教育目標「自ら学び 自他を大切にして 社会に貢献する」に深くつながる世界レベルの課題を考え、世界と自分の身近なことをつなげて行動を起こすこと Think globally Act Locally (地球規模で考え 地域で活動しよう) を意識して、本校では平成29年度から様々な取組をしてきました。学校保健委員会では衣・食・住という身近なものをテーマとして外部講師を招き講演を聴いたり、活動したりしました。例えば、『衣』では、ユニクロの“届けよう服のチカラプロジェクト”に参加することで、世界の貧困問題に目を向けました。この活動には令和3年度にも参加をして、その際には近隣小学校とも連携をして、自分たちの活動を地域へとつなげることもできました。また、WWFの方に来校していただき、海洋プラスチック問題に触れ、日本のリサイクルの現実を知ることによって、自分たちにできることを考えるきっかけになりました。その他にも、今年度は『チョーク再生プロジェクト』と題して、ボランティア部で短くなったチョークを回収し、もう一度使いやすい長さのチョークに再生する取組をしました。

再生されたチョークを使うことで、教職員の意識もより一層高くなりました。また、学校全体の重点取組として『ペーパーレス』を掲げました。アンケートや会議の議題など、教職員も生徒も紙でなくても良いものは、chromebook を活用しました。



本校は、6年間の取組を通して、生徒・教職員ともに Think globally Act Locally を意識することが当たり前となり、それぞれが自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動につながっています。

教科指導においては、各教科でE S Dカレンダーを作成し、知識・理解に留まらず、学びを活かし、様々な問題を「自分の問題」として行動する「実践する力の育成」を目指しています。例えば、

「社会科」では「1年 世界地理」「2年 日本地理」「3年 公民」の授業で自分たちが学習していることが、2030年までに達成すべきSDGs 17の目標の何と関連しているか、自分には何ができるか、また定期テストにおいても17の目標を考えさせるような出題もあり、生徒一人ひとりが持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」の育成を目指しています。



## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 今までの取組の振り返り

新たなことを始める前に今まで取り組んできた生徒会活動や学校行事を振り返ることから始めました。ESDは地球規模の課題に対する取組ですが、身近な活動として捉えなおすことで生徒だけでなく教職員も自分事として捉えられると考えました。また、令和2年度にはそれまでの活動を冊子にまとめました。



### (3) 企業や地域、PTAとの連携

学校教育目標の「社会に貢献する生徒」の育成を目指して、企業や地域、PTAとの連携を大切にしました。ユニクロの服のチカラプロジェクトへの参加、ペットボトルから作られるエコバックの作成、地域の福祉団体を招待してポッチャ大会の開催、国連WFPのレッドカップキャンペーンへの協力など様々な活動をしました。学校の中だけでなく、地域や世界の課題を解決するために、自分ができることは何かを考える機会になると考えました。



## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 学校・家庭・地域の連携

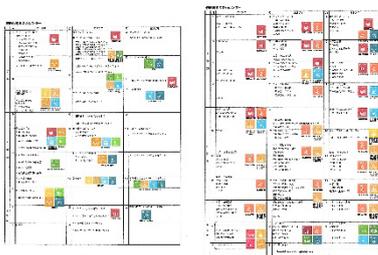
本校はESD推進校として平成29年度から活動をしてきました。学校教育目標も「自ら学び自他を大切にして 社会に貢献する生徒」の育成と、生徒から分かりやすいものに変えました。目立った活動は少ないかもしれませんが、自分たちにできることを大切に活動してきました。今では生徒、教職員そして保護者、地域の方々もESDに対する意識が高くなったと感じます。学校評価アンケートの経年変化をみても「おおいに満足」が40～50%のものが、多くの項目で70%前後へと上昇しました。

### (2) 主体的な活動の充実

推進校としての校内での活動や地域での活動を通して、世界で起きている課題が決して他人事ではなく、自分たちの身近なことに関連しているという意識の変化が生徒や教職員の主体的な活動につながっていると感じます。それが持続可能な社会の創り手の育成につながっていくと考えます。

### (2) ESDカレンダーの作成

各教科の年間指導計画を見直し、「何を学習する」だけでなく、「何ができるようになる」を意識して、学習したことが知識・理解に留まらず、それらを活かして様々な問題を自分の問題として行動できるような力の育成をめざしてESDカレンダーを作成しました。



横浜市立西本郷中学校

学校教育目標

「自ら挨拶、自ら判断、自ら行動、人とのつながりを大切にする思いやりある西本中生」

ESDを通して育成したい資質・能力

「コミュニケーション力」「つながる力」「行動する力」「情報活用力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



計画通りにフィールドワーク中。

住んでいる場所なのに、新しい発見。



地域の方に向けての「逃げ地図」のプレゼン。



宿の人からの質問にも答え、交流の時間終了。



銀行員相手に、事業計画を説明。2回目のプレゼンでやっと融資決定。

1、2年合同販売会は、校庭で実施。声かけを工夫！



### 1年生 「総合的な学習の時間」

#### 「地域学習」

学校図書館や地域のデジタル資料を活用し、栄区を知るための情報を収集した。自然、歴史、文化など与えられた課題から問いをたて、実際にインタビューを行い、その成果をまとめた。今後のさまざまな学習を通して、さらに「持続可能な地域」のあり方を探究して行ってほしい。

### 2年生「社会科 地理的分野 自然災害」

#### 「逃げ地図づくり」

学校に隣接するいち川の洪水を想定し、西本郷中からどこに逃げるのがよいのか「逃げ地図」を作成。国土院のデジタル地形図、栄区役所発行の「栄区避難所マップ（風水害編）」を参考にした。成果は学級内で共有後、地域懇談会で発表し、地域の方から机上での検討では足りない視点やこれまでの水害での経験からのアドバイスをもらい、地域の一員としての自覚や災害の時に中学生としてできることを考える良い機会となった。

### 2年生 「総合的な学習の時間」

#### 「自然教室の事前学習」

長野県飯山市戸狩での自然教室に向け、そこに住む人たちの「思い」にふれることをめあてとした。そのために、「栄区の魅力」について情報を整理しまとめ、戸狩の人に発信した。

### 2年生 「総合的な学習の時間」

#### 「会社経営体験プログラム」

修学旅行で訪れる沖縄の魅力を伝えるグッズを製作・販売する活動を通して、楽しみながらキャリア教育を行った。各社では社長をはじめ、宣伝・製作・会計などの役割を体験。顧客を1年生・2年生に想定。自分の得意不得意を改めて見つめなおす機会となったほか、外部機関との連携で実施した授業なので、実際の銀行員の方に融資をお願いするプレゼンを行うなど普段の学校生活ではできない体験ができた。

### 2年生 「社会科 地理的分野 地域の在り方」

#### 「持続可能な沖縄のために」

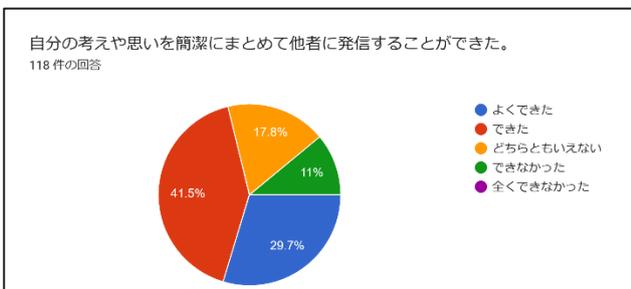
地理的分野まとめの単元では、修学旅行の事前学習も兼ね学校図書館を活用して沖縄でどのような課題があるのか、少人数班の対話、学校司書さんのレファレンスや、準備してくださったパスファインダー、文献資料をもとに問いをたて情報分析を行った。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 委員会活動とSDGsを関連づける。

年度当初に開催される各委員会で、SDGs 17の目標と各委員会の年間目標との関連を考え生徒総会で発表した。今年度はじめての試みで改めてSDGs 17の目標を自分たちの身近な事例ととらえて見直すことができた。委員会の中には、関連がなかなかみつけられなかったとの意見もあり、SDGsを「環境」問題としてのみとらえている傾向があることもわかった。ESD推進継続校ではあるが、このことは生徒・教職員双方にみられる。SDGsが「環境」だけでなく「社会」「経済」とも関連しているなどの周知が必要であると感じた。

委員会活動前期終了時には、アンケートを実施し7つの資質・能力達成度を視覚化した。コミュニケーション力の結果が次のグラフである。年度末にも実施し変容を確認したい。



### 生徒会本部

ブロック校で実施する予定だった「横浜子ども会議」が、対面からオンラインになった。昨年度の生徒たちからオンラインでという要望が実現した。その際にブロック校3校同時「あいさつデー」を実施したいという具体的アイデアも子どもたちからあがった。いつ実施するか、全校に周知するためのポスターはどうするか、児童・生徒が主体的に話し合いを行うことができた。小学生からは中学生に来てもらいたいとの提案もあり、自分たちの考えが実現した達

成感を味わうことができた。生徒会本部では来年度に向け、三校同時の「あいさつデー」から栄区小中学校「あいさつデー」に広げたいとの要望をもつようになった。

自分たちにできる身近な活動が地球をかえる一歩になるかもしれない体験として「緑化運動」「子ども服の回収で難民支援」「赤い羽根募金」を実施した。地域の現状を子どもたち自身がとらえ解決するための活動とするために、教職員側は、子どもの主体性を辛抱強く待つ姿勢が求められる。

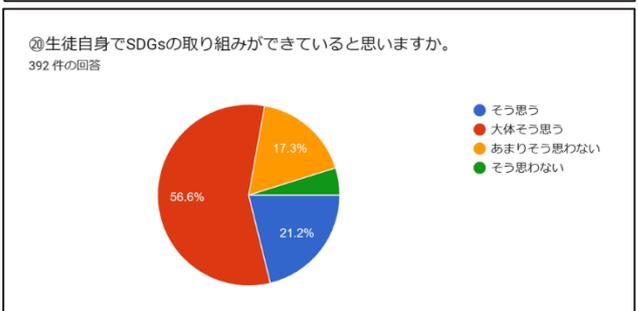
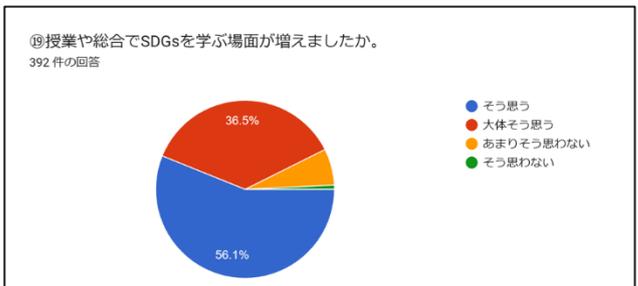
## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) SDGsではなくESDという教職員の意識づけ

SDGsとESDの関連やESDで身につけたい資質・能力を学校の教育活動にどのように位置づけるか共通理解を図るために研修を行った。ESDが「SDGsを達成するための担い手教育」である認識が教職員間で広まった。



### (2) 自分たちの行動が何かを変える一歩である 学校評価アンケートに8割近くが肯定的回答を寄せている。学校の教育活動からSDGsとの関連を実感していると感じてよいのではないかと考える。



横浜市立西柴中学校

学校教育目標「共に学び、たくましく、豊かな心」をもった生徒を育てます。

(知・開) (体) (徳・公)

ESDを通して育成したい資質・能力

「生徒一人ひとりが自他を尊重し、心豊かに向上心を持って学ぶことができる学校」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

●地域や世界の人々と環境を大切にすることをもち、進んで社会に貢献する意欲をもつ生徒を育むため、SDGsの視点からの指導に努めます。

○世界に目を向けることで、国際理解・国際協調の意識をもち、多様性を尊重できる豊かな心を育む。

○自ら課題を見出し、学び続ける姿勢を育成する。

○まちに愛着をもち、コミュニケーション力を高める。

### 【主な取り組み】

#### ▽全校

◎JOCA国際理解教育  
「地球市民講話」

#### ▽1年生

◎タカラトミー  
「キャリア教育講話」

#### ▽2年生

◎JOCA国際理解教育  
「100人村ワークショップ」

#### ▽3年生

◎総合的な学習の時間  
「地域のSDGsの取り組み調べ・体験学習」

◎英語科

「SEPRO GLOBAL 国際理解教室」

— 3年生の「総合」 —



#### ▽3年生総合的な学習の時間 実践

##### (1) SDGs 概要

SDGsとはいったいどういう取り組みなのか、改めて知るためにクイズやボードゲームに取り組むことで、身近なSDGsを考え、「自分事」としてとらえた。

##### (2) 横浜とSDGs

「横浜」とSDGsの関係を学んだ。横浜にある企業、施設、団体などの取り組みを17の視点でとらえ、四つ切画用紙でパネルを作成し、発表した。

##### (3) 金沢区とSDGs

より身近なSDGsを実感するために、「金沢区」で実践されている取り組みを体験した。6名の講師の方々にお世話になった。体験をもとに、自分たちが中学生として取り組めることがらを17の視点で考え、実践・発表する。

#### ▽金沢区とSDGs 体験先、体験内容

##### ◎株式会社アマンダリーナ

★とうがらしの収穫、畑仕事手伝い、園内見学など

##### ◎アサバアートスクエア

★アート教室体験、金沢芸術祭出店手伝いなど

##### ◎一般社団法人夢ラジオ

★金沢シーサイドFMの見学、ラジオ出演など

##### ◎富岡並木ふなだまりgionbune公園愛護会

★地域の清掃活動、講話など

##### ◎八景市場

★ワークショップ(イベントの企画)、講話

##### ◎株式会社SolarCrew

★ワークショップ(空き家の運用企画)、講話

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) さまざまな視点でSDGsの現状を知り、調べ学習や各種体験学習、発表などを通して地域の力になれる中学生を育成する取り組み

生徒の実態として、2年次までにボードゲームや講話などでSDGsの概要はつかめていたものの、取組前のアンケートでは「難しい」「なにをすればよいのか分からない」「自分たちでできることはない」という声が上がった。「SDGs達成の担い手育成」のためには、まずはSDGsを身近なものとして捉えることが大切だと考えた。そのために「地域」に特化した学習課題を設定した。

### (2) 各学年の系統的かつ横断的な学習の継続

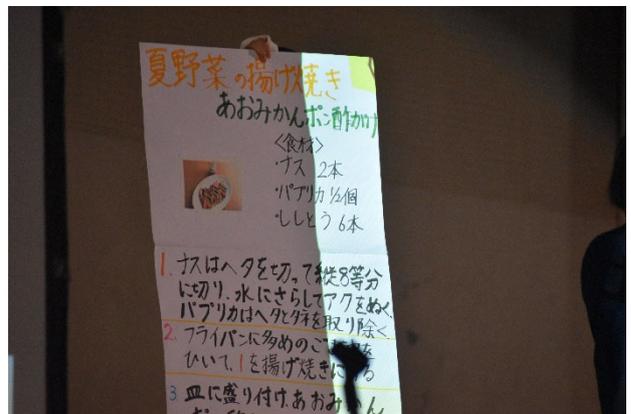
本校ではSDGsに関係する学習は3年次の総合的な学習を中心に取り組んでいるが、その他に1年次から系統的かつ他教科との横断的な学習を継続している。



## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 子どもたちが主体的に地域の課題解決を目指す姿

今年度のSDGs学習のまとめとして、学級・学年発表だけではなく、文化祭での展示や舞台発表を行った。全校生徒、教職員、保護者や地域の方々に聞いて（見て）いただくことで、学びをより確かなものにする事ができた。また、発表方法はさまざまで、パネル、スライド発表、ラジオ収録、劇、アート作品制作など工夫されていた。



### (2) SDGs達成のための意識変化、変容 (振り返りシートより抜粋)

**生徒A** 今回の学習を通して、様々なやり方で貢献できるのだと実感した。より多くの人や企業・団体が取り組むことができれば、目標の達成は難しいものではない。

**生徒B** 大きな活動ができなくても、SDGsについて広めたり、地域の行事に参加したりするなど貢献していきたい。

横浜市立本牧中学校

学校教育目標「**見**つめ **認**め **高**める」

E S Dを通して育成したい資質・能力

「物事や人を客観的・俯瞰的に把握する能力」「多面的・総合的に考え、つながりを尊重する能力」

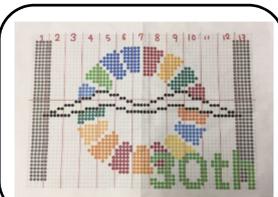
「他者と協力し、コミュニケーション力を伸ばし、進んで参加する態度」

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体

朝の昇降口で呼びかけました



箱は何を入れるか分かるように装飾した。



### 全校生徒「総合的な学習の時間」

#### ユニクロ・GU「届けよう、服のチカラ」プロジェクト」、YIS「アメニティ回収プロジェクト」

昨年度のE S Dオンライン交流会において、他校の取り組みの中で紹介されているのを見て、本牧中学校でも取り組みたいと生徒会本部役員が企画・準備・運営を行い、実施した。

7月にGUから講師を招き、Google Classroomを用いて全校放送で講演会を開いた。回収された服がどのように活用されていくのか、講師の解説と動画によって学び、授業の最後のアンケートには、「服のチカラ」を知った生徒がリサイクルなどSDGsを意識するようになったこと、動画の中に出てきた「難民」、「UNHCR」などに関心を向けるようになったことなどが見受けられた。

9月からは生徒会本部役員に加えて各種委員会、その他有志の生徒を中心に服の回収とアメニティ回収プロジェクトを同時に行った。Y I S（「横浜インターナショナルスクール」の生徒からホームレス支援のために自宅に眠っているトラベルグッズやホテルのアメニティなどを回収したいと協力を呼びかけられて協賛した。

11月にはユニクロ・GU、Y I Sの双方に回収品を収め、プロジェクトは終了となった。生徒主体となって行ったことで、他者と協同して物事を行う大変さと、中学生でも社会のために貢献することができると有用感を得ることができた。

### 全校生徒

#### 「創立30周年記念ペットボトルキャップアート」

上記のプロジェクトと同様に、E S Dオンライン交流会において紹介されていた「アップサイクル」を参考に、本牧中学校が創立30周年を迎える記念を形に残したいという思いで生徒会本部役員が主導して作成した。

全校生徒が無理なく協力できるものを材料にしたいという思いから、ペットボトルキャップを用いた。デザインには本牧中学校の校章にもあるかもめを採用して、アップサイクルの象徴としてSDGsマークになるように考えた。

ペットボトルキャップの回収や、実際の作成には細かい作業が多く、時間と人手を要する大規模なプロジェクトとなったが、各種委員会や全校放送の呼びかけに快く応じてくれた生徒によって完成することができた。

## 2 ESDの価値を引き出すために

### 試行錯誤したこと

#### (1) 「見つめ」全校生徒一丸となった取り組み

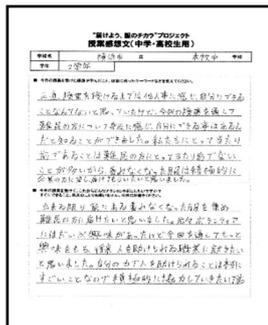
一昨年からSDGsに取り組んできた本校では、教室を移動する際に電気が付けっぱなしになっていると「SDGsじゃない」などと生徒が指摘している場面に遭遇するくらいに日常生活に浸透してきた。

反面、SDGsとは「中学生には難しいもの」と考える生徒も多く、より身近なものにするためにも、今年度は全校で行える取り組みを取り入れるように、生徒会本部役員と共に考えた。

#### (2) 「認め」GUによる出前授業

「"届けよう、服のチカラ"プロジェクト」なら家庭内で不要なものを寄付してもらおうという取り組みのため、全校生徒が気軽に参加できると考え、実施した。

服の回収の前に行われた出前授業によって、ただ不用品を回収するのではなく、自らの行動で社会に寄与することができることを知った。



#### (3) 「高める」様々なプロジェクト達成のために協力し合う

今まで全校生徒に呼びかけプロジェクトを行うことがなかったため、当初は生徒会本部役員7名だけで主導すれば成功すると考えていた。

また、何時に、どこで、どの期間で行うのかの見通しも当初の計画からは大幅な修正を余儀なくされた。

その際に、年度当初の全校アンケートで「生徒会本部役員は働きすぎではないか。もう少し他の各種委員会に頼ってもいいですよ。」と書かれていたことを思い出し、全校評議会、昼の全校放送などを活用して協力を呼び掛けたところ、多くの生徒の協力を得ることができた。

## 3 学校全体でESDを取り組むことによって

### 引き出すことができた価値

#### (1) 学校評価アンケートから見る成果

本校では「いじめ」「不登校」「自己有用感の低さ」をESDによって解決していきたいと考え一昨年からSDGsの推進校として取り組んできた。そこで、2019年（推進校以前）と、2022年（今年）の学校評価アンケートにどのような推移が見られるか検討した。

2019年（推進校以前）の学校評価アンケートは、全校の回答を集計したもので、2022年（今年）の学校評価アンケートは各学年のもので、設問も大意は変わらないものの、若干のニュアンスの違いや、ESD以外にも生徒に影響を与えたものは少なからずあり、一概に言えるものではないが、「あてはまる」「ややあてはまる」を合計した数値が過去を上回るものがあることが見受けられた。(図1)(図2)

今後もESD推進を意識した取り組みを引き続き行うことで、本校の教育目標の一助となるよう努めたい。

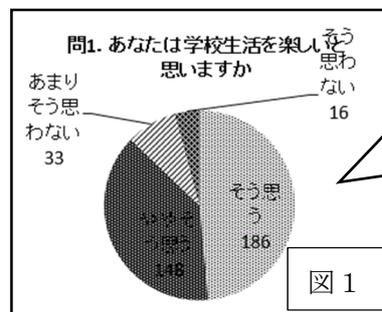


図1では、87.2%の生徒が「そう思う」「ややそう思う」と回答している。

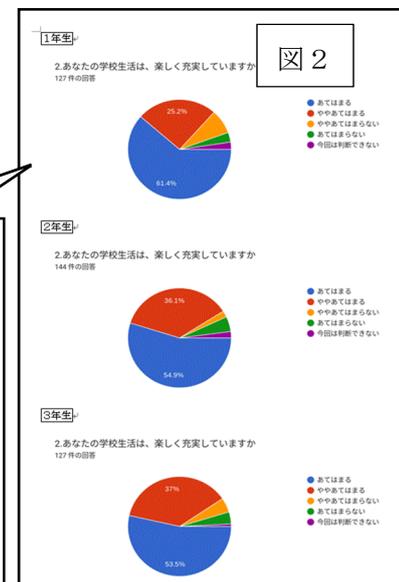


図2では、1年生86.6%、2年生91%、3年生90.5%の生徒が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。

## 横浜市立小田中学校

### 学校教育目標

1. 個性が発揮できる学校生活（知） 自ら学び、自分らしさを発揮し、生きる喜びを実感できる生徒を育てます。
2. 誰もが尊重される学校生活（徳・体） 自らの心と体を健やかに育み、互いの立場を尊重しあえる生徒を育てます。
3. 地域とともにつくる学校生活（公・開） 地域との交流を積極的に進め、地域の一員としての自覚を育てます。

### ESDを通して育成したい資質・能力

「コミュニケーション力」「課題発見・問題解決力」「持続可能な社会の創造に貢献する力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



愛をこめて  
作成した  
返礼品たち♡

京急グループ  
さんからいた  
できました

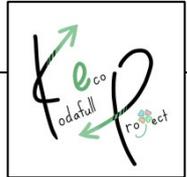


地域のまちづくりマルシェに出展！  
どうやったら小さい子たちに楽しく伝えられるかな～。

### 企業研究のテーマ例

- ・銀行が提供する金融ゲームの課題とお金を学べる新たなカードゲームの提案
- ・ディズニーの世界観はなぜ人を惹きつけるのか？～店員や商品に注目して～
- ・漫画の無断転載から著作者の利益を守るための取組

### 全学年「特別活動」 「生徒会コダフルエコプロジェクト」



昨年度個別支援学級から始まった、不要なビニール傘をより価値のあるモノにかえる（アップサイクル）活動が、今年度は生徒会本部を軸として学校・地域・企業へと広がっていった。具体的には、ファンディング形式で募金を集め、その返礼品としてビニール傘から作成したマスクケースやポーチなどを返す取組。集まったお金は、地域や世界の課題を解決するための団体に寄付する予定である。地域や京急グループからビニール傘をいただいたり、地域のケアプラザと連携して縫製作業を委託したりした。

本校では、真面目に落ち着いて学習に取り組むことができる一方で、自ら積極的に学んだり、自分の思いや考えを表現したりすることに課題がある生徒が多い。しかし、プロジェクトを実施するにあたって、協力者を得るために人前で堂々と話す経験はもちろん、「誰に何を伝えたいのか？」「どう伝えれば本当の気持ちを伝えられるか？」といった内容や方法を考える機会を多くもつことができたことは成果の一つである。また、中学生が考えた一つのプロジェクトを、多くの人たちと共に体験することで、課題解決に向けて他者とつながる必要性や充実感を生徒たちは実感できた。

### 2 学年「総合（キャリア教育）」 「社会へ飛び込め！ときめく♡企業へアプローチ」

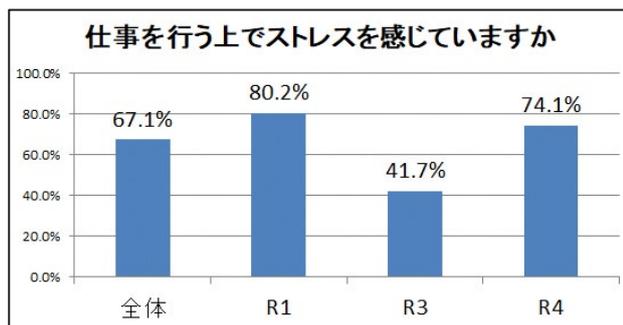
本校は住宅地の学区のため、職場体験として依頼する事業所の数や種類には限りがあった。また、コロナ禍で実施自体が難しい場合もある。そこで、職場体験のあり方を見直すことにした。具体的には、生徒が本当に好きなことや興味のあることを探究する大単元を設定し、その深める一つ的手段として職場体験を位置づけた。さらに、体験する事業所の範囲を広げ、体験ではなく、遠方の企業であっても Google Meet などを利用してインタビューすることも良いし、事業所が見つからない場合は、学校としての体験日に自分で調査することも可とした。また、そのなかで企業理念や未来への関わりといった視点もふまえて企業（好きな分野）を探究することで、持続可能な社会と企業の関わり、そして自分の生き方を考えるきっかけにしている。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤していること

### (1) 教職員のストレス増加

(教職員働き方改革アンケートより)

職員の衛生委員会を中心とした働き方改革チームがあり、朝の欠席連絡をフォームにしたり、共有フォルダの整理、業務の精選を行ったりしている。昨年度はその成果もあり、教職員のストレスはR1よりも減ったが、今年度は再び増えてしまう結果となった。職員の欠員による業務の穴埋めや新しいことに挑戦することでの不安や業務量が増えてしまっていることが要因としてあげられる。特に、エコプロジェクトや職業体験などの新たな挑戦については、前向きに取り組めない職員にはストレスがかかっている。最上位の目標の意図を丁寧に説明し、方向性を共有して業務を進めていくことが大切である。

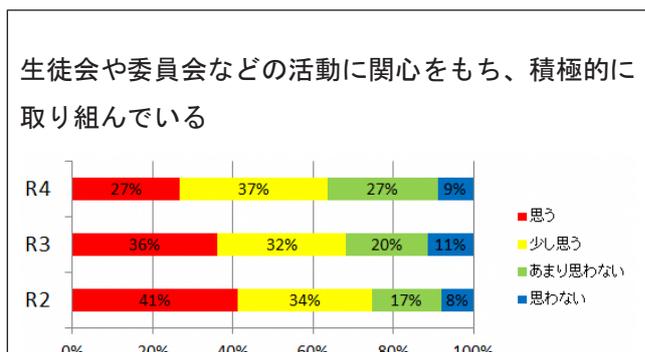


#### 学校評価アンケートから読み取れる課題

生徒会活動では、エコプロジェクトだけでなく、炭酸飲料の導入や昼休みの体育館開放など、生徒にとって身近な内容もあったが、アンケート自体は例年悪化をたどっている。前年度と同様にアンケートを詳しく分析してみると、3年生の肯定的な意見は横ばいや増加傾向であるが、下級生では否定的な意見が多くみられている。

しかし、これについては生徒会本部も認識しており、昼のラジオ放送では他の委員会や一般生徒を巻き込んで全校に生徒会活動を発信していく活動が始まったばかりである。また、教員についてもESD推進教諭が中心であった。しかし、若手の教員を中心として新たなアイデアを出したり、実際に活動に参加したりする動き

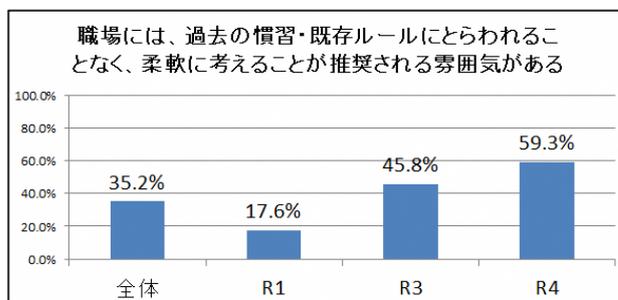
が出てきたところである。次年度はより一層「多くの人を巻き込み、主体的に活動していく」ことを意識していく。



## 引き出すことができた価値

### (1) 学校の当たり前を問い直す雰囲気

ESDを推進していくためには、今までの教育活動を問い直していくことが求められる。日々目の前の業務に追われる中であっても、「例年通り」を良しとせず、子どもたちのためになっているか？手段が目的化していないか？そのように問える雰囲気が増していることがアンケートの結果にも表れている。



### エコプロジェクトの中心を担う生徒の発言

エコプロジェクトによってさまざまな人と関わり、発信する機会が増えたことにより、生徒会本部の生徒が本音をぶつけ合う場面もあったが、活動を続けるなかで、プロジェクトの楽しさや充実感から「最後までこの活動をやり遂げたい」「こんなに楽しいものをもっとみんなに広げたい」と生徒会本部役員選挙に現職が全員立候補し、自分の言葉で想いを語る場面があり、成長を感じられた。次年度は、質的な高まりやアンケートの量的な部分で成果を可視化し、より良いESD推進を行っていきたい。

横浜市立中川西中学校

学校教育目標「自立と貢献」「健康と思いやり」「対話と融和」

ESDを通して育成したい資質・能力

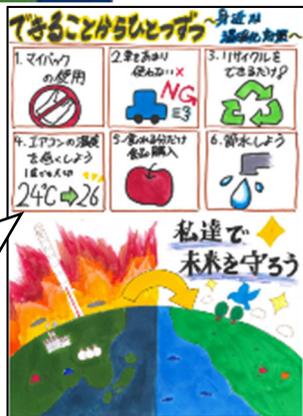
「問題解決能力」「自己理解と他者理解」「コミュニケーション力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



ワークショップでは自分たちの考えを討論しました。

今できるアクションプランとしてポスターを制作



キャリア学習のまとめをプレゼン！それぞれの「夢・未来」に向けて今の課題についても考えました

### 4 キャリア学習を通して学んだこと

- 仕事のやりがいを見つけるには
- ①一生懸命取り組むこと
  - ②楽しめるポイントを探すこと
  - ③仕事ぶりを見直して改善策を探すこと
  - ④同じ仕事をしている人とコミュニケーションをとる
  - ⑤仕事以外にもやりがいを持ちモチベーションをアップさせることの5つが特に必要だとわかった。



### 動物と共に過ごす

～飼育員になるためには～



英語でアクションプラン作り



### 中学2年生 「総合的な活動の時間」「気候変動」

- 1 時間目 2100年の日本の天気夏・冬
- 2 時間目 EXITの未来を本気で考えるII
- 3 時間目 牛のゲップ、大豆ミート体験
- 4～5 時間目 「気候変動から世界を守れ！」
- 6～8 時間目 アクションプランづくり

昨年度のテーマであった「食品ロス」の問題がもたらす影響の一つとして今年度は「気候変動」をテーマにSDGs達成の担い手としての活動を行った。まずは、「気候変動」についての知識を身につけるために、映像資料を活用して学習に取り組んだ。4～5時間目では日本科学未来館によって作製された「気候変動から世界を守れ！」のワークショップを行った。生徒たちは各国の代表として国連会議に参加し、自分の国だけでなく、世界全体を守るために何をしなければいけないかについて実践的に考え、意見交換を行った。教室の中で5か国だけの話し合いであったが、それでも意見をまとめるのは難しく、世界全体で同じ方向性を出していくことは難しいと感じる生徒が多くいた。今回の学習のまとめとして、班ごとにアクションプランポスター制作を行った。それぞれが日常生活の中でできる取り組みをポスターにし、呼びかけを行った。また、今回の作品をSDGs全国子どもポスターコンクールに応募した。

### 中学2年生 「総合的な活動の時間」「キャリア学習」

2学期はキャリア教育として、職場インタビュー・キッザニアでの職場体験を行った。また、現役高校生で法人団体の理事を務める卒業生に「進路」について講演をしてもらった。2学年までのキャリア教育の総括として、Googleスライドを活用して、プレゼンテーションを行った。それぞれが自分の考えとして、まとめ、他者に伝えるよい機会となった。

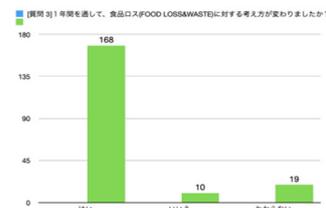
### 中学3年生 「総合的な活動の時間・英語」「気候変動」

総合的な活動の時間で「気候変動」について知る時間として3時間映像学習等を行った。そこから「気候変動」に対するアクションプランを考える活動へつなげ、個々にアクションプランポスターを制作した。その後、英語の教科書に記載されている環境問題のテーマと関連付け、ポスターを活用したショートスピーチを行った。2月にはギリシャと気候変動についてのオンライン会議を実施予定である。英語を活用し、各国の取り組みや考え方を討論する。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) アンケートを実施し、生徒の変容を可視化

昨年度から、総合的な学習の取り組みの変容を可視化するために、全校で4月と3月にアンケート調査を実施している。昨年度の末には「学習を通して食品ロスに対する考え方が変化した」と80%以上の生徒が回答した。今年度の初めに行われたアンケートでは「気候変動を知っているか」について60%の生徒が「わからない」と回答した。4月に実施することで、どのような授業にしていけるかについて方向性を検討することができた。



### (2) ICTを活用し、個別最適化され、創造性を育む教育

これからの Society5.0 時代の中で、個別に最適で効果的な学びや支援が必要となる。今までは各学習の取り組みとして、紙媒体で行われることが多かったが、プロジェクト型学習を行うことで、ESDを通して育成したい資質・能力の「問題解決能力」「自己理解と他者理解」「コミュニケーション力」を育むことができるようになってきた。また、ディスレクシア傾向の生徒などもデジタル機器を使用することで、まとめ学習などを平易化することができた。「誰一人取り残さない」という視点においてもデジタル機器を使った授業は有効的である。ただし、教職員の共通理解や端末の有効的な活用の仕方については今後もまだまだ課題が残る。生徒だけでなく、教職員全体も時代の流れに合わせ、予測不能な未来を生きる子どもたちのための教育の実現化を図らなければならないと感じる。



国際交流に向けて英語で学校紹介 VTR を作製。編集もすべて生徒が行いました。

## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 生徒たちがSDGsや環境問題に対して、主体的な態度を養うことができる教育活動

学校全体で月に2回、SDGsに関する新聞記事を読むことで、どのような問題が起きているかを知ることができた。また、それらを解決するために自分たちに何ができるかを考えることができた。全体で取り組むことにより、生徒会やボランティア同好会の活動において、生徒が主体となってSDGs達成のために活動する姿が多く見られるようになった。

### (2) オンラインを利用することで、新しい考え方を身につけ、国際理解につなげる活動

昨年度、カンボジアの子どもたちの未来をサポートしている学生団体とオンライン交流を行った。参加した生徒たちは世界の貧富の差の現状を痛感し、今後の活動に向けて考えることができた。参加した1人の生徒はこの交流で学んだこと、考えたことを国際平和スピーチで発表し、横浜市長賞を受賞し、ピースメッセンジャーとして、今年の10月にNYで会議を行った。オンラインを活用することで、様々な活動や働きを行っている人々とつながることができ、生徒たちがより新しい知識を得ることができる機会となっている。生徒たちが幅広い視野を持てるような取り組みを今後も行っていきたい。

### (3) 横断的な授業づくり

問題解決型・参加型体験を通し、個々の生徒に適した生きる力の育成に努めた。各学年で「主体的・対話的で深い学び」である調べ学習やグループ討論などの手段を各教科で用いて学習する機会を設けた。総合的な時間に学んだ「気候変動」については、さらに家庭科や英語科で発展させ、身近な問題から世界へと視野を広げることができたと感じている。

## 横浜市立相沢小学校

学校教育目標「**学びあい 認めあい 支えあい 夢をはぐくむ あいざわっ子**」

【知】自ら考え 学び続ける子を育てます 【徳】自分も 周りの人も 大切にすることを育てます  
【体】進んで 健康的な生活をする子を育てます【公】自分の役割を考えて 行動する子を育てます  
【開】目標に向かって ねばり強く取り組む子を育てます

ESDを通して育成したい資質・能力

本校の教育課程全体を通じて教科等横断的に育成を目指す「資質・能力」に関連させて、各ブロックで育成したい資質・能力の見直しを行った。「人・もの・こと」とのつながりから相手意識をもち、自己の考えを伸長し、未来へはばたくことができる児童の育成を目指している。

**低学年・個別支援学級** 他者と協力する力

**中学年** コミュニケーションを行う力

**高学年** 多面的・総合的に考える力

### 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

<p><b>個別</b></p>  <p>みんなの好きなものが分かってくれました。</p>	<p><b>個別支援学級「国語」「すきなもののなあに」</b> 自分の好きなものについて、一人ひとりが様々な表現方法で発表会を行った。発表会を通して、友だちの好きなものや得意なことを知ることによって、<u>少しずつ他者意識が芽生えた</u>。普段の生活の中で<u>互いを意識することが増え、挨拶を交わしたり困っている友達を手伝ったりする姿が見られるようになった</u>。</p>
<p><b>3年</b></p>  <p>大豆がとれたよ！ どんな料理ができるのかな？</p>	<p><b>3年生「総合的な学習の時間」「カラフル大豆大作戦」</b> 「大豆」を通して、食物の命の大切さを知り、調べ学習をする中で大豆の力（栄養）のすごさに気付いた。給食で大豆料理の残食が多いことに注目し、みんなに大豆を好きになってもらうために、<u>自分なりに考え、友達と交流し、食の大切さや有難さをどのように伝えていくのかを考えた</u>。一人では解決できない課題に対して、仲間と思いを伝え合い、協力しながら取り組むことで解決につながっていくよさを感じた。</p>
<p><b>5年</b></p>  <p>農家の仕事って大変だな…。</p> <p>赤ちゃん、思ったよりも重たいね。優しく抱かないと。</p>	<p><b>5年生「総合的な学習の時間」</b> 「いのち魂 ～守ろうよ 命の重み 感じ隊～」 「いのち」をテーマに教科学習とつなげて、妊婦体験や赤ちゃんふれあい体験、助産師や保健師、動物愛護センターの職員の方などに取材を行い、身近な命やそれを支える人々について<u>様々な角度から考える活動</u>を行った。また一年間を通して、米作りを行い、農協の方からも話を聞き、食の面からも命について考えてきた。「いのち」や「生きること」がかけがえのないものであることに気付き、<u>自分自身や周りの人を大切にしようとする態度や考え方を身に付けた</u>。</p>
<p><b>6年</b></p>  <p>今の自分にできることって、何だろう？</p> <p>ボッチャを体験。あいざわっ子発表会で、保護者や全校の人にも体験してもらいました。</p>	<p><b>6年生「総合的な学習の時間」</b> 「一人ひとりの行動で世界が変わる！」 身近な地域から広い世界に目を向けることで様々な「違い」に気付き、その違いをなくすために<u>今の自分たちにできることを考えて活動</u>してきた。SDGsの6つの目標を中心に相沢の地域や世界の問題について調べ学習をしてきた。障がい者スポーツ体験や大学生とのオンライン交流（アンコンシャス バイアスについて）、地域のスーパーでの見学（フェアトレードについて）によって<u>自分たちの今のものの見方を認識し、今後の自分たちの生き方について考えることができた</u>。</p>

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 本校に適したESD部会の運営の仕組み、年間の活動計画の見直し

校内に「ESD部会」を設置して2年目を迎えた。昨年度は発足した初年度で、どのように取組をしていったらよいか分からず、教職員への周知も不十分に終わった。この反省を生かして、今年度は部会の在り方を見直し、年間を通してESDが推進できるような活動を考えた。ESD情報交換会で得たことを部会内で共有し、その中で本校に合った取組を考え実践した。その結果、部会を中心に少しずつESDが教職員へ伝わってきているが、取組を行っているよさがあまり実感できず、負担感がある。重点研推進委員会や学力向上委員会など他の部会とも連携しながら、目指す資質・能力を明確にし、年間を通して行う取組を計画的に実施していけるようにしていく。

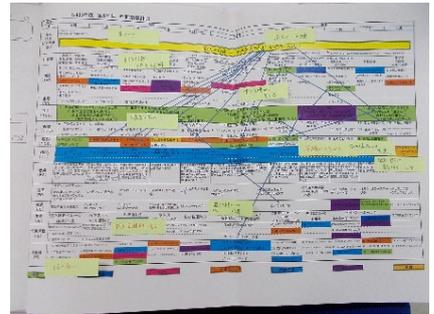
### (2) アンケート調査を通した子どもたちの実態把握や変容の見取り

前期・後期に、児童に対してESDの「構成概念」「資質・能力」に関するアンケート調査を実施。アンケートを行ったことで、子どもたちが今どんなことに興味・関心があり、どのようなことを大切にしているのかなどの実態を把握することができた。アンケートの結果をもとに、各学年の活動の計画をした。ブロックごとに設定した「ESDを通して育成したい資質・能力」と関連させて、総合的な学習の時間を中心に活動した。今年度は、アンケートで児童の実態把握までしか行えなかったため、次年度は児童へフィードバックし、教師だけでなく児童自身が自分の考えの変容に気付けるようにしていく必要がある。

## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) ESDカレンダーを活用した年間指導計画の見直し、実践

年度初めに部会で、学校教育目標と教育課程全体を通して教科等横断的に育成を目指す資質・能力と照らし合わせ、各ブロックのESDを通して育成したい資質・能力を決定した。その資質・能力をもとに4月に研修を行い、各学年のESDカレンダーの見直しを実施。各教科・領域でどのような活動ができそうかを具体的に話し合い、年間を通しての活動のイメージをもつことができた。学期末にはブロックごとに振り返りをし、成果と課題を共有した。今年度初めての取組だったため、教職員主体の振り返りになってしまった。次年度は、活動と児童の様子・変容とを関連付けて、振り返りを行っていくよう改善していく。



### (2) SDGsに関連付けた委員会活動の取組

SDGsに関連付けた教科・領域の指導を継続して行っていくうちに、自然と子どもたちもSDGsへの関心が高まった。その結果、委員会活動でもSDGsに関する取組を行うようになってきた。運営委員会では、「誰にとっても居心地のよい学校とはどんな学校か」を考え、活動した。その中で「みんなにスマイルを届けようプロジェクト」を計画し、全学年が当番制であいさつ運動を



行った。プロジェクトを通して、様々な学年と関わり、自分から声をかけようとする姿が見られた。

横浜市立旭小学校

学校教育目標 あかるく さわやか ひとみきらきら あさひっこ

～思いをもつ力 やりぬく力 関わる力～

ESDを通して育成したい資質・能力

「思いをもつ力」「やりぬく力」「関わる力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



おおきくな～れ

今と違って大変だな



バルーンアートのやり方を知る

今年度スタートしたSDGs委員会



### 3年生（学級） 「総合的な学習の時間」

#### 「3-1植物プロジェクト」

学年の畑の雑草が伸びていて、誰も手入れしていないことを知った。すると、自分たちで植物を育て、学校のみんなどに見てもらったり、食べてもらったりしたいという思いが芽生えた。育てていく中で、網を張ることや水やりの頻度など植物の成長を見据え、計画を立てる姿が見られた。また、どんな植物を育てたいか、畑に建てる看板をどのようなデザインにするかなど、積極的に関わり意見交換をしていた。限りある植物の命を枯らさないように、これからも大事に育てていこうとしている。

### 3年生（学年） 「社会」

#### 「かわる道具とくらし」

地域の方が昔の道具を保存されていることを知り、学校に持ってきてもらい、実際に子どもたちが触れられる機会を設けることにした。炒った大豆を石臼で挽く体験や水汲みポンプを使い洗濯板で洗う体験した。昔の生活の道具に触れた子どもたちは、水汲みポンプやかまどを一人ですべてを扱うことは大変だと感じ、家族同士が協力し合って家事をしていたと気づき、体験を通して多面的に考えることができた。

### 6年生 「総合的な学習の時間」

#### 「旭活性化委員会」

121年目の新たな門出にと、より元気で明るい学校を目指したいという思いを抱き、学校を活性化させる取り組みが始まった。まずは、鶴見西口活性化委員会の事務局長さんの話を伺った。活性化の心得を学び、鶴見西口活性化の企画に参画することで学校の活性化に生かせるヒントを探した。実際に、バルーンアートや絵の展示、お祭りに携わった。人を集め、人と繋がり、新たな繋がりをつくるのが活性化につながると実感した。

#### SDGs委員会「SDGsを学校に広めよう」

今年度発足した委員会で、「旭っ子のみんなにSDGsを広めよう」をテーマに活動をした。校内に自分たちができるSDGsを示したポスターを貼ったり、図書館にSDGsコーナーを作ったりした。また、低学年とSDGsすごろくを行った。全校に巻き芯集めを呼びかけた「巻き芯プロジェクト」も行った。今は、自分たちが安心できる場（憩いの場）を作ろうとビオトープを復活させる計画が進行中である。全校を巻き込みながら活動が広まりつつある。

## 2 ESDの価値を引き出すために

### 試行錯誤したこと

#### (1) 前期にESD研修を取り入れる

今年度ESD推進校として2年目を迎えたが、教職員の中では、ESDを理解することが難しいという意見もあったため、夏に研修会を開いた。教育活動自体がESDにつながっていることを示した。今年度は学年暦にもESDの視点を入れていこうとしたが、まだ導入過程である。

#### (2) 委員会活動をESDと関連付けた取り組み



SDGs委員会では、現在封鎖されている場を憩いの場として復活させる取り組みを行った。ビオトープアドバイザーの方に講師として来ていただきビオトープの意味や大切さについて知った。ビオトープがあることで生物と人がつながっていることを知ることができた。生物にとって住みよい場は人にとっても心地のよい場となると考えた。また、自分たちで設計図を描き、全校の憩いの場となるように計画を進めている。

3 環境教育推進校  
13 環境教育推進校

#### (3) 委員会に取り組んだことによる児童の変容

今年度からSDGs委員会が発足した。自分たち自身でどのように委員会として活動するかを一から考えた。児童の思いを基に活動する委員会となった。また、アンケートをとった結果、委員会に入る前までにSDGsのことを知っていた児童は、90%以上いたが、委員会に取り組み、講師の話を知ったり、自分たちで考えて全校に広めたりする活動を通して、より深く考えるきっかけとなったと回答した児童が多かった。さらに、「委員会はあるものだったか」という質問では、「とても思う」と「思う」と回答した児童を合わせると100%となっており、委員会に対して前向きな考えをもつ



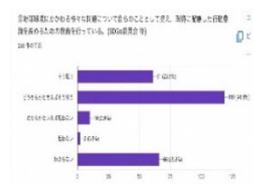
ていることが分かった。一方で、委員会は意味があるものだと感じてはいるが、自分たちの活動が全校に広まっていないと感じている児童が、約30%いる。これは、SDGsのことを意識して行動している児童が少ないことや学校内で話題に上がることが少ないと考えたからだ。活動に見合った成果が得られていないと感じているのではないかと考えられる。

## 3 学校全体でESDを取り組むことによって引き出すことができた価値

#### (1) 教職員アンケートによって見えてきたこと

ESDの能力・態度が児童に身に付いてきているかのアンケートを行った。「コミュニケーションを図る力」や「他者と協力する力」は身に付いてきていると考えている教員は多い。様々な課題を乗り越えるために他者と関わっていく児童が増えたことは、成果だと考える。一方で、「批判的に考える力」や「つながりを尊重する力」が弱いと考えている教員が半数以上いる。これは学校の課題として共有してこれらの力を身に付けるための授業づくりを行う必要があると考える。

#### (2) 学校評価から見えてきたこと



今年度、学校評価アンケートに初めて「地球環境に関わることを子どもが意識して行動する教育

活動を行っているか」という質問を行った。半数近くの保護者が、その意識を高めるために教育を行っていると答えていただいたが、他の項目と比べて、分からないと答えている割合も多かった。外部への発信の仕方を考える必要性を感じた。

#### (3) 子どもたちが学ぶ意義を実感できる教育活動

今年度の重点研究会では、学校目標の3つの力を達成するための手立てを考えている。教師がESDの視点を意識した授業を行うことで、子どもが自ら考え、主体的に学習したいという思いをもつことができるのではないかと考える。

横浜市立本牧南小学校

学校教育目標「元気いっぱい・やさしさいっぱい・何でもチャレンジ南っ子」

ESDを通して育成したい資質・能力



## 「互いのよさを生かし、思いや考えを生き生きと表現する子」

### 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

#### 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

- ・自ら問題を解決しようとする、実践力のある子ども
- ・知識・技能の基本を習得し、健康な体をつくる子ども
- ・地域等の人とのつながりやものを大切にする子ども
- ・社会の変化に関心をもつ子ども



#### ○教職員向け ESD 研修会

東京都市大学環境学部教授

佐藤真久教授による研修会の実施

#### ○重点研究における授業の充実

学級経営の充実・問題解決的な学習の充実・子ども同士の対話を大切にした授業・言語活動の充実

#### ○学校図書館の機能の拡充

学校図書館を「読書センター」「学習・情報センター」として学年・教科の横断的活用を重要視している。子どもたちはもちろん、教職員にとっても重要な情報が集まる「情報発信基地」として、SDGsに関することを多角的多面的に発信している。

#### ○AIロボット「LOVOT」の導入

子どもたちの人権的な心を育む入り口として、学校図書館にAIロボット「LOVOT」を常設し、プログラミング教室の実施をはじめ、授業などでも積極的に活用している。

#### ○シトラスリボンプロジェクトの導入

「学校・家庭・地域の輪」を大切にするコンセプトを導入・展開している。

#### ESD推進校となり2年目の取組（一部紹介）

##### 6年生「総合的な学習の時間」

パラリンピックアイスホッケーの日本代表だった上原大祐選手との出会いを通して、SDGsを意識した取り組みに挑み、思いを表現した。

1組～POWER・大ちゃん先生と一緒に

最高のパフォーマンスを作ろう～



##### 2組～できないできないなんてない

可能性は無限大ステージ～



##### 5年生「社会・総合的な学習の時間」

～わたしたちがつなげる南っ子の Inspire the Next～

本牧のまちに根付く中小企業との連携によるESD推進に着手し、世界に開かれた横浜港に隣接する本牧のまちから子どもたちが未来につなぐ主体的・対話的な学びを開始した。

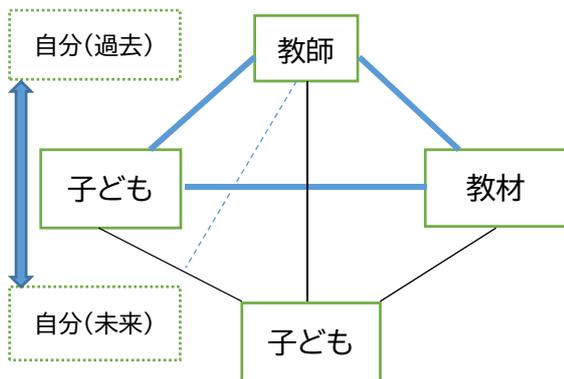


## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 対話的学びを重視

昨年度からESD推進校になったことで、新学習指導要領で示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、本校では特に「対話的学び」の重要性を深く受け止め、どう日々の授業の中で展開していくかという課題を明確にした。

### (2) 授業の成立要件と授業の目的の明確化



(峰 勉「子どもに惚れる:今、教師の感性を問う」2001年)

今年度重視し試行錯誤して取り組んだのは、「子ども同士の対話の充実」である。そのために、教材との出会わせ方や学習展開を積極的に考え実践した。授業中の発言や振り返りを重視し、その子のよりよい成長を促し、対話に重視した取り組みに力を注いだ。そのためにICT機器の活用は非常に有効であることを実感している。



ICT機器を活用した子どもたちのふりかえり

### (3) 国語科・社会科を中心としたSDGs関連 付けカリキュラムマネジメントの活用と精 査

月	単元名・教材名	単元・教材の特色	主な学習活動・(学校得意が実現可能な活動)	関連するSDGsの項目	関連する他の教科
4	つないで、つないで、一つの足跡 (1年級)		・劇の筋を読み、年間の国語学習を見通す ・「つないで、つないで、一つの足跡」の活動の目的と流れを確かめる ・劇に登場する一文を読み、グループで二週する間に物語が分かるようにお話を講ずる		特別
4	・春の国小展賞 続けてみよう (1年級)		・劇を思い浮かべながら音読する ・音読を聞き合い、感じたことを伝え合う		社会・総合
4	1. 視点のちがいに着目して読み、感想をまとめよう ・繰り返し読み (4年級)		・「視点のちがいに着目して読み、感想をまとめよう」という学習課題を設定する ・劇と異色の人物像を考え出す ・二人の心の交流のように変化しなかに考え、その後の二人の関係を整理する ・「感想を書く(視点の例)」を参考に、感想をまとめるための見通しをもち「感想を書き、交流する」		国語
4	・地域の施設を活用しよう		・地域の施設を活用できる施設を探る		社会

令和2年度より作成し活用しているものをさらにブラッシュアップし、日々の授業の中で1年生から6年生に対して、自分たちの未来を見据えたESDを意識した授業展開をしている。

### (4) 情報発信基地としての学校図書館の充実

AI搭載の「LOVOT」やシトラスリボンプロジェクトのコンセプト推進とESDとの関連をさらに強化し、全校での対話を重視した心を育む人権的な取り組みや、ICT機器を活用した学校司書による授業支援の充実を図った。



## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

- (1) 子ども一人ひとりが自分や仲間のもっている考えの良さを学習場面に応じて生かし、自己評価・相互評価しながら、さらにその力を高めていくこと。
- (2) 思いや考えをもち、その実現に向けて意志ある学習活動を展開し、自らの見方・考え方を表現したり、拡大進化させたりすること。



自分たちの地域を愛し、周りの人の存在を受け入れ共生する大切さを実感し、そして世界に開かれた横浜の未来を担うことができる考えを深めていく価値を日常的に引き出している。

横浜市立飯島小学校

学校教育目標「生きるよろこび 学ぶ楽しさ のびのび 飯島っ子」

ESDを通して育成したい資質・能力

「自ら課題を見つけ追究し続ける子」

○自分の思いや気づき、考えを表現し合い、学びを広げ&つなげ&深める授業をつくる。

「共に学び合える子」

○一人一人が自己有用感をもち、学校や地域の一員として、楽しく安全に生活できるようにする。

「学校や地域の一員であることを自覚し、すすんで行動する子」

○人やまちとのかかわりを大切にし、地域や社会のために自ら実践する力を育てる。

○学校外における様々な交流や体験的な活動を積み重ね、豊かなコミュニケーション能力を培う。

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

6年生 「総合的な学習の時間」

「地域を共に創るひまわり学習」(過去年度の実践を含む)

6年生では、「SDGs」のゴールを軸に、クラスごとに活動をした。「Think globally, Act locally」の考えで活動を計画すると、どのクラスも地域とつながった活動になった。

### 【取組①】地域のゴミ拾い活動

地域のゴミ拾い活動をしたクラスは、自分たちで町を歩くことから始め、「自分たちのまちをきれいにしたい。」という問題意識をもつことで、進んで活動することができた。



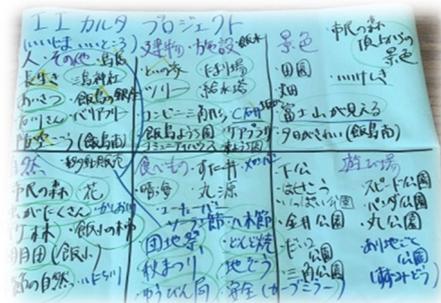
陸のゴミが、川を経由して海へ流れつくことから、海の豊かさを守るためにも、活動期間中は毎週のようにゴミ拾いへと出かけた。自分たちだけの活動に限界を感じると、地域の方とともに清掃活動に取り組むたいと考え、自治会長と連絡をとり、合同の清掃活動を行うことができた。

さらに、この活動が自分たちの卒業後も持続していくものになるようにと、他学年と合同のゴミ拾い大会も行い、下学年の児童とも価値を共有する姿が見られた。

### 【取組②】地域カルタづくり

地域カルタを作製したクラスは、SDGs「⑪

住み続けられるまちづくりを」と「地域カルタ」とを結びつけ、町の魅力の再発見をテーマに活動した。より多くのまちの「よさ」を見つけるにあたり、どのように情報収集したらよいかを考え、学年全員と、保護者へアンケートをとることにした。活動が広がることへの大きな期待を感じていた。



読み札から完成させ、その後絵札の写真の撮影に出かけた。撮影の中で、出かけた先の公園で遊んだり、神社でお参りしたりと、子ども達も体験的にまちのよさを再認識することができた。



「地域カルタ」づくりは、自分たちのまちを再度見つめ直すよい機会となり、意欲的に活動していた。完成したカルタは、卒業制作品として6年生児童に渡すとともに、各教室、自治会にも配付することができた。

## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 「SDGsを知ること」から始める

ESD=SDGsではないが、持続可能な開発のための教育のためには、やはりSDGsを子どもたちが知ることから始める必要があると思い、職員室前にSDGsコーナーを設けた。17のゴールを知るとともに、自分たちにできることがあることを知ることで、日々の生活の中で自分にできることをすることの価値を知らせた。



### (2) 日々の授業の中に位置付ける

持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」を、日々の授業の中で育成することを意識して授業づくりに取り組んだ。特に、コミュニケーションを行う力の育成に重点的に取り組み、国語科の重点研でも対話により学びを広げたり深めたりする場面を位置付けてきた。



5年の国語「グラフや表を用いて書こう」では、意見文の根拠となるグラフや表について、その説得力の有無について話し合う中で、意見文を読む視点の一つに「その資料は、適切か？」(批判的考察)を与えることで、「そのグラフはいつ作られたの?」「どこのデータなの?」と、批判的に考える姿も見られた。



## 3 学校全体でESDに取り組むことによって 引き出すことができた価値

### (1) 一年間の活動→持続可能な活動

先に述べたゴミ拾い活動もそうだが、それぞれの学級の活動が、単発で終わるのでなく、引き継がれたり、継続されたりするようになってきた。子どもの意識の中にも「持続可能」が根付き、活動のゴールを、年度の終わりではなく、もっと先に設定しようとする姿が見られるようになってきた。また、卒業してからも小学校に足を運び、里山の整備を行う子供も見られた。



### (2) 働き方も「持続可能」に

「持続可能な働き方」をテーマに、仕事内容の精選を行ってきた。当たり前のように毎週出してきた「学級だより」を、「本当に必要なのか?」と見直したり、それぞれの職員が所有する教材データを一括管理したりと、一つひとつの変化は小さいかもしれないが、着実に働きやすい職場環境作りを進めている。

### (3) 教科等横断的に育成を目指す「資質・能力」との関連を図る

まだ検討段階ではあるが、ESDを通して育成したい資質・能力を、教科等横断的に育成を目指す「資質・能力」と関連させることで、日々の授業実践を通して育成をしていこうとする動きが生まれてきている。

自分たちで問題(もんだい)を発見(はっけん)し、  
さいごまで解決(かいけつ)できるようになろう!

1 いろいろなことを好む	2 自分の願いをもつ	3 問題を見つける	4 実験(じしけん)を試していることが大分分かる	5 考えた解き方で、やってみる	6 結果から学ぼうとする	7 問題が分かる
8 実験(じしけん)を試していることと自分の予想とを比べる	9 結果が正しいのかをもう一度考える	10 失敗しても何度もやり直す	11 じっくり観察(くわんさん)したり、考えたりする	12 実験(じしけん)に起きていることと「且(かつ)しく」理解する	13 自分たちの解決の仕方を振り返る	14 何が問題(もんだい)かが分かる
15 結果を予想する	16 夢(ゆめ)やあこがれをもつ	17 自分で目標を決める	18 目標(もくひょう)へ向けたやり方を考える	19 協力(きょうりょく)して解き方を考え、やってみる	20 よりよい地域(まち)・世界(よこ)の実現(じつげん)を目指す	21 自分たちの考えが正しいのか、信じているのかをもう一度考える

横浜市立新井中学校

学校教育目標「自立・共生・学び合い」

○自分のよさを知り、なりたい自分を見つけます。(知)

○相手のよさを認め、励まし合い、地域と共に生きる人を育てます。(徳・公)

○命の大切さを知り、持続可能な社会を共に創る心と体を育てます。(体・公)

○思いやりのある、親切な行いを実践し、社会に貢献できる人を育てます。(開)

E S Dを通して育成したい資質・能力

「共に生きる力」「想像する力」「実践する力」

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体



「えかたりーべ」さんによる地域の民話の紙芝居を上演しました。



地域協働本部と一緒にいった植樹の会。



地域の農家と一緒に畑で野菜を育てています。  
絶滅危惧種のメダカを飼育しています。



地域協働本部につないでいただいて、企業での研修を行い、事後発表会を行った。

### 図書委員会

図書委員会での具体的な取組として、SDGs 関連図書の購入と、展示、推薦ポップの作成がある。昨年度は、啓発動画も作成し、全校で視聴した。今年度はさらに、地域の団体「えかたりーべ」と連携し、**地域の民話**の紙芝居を上演していただいた。**持続可能なまちづくり**と、**地域の伝統文化**の継承という視点である。

### 環境保健委員会

**地域学校協働本部**と連携して、校内の緑化に日々努めてきた。今年度は、植樹の会を行い、大勢の参加者で、樹木を植えた。日常的に、緑化活動も行っている。生涯に渡って、**緑と土に親しむ心**と、**まちづくりの心**を醸成している。

他の学校との**交流から学んで**、使用済みの使い捨てカイロの回収も始めた。

### 個別支援学級

**地域の農家**と連携して、農作物の栽培を行っている。農業専業地域でもあり、地域の農家と協働することで、**陸の豊かさ**を実感し、自らのキャリア学習にもつながっている。

絶滅危惧種である、横浜めだかを飼育し、**命の大切さ**を学びながら、環境問題について考えている。

### 職業体験学習

2年生の職場体験学習が実施できない中で、大企業の研修センターを活用して、職業体験学習を実施した。その中で、**SDGsの視点をもって職業について学ぶ**取組をした。

1年生は、地域協働本部と連携して「夢・応援プロジェクト」を実施している。その中に、ソーラーカー体験、離乳食づくり、ドローン操縦体験を取り入れて、SDGs に関連して職業について考える取組をした。

## 2 ESDの価値を引き出すために

### 試行錯誤したこと

#### (1) 授業における意識づけ

学校の教育活動の根幹である授業において、SDGsの内容に関わる学びがどれくらい展開されているか、それが横断的につながっているかを日々検証している。総合的な学習の時間での展開やキャリア教育とのつながりも確認することができた。

#### (2) 地域学校協働本部との連携

新井中学校では、昨年度より引き続き、地域と共に学ぶESDを掲げていて、多くの学びの場を協働で提供している。地域の人たちが、立ち寄りたくなるような場として学校づくりをすることで、持続可能な街づくりにつなげたいと考えている。

#### (3) 生徒会専門委員会の活動

専門委員会での活動は、非常に活発で、他の中学校との交流会を通じて学んだことも、実践に移そうと企画しているところである。昨年度より「地域」と「緑化」をテーマに取り組んできたが、**地球温暖化防止や水の大切さ**への取組もはじまってきた。

## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

(1) アンケートの実施による意識づけと価値の確認（7月と12月に、全く同じ内容のアンケート調査を実施した。）

<教職員>

授業の中で具体的にSDGsを取り上げているか。

77%→84.2%

日常生活でSDGsを意識しているか？

かなりそう思う 22.2%→10.5%

そう思う 61.1%→63.2%

あまりそう思わない 16.7%→21.1%

全くそう思わない 0%→5.1%

<生徒>

SDGsを授業で学んだという意識

66.1%→89%

SDGsを行事、学級、委員会、部活動などで学んだという意識

51.6→75.8%

日常生活でSDGsを意識しているか？

かなりそう思う 6.3%→12.1%

そう思う 47.4%→57.7%

あまりそう思わない 38%→26.9%

全くそう思わない 8.3%→3.3%

生徒の結果は、全ての項目で向上が見られる。価値教育としてのESDが効果を示していると考えられる。また、教師も生徒も、授業の中で、SDGsを扱っているという問いに対して、学習指導要領の改訂も関連して、かなり意識が向上していると考えられる。一方、教師は、学ばば学ぶほど自己評価が厳しくなる傾向があると思われ、自分の日常での意識については、数値が下がっている。

(2) キャリア教育（自分づくり、進路選択）との関連～生徒（1年生）の具体的な言葉～ソーラーカー体験

ソーラーカーがめっちゃ楽しかった。SDGsに関しての事をよく知ってからリサイクルの大事を知った。ソーラーパネルがめっちゃすごい！

ドローン体験

本格的な物を操作できてとても楽しかった。ドローンの操作ができるだけで職業選択の幅がとて広がると思うので、今日習ったことを忘れないようにしたいです。

離乳食体験

じっさいに離乳食を作って食べて見てけっこうつぶがなかったので上手にできました。来てくださった人の話も仕事以外にも赤ちゃんが生まれたときにも役立つので良かったです。

横浜市立南希望が丘中学校  
学校教育目標



今年度はハママーク・Nanki

**学校教育目標** ～挑戦・発信・錬磨～

- 主体的に考え、伝える力と課題を解決する力を高める。【知】
- 人を思いやり、自分や周りを大切にする心を育てる。【徳】
- 様々なふれあいを通し、豊かな心と体を鍛える。【体・開】
- 社会の一員として、広い視野に立ったものの見方や考え方を身に付ける。【公・開】

**育成を目指す資質・能力**

- 自己肯定感・協働・挑戦する気持ち（「学びに向かう力、人間性等」）
- 課題解決力・発信力・コミュニケーション力（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」）

ESDを通して育成したい資質・能力

健康に生きていくために「衣・食」について理解し、自分の課題に気付き、日頃の生活の仕方を見直す活動を通して、主として次のような資質・能力を育成する。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①意思決定したことを実践し続けていくために必要な行動の仕方	②自己の課題を見いだし、解決方法を見通し考え、話し合う力	③将来にわたって自他の健康で安全な生活を送ろうとする態度

1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



## 2 ESDの価値を引き出すために 試行錯誤したこと

### (1) 自己の「衣・食」の課題の改善に向けて、理解を深めること

最初に目指す資質・能力は「① 意思決定したことを実践し続けていくために必要な行動の仕方」です。【知識・技能】として「学んだことを理解し、「衣・食」に関して持続可能な知識を身に付けている。」姿として子どもたちはワークシートを記入しながら、「衣・食」は人間の生命維持や健康及び生活と密接な関わりがあり、重要な役割があることを理解できるように、問いかけ、支援しました。

### (2) 自己の生活課題を見つけるようにする

次の目指す資質・能力は「② 自己の課題を見だし、解決方法を見通し考え、話し合う力」です。【思考・判断・表現】の「世界の実情をしり、自分の生活や行動について振り返り、課題に気づき、解決方法を見通している。」姿として、一人ひとりが考えられるよう、学級の中で共有の報告の場を設けました。また、世界の人々と今の自分とワークシートを記入し、子どもが課題に気づき、解決方法を見通せるように支援しました。



↑ SDGsすごろく(総合)

### (3) 生活改善に向け、生活場面を振り返り、自らの問題と捉えることができるようにすること

実践場面での目指す資質・能力に「③ 将来にわたって自他の健康で安全な生活を送ろうとする態度」があり、【主体的な態度】として子どもたちが「意思決定したことに向けて、継続的に取り組もうとしている。」姿に、継続的に取り組むことができるよう、ガン教育や理科の授業でのアルコールパッチテストなど普段の授業内でも取組をし、見守ったり声を掛けたりしました。声かけにより、動機づけにつながる支援をしました。

## 3 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値



↑ ガン教育講演



↑ アルコールパッチテスト

(1) どうして私たちは服を着るのだろうか？命を守るとはどういうことだろうか？人としての尊厳を守るというのはどういうことだろうか？服を本当に必要としている人々とは？というような話をDVD視聴しながら、実際に私たちはなにができるだろうということ、グループごとに話し合い、そして服を必要としている子どもたちに一枚でも多くの服を届けるために、ユニクロと協力して服を集めることの意味を学びました。

(2) WFP講演を聞いた後に書いた感想の中の、印象に残った言葉はという質問に、『日本の食品ロスは国連WFPが支援しているものの約1.4倍ということ。私たちの周りでは、あまり貧困という言葉はなじみのない言葉です。だからこんなにロスが大きくなってしまっているのではないかと思います。』や『子どもの腕がペットボトルのキャップからゴルフボールくらいの腕の太さだということが印象に残った。』『他の地域（貧困の地域）は学校に行く理由が給食を食べることと自分たちとは目的が全く違うこと。』などがありました。



最後に、今現在、子どもたちがデザインをしたエコバック作成している真っ只中です。まだまだ、挑戦し続けます！！

横浜市立豊田小学校

学校教育目標「豊にかかわり、じっくり考える キラッと☆かがやく豊田っ子」

ESDを通して育成したい資質・能力

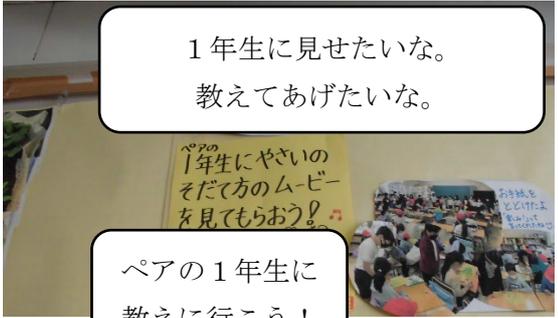
「問題を発見する力」「試行錯誤する能力」「協働的に行動する姿勢」「好奇心」

「他者を理解する態度・自己を理解する姿勢」「伝え合うことで自分の考えを深化させる力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

1年生に見せたいな。  
教えてあげたいな。

ペアの1年生に  
教えに行こう！



ほうれん草を育てるぞ。



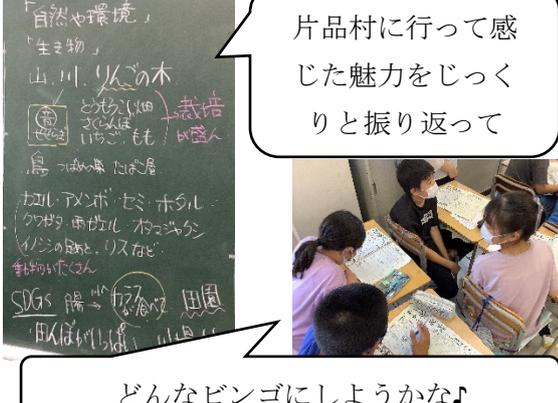
牛って大きいな。ここで牛乳が搾られているんだな。



片品村に行って感じた魅力をじっくりと振り返って



どんなビンゴにしようかな♪



### 2年生 「生活科」 「ぐんぐんそだて おいしいにじいろやさい」

子ども達が自分たちの手で継続的に植物を栽培する活動を通して、おいしい野菜を大切に食べたいという思いをもち、植物に親しみがもてるようにした。また、毎日の食への興味、関心を高め、食べ物を大切にしたり、自分が食べられる量を残さずに食べたりする意識を育てることを目指した。

野菜の育て方について、国語、道徳、学級活動（2）などでの横断的な学習を進め、ムービーを作るという活動を設けた。地域の「グリーン支援隊」や栄養職員など人のかかわりを深めつつ、学校案内や運動会で、ペアで活動してきた1年生に見せたいとの思いから、相手意識を明確にもちながら活動を継続することができた。ムービー鑑賞会では、自分の野菜への思いをペアに伝えるとともに、1年生に分かりやすいように工夫しながら、積極的にコミュニケーションを図ることができた。

### 4年生 「総合的な学習の時間」 「小野ファームプロジェクト」

お世話になった小野ファームは、生産、加工、販売をこの地域で行っている。子ども達には生産、加工、販売のそれぞれの過程を整理して調べたり、一連の生産活動を通してのよさを分析したりして多面的に捉えてほしいと考えた。小野ファームの牛舎の見学では、大きな牛を目の当たりにして、ここから牛乳が産出されることが分かりおどろいていた。

この牛乳からできた横濱アイス工場のアイスクリームを給食に出してもらおう、とプレゼンの演習を行った。このプレゼンを成功させ、今後の学習につながるようにしたい。

### 6年生 「総合的な学習の時間」 「片品村盛り上げ隊」

本校は、以前より修学旅行で片品村・日光へ行っているが、最初は片品村について詳しく知っている児童はほとんどいない。そこで、事前学習を通して、所在地はもとより、村の人口や特産物・自然などの特徴について調べた。すると、たくさんの魅力的がある場所であるにも関わらず、村の人口が昔よりだいぶ減っていたり、住人の高齢化や若手の労働力不足が問題になっていたりに気付いた。

そこで、まずは、次に片品村へ行く5年生に、自分たちが片品村で実際に過ごして実感したたくさんの魅力を伝えることを目標に活動を始めた。来年、5年生が修学旅行に行った時に楽しめる魅力ビンゴの内容を工夫して作り、ぜひ多くの魅力が伝わればと願って渡した。

横浜市立鉄小学校

学校教育目標「人とかわり 創り出す 笑顔あふれる 鉄小」

～まちにふれ、土に親しみ、人から学び、ともにのびゆく鉄の子～

ESDを通して育成したい資質・能力

「まちの伝統・文化や自然環境を大切にし、自らできることに取り組もうとする姿勢」

「人とのコミュニケーションを通して、相手の文化や考え方を理解・尊重し、行動しようとする力」

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体

まちの伝統・文化や自然環境を大切にする力



### 1年生 生活科「サツマイモの栽培」

地域の農家の方の指導で、さつまいもの苗植えから草取り、収穫を通して、土と親しみ、地域の方とのコミュニケーションを図る。自分の住むまちを知る。

### 2年生 生活科「野菜を育てよう」

地域の方のご指導の下、夏野菜栽培、土づくりから、苗の植え付け、水やりや収穫を行うことで、地域の農業について知り、主体的に活動する姿勢を養う。

冬野菜栽培に向け、土づくりを再度行うことから始め種まき、間引き、育成及び収穫を行うことで、野菜作りの知識を深め、農家の方の思いを知る。

### 3年生 総合的な学習の時間

「梨の栽培」「梨の不思議大作戦」

「脱穀体験」

地域の方のご指導の下、学校の周りがある梨の栽培に目を向け、受粉から摘果、袋かけ、収穫までの過程を知るとともに、農家の方の梨栽培のご苦労をお聞きし、疑問や課題を見つけ出し、調べて発表する力を高める。

### 4年生 総合的な学習の時間

「まちの良さを発見しよう」

地域の方にインタビューし、まちの歴史を知り、自分が住むまちの良さについて理解を深める。

### 5年生 総合的な学習の時間

「稲作～種籾から稲刈りまで」

地域の方のご指導の下、良好な種籾を選定する塩水選から行い、自分たちで稲の苗を育て、その過程についてまとめて発表する。全校で行う、田植え、稲刈りの中心となって、次年度の稲作につなげる。

### 6年生 総合的な学習の時間

「稲作」

前年度中心となって行った稲作について、下の学年に指導するとともに、地域の方への感謝の気持ちを持つ。

横浜市立並木中学校

学校教育目標「共生 ～仲間とともに高め合える人～」

ESDを通して育成したい資質・能力

道徳や特別活動、各教科との関連性を重視しながら、問題解決的・体験的学習に取り組み、持続可能な社会に向けて、問題解決能力やコミュニケーション能力を育成することを目指す。

## 1 ESDを通して育成したい資質・能力の具体



【1学年環境学習】



【1学年福祉体験学習】



【2学年平和学習】



【2学年職場体験学習】

「共生 ～仲間とともに高め合える人～」のという学校教育目標から

- 気づき、考える力
- 先を見据えて行動する力
- 発信する力・伝え合う力

という育成したい資質・能力を設定した。

それを、「総合的な学習の時間」を核として、道徳や特別活動、各教科との関連性を重視しながら、問題解決的・体験的学習に取り組み、持続可能な社会に向けて、問題解決能力やコミュニケーション能力を育成することを目指した活動を行っている。

### ○総合的な学習の時間

#### 【1学年】

目標	環境や福祉の目標に視点を置き、身近なSDGsの取組を知ることで、課題を自分事と捉え、将来自分はどのように目標達成に貢献できるかを考えることができるようにする。
具体	環境学習 福祉体験学習 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

#### 【2学年】

目標	人権や平和、経済や産業の目標に視点を置き、働くことの意義や持続可能な経済成長が実現できる社会に向けて自分ができる取組を考えたり、職場体験を通して感じたこと自分の進路選択に生かしたりすることができるようにする。
具体	平和学習/校外学習 職業講話/職場体験学習 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

#### 【3学年】

目標	誰もが安全・安心に暮らせるまち、伝統や文化の継承の目標に視点を置き、修学旅行や調べ学習を通して学んだことを積極的に発信できるようにする。
具体	修学旅行 進路学習 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

## 2 学校全体でESDを取り組むことによって 引き出すことができた価値

### 【環境学習の振り返り】

『SDGs』とはなにか理解していましたか」

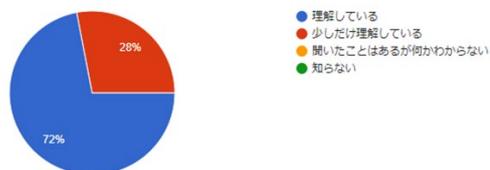
【入学前】「SDGs」とはなにか理解していましたか。

50 件の回答



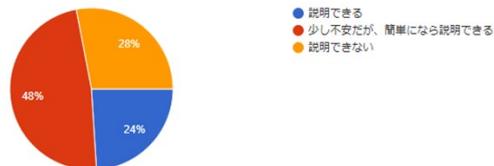
【現在】「SDGs」とはなにか理解していますか。

50 件の回答



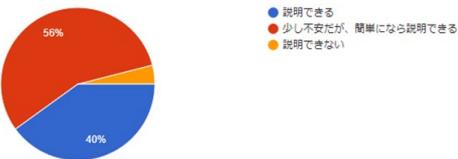
【入学前】「SDGs」とはなにか説明できましたか。

50 件の回答



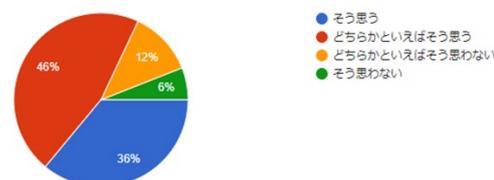
【現在】「SDGs」とはなにか説明できますか。

50 件の回答



【A】これまでの中学校での学習を通して、SDGsへの興味・関心は高まりましたか。

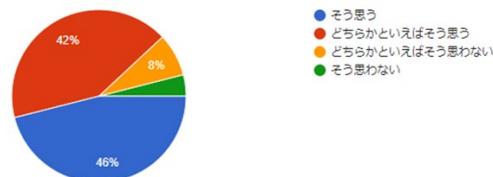
50 件の回答



「これまでの中学校での学習を通して、SDGsへの理解は深まりましたか」

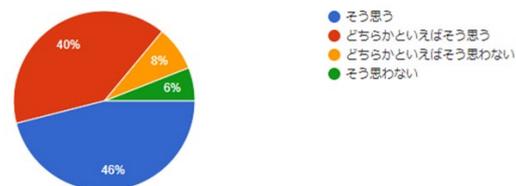
【B】これまでの中学校での学習を通して、SDGsへの理解は深まりましたか。

50 件の回答



【C】これまでの中学校での学習を通して、SDGsに関する行動をしたいという意欲は高まりましたか。

50 件の回答



本校は2年前からSDGsに関連付けた学習を始めた。今回は、1年生の取組にフォーカスをして、環境学習後に「SDGsへの理解・説明」、「学習を通しての考え」の変容をみるためにChromebookを活用して学年全員にアンケートを実施した。その結果から、小学校で学んできたSDGsへの理解が生徒の意識の中では深まっているように感じる。生徒たち自身に「行動宣言」という形で、自分に何ができるのかを考えさせた。学習直後は、行動を起こそうとする姿勢が見受けられた。今後、後期の福祉体験学習後にアンケートを実施し、こちらが求めている身につけさせたい力と生徒の実際の乖離を縮めていきたい。

今後3年間でどのような学びができ、そこから生徒がどんな価値が得られるのかを見ていきたい。

## 横浜市立希望が丘中学校

学校教育目標「人を愛し、人に愛されながら、夢や目標をかなえるために」

- ① 考えを形成し、伝え合うなかで集団の考えを深化・発展させる能力を身につける 【知】
- ② 他者の考えや思いを受け止めて聴き、寄り添う態度を身につける 【徳】
- ③ 安全で健康的な生活を営むために、基本的な生活習慣を身につける 【体】
- ④ 決まりを理解し、集団のなかで、協働・協調する姿勢を身につける 【公】
- ⑤ 自身の意思を決定し、意図的・計画的に表現する実践力を身につける 【開】

E S Dを通して育成したい資質・能力

「課題解決能力」「仲間と協同する力」「世界の問題や課題に目を向ける力」

### 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体

#### 全校生徒 「生徒会活動」

##### 「フードドライブ活動」

生徒会本部と福祉厚生委員会が中心となりフードドライブ活動の宣伝と運営を行った。この活動を通じて、SDG s であげられている世界の課題を自分のこととして捉え、他者と協働しながら解決に向けての手立てを考え、実行していく力を育成していく。

##### ※フードドライブ

食品ロスを減らす取組。家庭で余っている食品を回収し、子ども食堂や貧困家庭へ配布する。

##### 【宣伝活動】

地域と全校生徒に向けてのチラシ作りをしたり、ポスターを作成し校内に掲示したりした。またお昼の放送にてフードロスに関する劇を行い、旭区のフードロス問題の現状やフードドライブ活動とは何かについて全校生徒に伝えた。

##### 【当日】

当日は、生徒会本部の生徒と福祉厚生委員会の生徒が協力し回収作業を行った。

地域の方々もたくさん参加してくださり、合計 66 キロになる手付かずの食品が集まった。



↑ 当日の様子



↑ 集まった食品

### 2 E S Dの価値を引き出すために

#### 試行錯誤したこと

##### (1) フードロス問題と自分たちの関係性についての理解を深めるための出前授業

活動の前に、なぜこの活動を行うのか、自分たちとフードロスの間にはどのような関係があるのかを知るために、旭区資源循環局による出前授業を行った。自分たちの住む町のフードロス問題について実際に働いている人から学ぶことで、より問題を自分事としてとらえることができているように感じた。

##### (2) 他の委員会との協同運営

ポスターの作成依頼や当日の活動運営を福祉厚生委員会と生徒会本部で協同して行った。

この協同を通して、フードドライブ活動においても、自分たちだけで活動を完結させるのではなく、他の団体と協同する視点を持つことができるようになったと感じた。

### 3 学校全体で E S D を取り組むことによって

#### 引き出すことができた価値

上記したように、問題を自分事としてとらえる力、活動を通して他者と協同して課題に取り組む力を育むことができた。まだ活動の途中であり、年明けにある第 2 回フードドライブ活動に向けてさらに活動を広げていくことで、課題解決能力のさらなる育成が期待できそうである。

横浜市立義務教育学校緑園学園

学校教育目標「真のグローバル人材に 自主 協働 創造」

E S Dを通して育成したい資質・能力

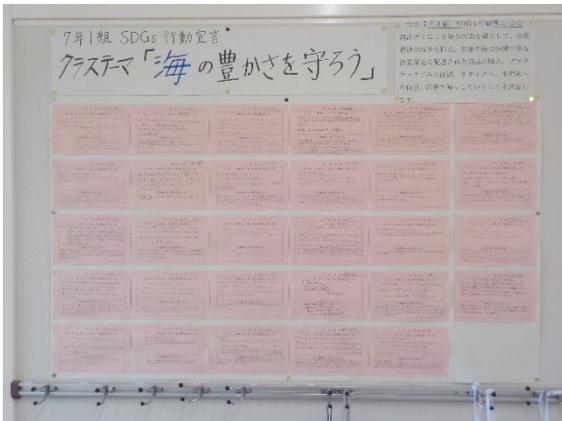
- ・未来像を予測して計画を立てる力
- ・他者と協力して課題解決しようとする態度
- ・つながりを尊重する態度

## 1 E S Dを通して育成したい資質・能力の具体

未来像を予測して計画を立てる力



ロイロスクールノートを使いながら、クラスで協議する様子。



クラスで取り組む目標を実現していくための個人目標として行動宣言文を作成。

つながりを尊重する態度

三崎中学校との交流学习を通して育成

- ・Me e tの活用
- ・自然教室での訪問

7年生 「総合的な学習の時間」「国語」

SDG s 行動宣言文を考えよう

○総合的な学習の時間

日本ユニセフ協会のサイトでSDG s 「世界を変えるための17の目標」を確認。その中からクラスで取り組む目標を選んだ。その際、候補にあがった目標について、シンキングツール（KWL）を使いながら情報を整理し、自分たちのクラスで取り組む目標を選んだ。

○国語

クラスで選んだ目標について、目標の内容やその問題点、自分にできることをまとめたレポートを書いた。書き上がったレポートを生徒どうして読み合い、質疑応答を行った。それらの活動を踏まえ、今後の生活の中で各自がSDG sを実現していくための行動指針を「行動宣言文」にまとめた。

他地域の中学校との交流学习

自分と他者とが時間と場を共有しながら互いに学び合い、つながり合う課題解決学習を、三浦市立三崎中学校との交流学习にて行う。三崎中学校に交流学习を依頼したのは、林や森の多い地域に暮らす本校生徒と、海と共に生きる三崎中の生徒とが、互いに多様な立場の人々とのつながりを実感しながら学習を進めることをねらいとしたためである。

交流学习のテーマは、「海、陸、ジェンダー、教育、貧困、住み続けられる街づくり、温暖化、国際、平和」の9つに設定した。それぞれの学校で、ひと班にひとつずつテーマを割り当て、同じテーマを学習する班同士が交流しながら学習を進める。

最初の交流ではMe e tを使用。回線を9つ用意し、それぞれの班が同時に交流する。お互いの学校についてと自己紹介、今後調べていく内容を共有する。ここでお互いが出し合った疑問を生かしながら、今後の学習を進めていく。

来年度 of 自然教室で合同発表会

今後については、本校では学年としての取組目標を「海の豊かさを守ろう」に絞り3年間の学習を進めていくこととした。来年度に関しては、本校が実施する自然教室の中で、本校生徒が三崎中学校を訪問し、お互いが学んだ内容についてポスターセッションを行う合同発表会を実施する予定である。



# 第2章

協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する  
調査研究報告書 ver. 4（総括編）

令和4年度

SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業：教育（学習）効果の評価・普及

横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム

## 協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究

### 報告書 ver.4（総括編）

米原 あき（東洋大学／インド工科大学）

本報告書は、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM 2019-21』を「実践編」とする二部構成になっています。本編の実践事例の詳細は、「実践編」をご参照ください。なお、みなとみらい本町小学校編『ESD BOOK feat.MM』シリーズは、当該小学校 HP にて公開されています。  
(<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212,html>)



1. はじめに：本報告書の目的とこれまでの概容
2. ESD における協働型プログラム評価の意義：協働的で創造的な評価の必要性
3. ESD の評価とマネジメント：学校現場から生まれた工夫と知見
  - (1) 一年目[導入]：じぶんたちの ESD ロジックモデルづくりと評価指標策定
  - (2) 二年目[進展]：ESD ロジックモデル改定の手続き
  - (3) 三年目[展開]：学校運営協議会における ESD ロジックモデル・ワーク
  - (4) 四年目[深展]：児童との協働による学級単位のロジックモデル策定
4. 総括と展望：協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメントの拡張可能性
  - (1) どのようにして他校に広げるのか：スケーリング・アウトから革新的スケーリングへ
  - (2) 拡張の際の留意点：協働型プログラム評価のキモ

Box. 1：プログラム評価とは

Box. 2：「協働（co-production）」概念とは

Box. 3：ESD ロジックモデルの4つの機能

Box. 4：協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメントのスケーリング手順

## 1. はじめに——本報告書の目的とこれまでの概要

本報告書は、文部科学省『SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業』におけるカテゴリー（3）『教育（学習）効果の評価と普及』（受託者：横浜市教育委員会 ESD 推進コンソーシアム）の一部として実施されている、評価に関する調査研究事業『協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメント実践に関する調査研究』の成果をまとめたものである。上記の事業および調査研究は令和元年度から開始されており、今年度で4年目を迎えることとなる。本報告書は、これまでの4年間を振り返り、俯瞰するための「総括編」という位置づけで作成されている。

本調査研究は、ESD のような、多様で動的な教育活動の評価を検討する際に、従来型の実績評価の考え方を適用しようとすること自体に無理があるのではないか——換言すれば、従来型の評価の枠組を乗り越えて、異なるパラダイムで評価を捉え直す必要があるのではないか——という問題意識のもとに計画された。この問題意識を具体的なアクション・リサーチにつなぐ方法として「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、参加型の形成評価によって、ESD の理念をスクール・マネジメントやカリキュラム・マネジメントに活用するという試みに取り組んでいる。

このアプローチのもとでは、児童個人の学習評価でも学校評価でもなく、ESD という取り組み＝プログラムの総体的な評価が行われている。この評価活動の目的は、児童の達成度を総括評価・相対評価することや、学校のパフォーマンスを管理・監督することではなく、(1)ある具体的な理念や教育目標のもとにスクール・マネジメントおよびカリキュラム・マネジメントを行うための道具を提供することと、(2)学校が取り組む ESD プログラムを包括的に計画し、改善するための情報を提供することにある。また、(3)このような評価活動を通して、その学校が ESD によって実現したいと願う価値を関係者と共有できるように可視化することを目指すものである。本研究は、「評価 (evaluation)」という言葉の原義、すなわち「価値を引き出すこと (Extract-value)」こそが評価活動の本質的な機能であるという考え方に立脚している。

初年度の調査研究では、まず、協働型プログラム評価を ESD 評価に適用するにあたっての理論的な検討を行った。そして、その理論枠組みに基づき、本研究のモデル校である横浜市立みなとみらい本町小学校 [小正和彦校長] (以下、MM 本町小学校) の実践を報告した。続く2年目の報告書では、MM 本町小学校における取り組みがどのように進展したのかを考察した。具体的には、一年目に実施された取り組みのサイクルが、どのようにして第2周目のサイクルに架橋されていくのかを検討すると同時に、その実践を支える ESD ロジックモデルが学校現場でどのように受容あるいは批判されているのかを調査し報告した。昨年度3年目の報告書では、MM 本町小学校の協働型プログラム評価が、学校の塀を越えて展開してくる動態に注目した。この挑戦は、期せずして、ESD が「社会に開かれた教育課程」の実現可能性を高めることを実証することにもなった。そして4年目となる今年度は、学級ごとのロジックモデルの応用や、ESD ロジックモデル策定の児童の参加など、これまでの取り組みを一層深めるような「深展」が見られた。本報告書では、これまでの取り組みを振り返り俯瞰しながら (図1参照)、従来の学校評価・教育評価とは異なる、より協働的で創造的な評価パラダイムの要点と課題を抽出したい。

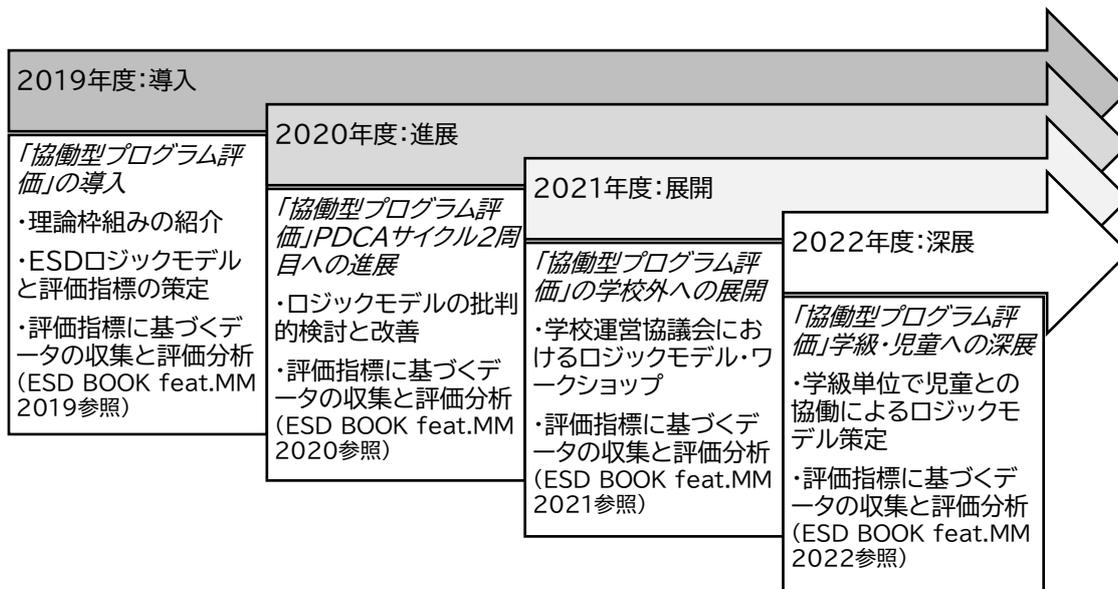


図1 4年間の取り組みの概容(筆者作成)

本報告書の構成は以下のとおりである。まず次節（第2節）にて、改めてESD評価の理論枠組みを概観し、より協働的で創造的な評価のアプローチとそのようなアプローチの重要性を再確認する。第3節では、ESD評価・マネジメントのサイクルを有機的に回すための工夫として、実践現場から生まれた知見を紹介する。最終節となる第4節では、これまでの総括として、協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメントの手法を、MM本町小学校以外の学校や文脈に拡張・応用する際のポイントを整理する。なお、本報告書は随所においてこれまでの報告書の内容を引用している。これらについては逐一引用元を示していないが、下記「参考」にこれまでの報告書の目次を掲示するので、詳細については該当年次の報告書を参照されたい。

図1にも示されている通り、この取り組みの特徴は、毎年の「積み上げ」にある。毎年の具体的な活動の成果、そしてそれらに伴う評価調査・分析の結果は、MM本町小学校編『ESD Book fest.MM』に示されている。『ESD Book fest.MM』は、学校現場の先生方によるESDの内部評価報告書として充実した情報を公開しているのみならず、様々なESD活動の実践事例集としても注目に値する質を備えていることを特筆しておく。本報告書と併せて参照されたい。

なお、本報告書の内容は、筆者個人の責任によって執筆されたものであり、横浜市教育委員会及びMM本町小学校の立場や考え方を表明するものではない。

参考：これまでの報告書目次

#### ■2019 年度報告書目次

1. はじめに——本調査研究の目的
  2. 評価観の転換——ESD 評価を考える視点
  3. 協働型プログラム評価とは
  5. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
    - (1) 【P】ニーズ評価・セオリー評価——“自分たちの”ロジックモデルづくり
    - (2) 【D→C】プロセス評価・アウトカム評価——指標に基づくデータ収集と分析結果
    - (3) 【A】改善に向けてのアクション——『研究のあゆみ』と全体研修による具体的改善
  6. 今後の展望——教育委員会を中心とした「協働システム」と現場の当事者性
- 資料 I. ロジックモデル  
資料 II-a. アンケート調査票(低学年用)  
資料 II-b. アンケート調査票(中高学年用)

#### ■2020 年度報告書目次

1. はじめに——本報告書の目的
  2. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
    - (1) これまでの取り組みと成果
    - (2) 「アクション 2019」から「プラン 2020」へ
    - (3) 重点研「しなやか部会」の活動
    - (4) ESD ロジックモデルは有用か？——MM 本町小学校教員へのアンケート調査より
      - ① LM に対する懸念
      - ② LM 作成上の難しさ
      - ③ 現実の活用への難しさ
  3. 今後の展望——不確実時代のレジリエントな学校へ
- 資料 I. ロジックモデル  
資料 II-a. アンケート調査票(低学年用)  
資料 II-b. アンケート調査票(中高学年用)

#### ■2021 年度報告書目次

1. はじめに——本報告書の目的
  2. 横浜市みなとみらい本町小学校における ESD スクール・マネジメント
    - (1) これまでの取り組みと成果
    - (2) 「社会に開かれた教育課程」の実現にむけて
    - (3) 「協働 (coproduction)」とは
    - (4) 実践：学校運営協議会におけるロジックモデル・ワーク
      - ① 実践の概要
      - ② ワークの目的と運営上の留意点
      - ③ ワークの成果
      - ④ 「協働」の前提条件
  3. 今後の展望——「情報交換の場」から「多様な教育機会の共創の場」へ
- 資料 I. 2021 年度版ロジックモデル  
資料 II. アンケート調査票(児童用)  
資料 III. 保護者-教職員アンケート調査結果

## 2. ESD における協働型プログラム評価の意義：協働的で創造的な評価の必要性

SDGs の評価について考えるとき、ESD が含まれるゴール 4.7 に注目すると、従来の評価観との本質的な違いが端的に表れている。ゴール 4.7 は以下のように記されている。

2030 年までに、持続可能な開発と持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民、および文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解などの教育を通じて、すべての学習者が持続可能な開発を推進するための知識とスキルを獲得するようにする。

また、この目標を評価するための指標として、以下のような指標が提案されている。

ジェンダー平等および人権を含む、(i)地球市民教育、及び(ii)持続可能な開発のための教育が、(a) 各国の教育政策、(b) カリキュラム、(c) 教師の教育、及び(d)児童・生徒・学生の達成度評価に関して、全ての教育段階において主流化されているレベル

SDGs の前身である MDGs の教育目標は、「初等教育の完全普及」であり、その評価指標は「就学率」と「識字率」であった。上記の SDGs4.7 の評価指標と、就学率や識字率との間には、特に次の二点において、本質的な違いがある。

まずひとつには、指標が一意に定義できないという点である。就学率や識字率は、計算上の定義（実就学者数/就学年齢人口など）を一意に定めることができた。それ故に学校間や地域間、あるいは国と国の間で数値の高低を比較することも可能であった。これに対して、ESD が教育政策やカリキュラムにどれくらい浸透しているか、という問いに答えるためには、まず、その国・その地域・その学校において、どのような教育活動を ESD とするのか、それをどのように政策やカリキュラムに位置づけるのか、といった点から再考する必要がある。加えて、それらの意味合いは、国ごと・地域ごと・学校ごとに多様である可能性が高い。すなわち、一意に定められた指標で単純に優劣を比較できるものではない、ということである。

もうひとつの本質的な相違は、客観的なゴールが想定できないという点である。就学率や識字率のゴールが「100%」であることは明白であり、この点において合意を得るための議論が必要になることは、一般的にはないといえるだろう。これに対して、ESD がどの程度カリキュラムや教師教育に主流化されているべきか、何をもってどのように ESD の学習達成度を測るのかといった点については、より踏み込んだ議論が求められると同時に、その議論には多様な価値観の調整が必要になることが予想される。

客観的な指標が立てがたい、また、どのようなゴールに向かうべきかを合意する手続きが必要になるという点において、ESD の評価には、従来の評価とは本質的に異なるアプローチが求められる。客観的な共通指標のもとにその達成度を測るという従来型の評価のアプローチでは、ESD の本質的な評価はなしえないということである。したがって、ESD の評価には、総括評価からより形成的な評価への転換が必要となる。同時に、「どのような教育活動を ESD とするのか」「それをどのようにカリキュラムに位置づけるのか」そして「どのようなゴールを目指して教育活動を行うのか」という問いは、カリキュラム・マネジメント、より広範にはスクール・マネジメントの議論と切り離すことができない問いである。したがって、より本質的な ESD の評価は、必然体にカリキュラム・マネジメントやスクール・マネジメントと深くリンクすることになる。

ここでは、マネジメント的な要素を多分に含む評価の手法として、協働型プログラム評価を導入した。協働型プログラム評価は、ある取り組みの開発や改善に資することを目的とした形成的な評価の手法で、「協働型 (co-production)」という形容詞が指すとおり、評価専門家が中心となって行う外部評価ではなく、評価者と当事者が協働で行う参加型評価の一種である。特に、多様な関係者——ESD の実践でいえば、教師、保護者、学習者、地域の関係者、教育専門家など——がともに (co-) 新たな価値を生み出す (production) ことを目指すアプローチとして、「社会に開かれた ESD プログラム」の開発・改善に適し

た手法であると言えます。

協働型プログラム評価では、議論や協働の機会と場を大切にしながら、当事者自身の問題意識とアイデアで ESD を再定義し、ゴールを設定し、それを評価するためのツール（評価指標や評価調査計画など）を開発し、評価活動をすすめる。これを独立した評価活動として新たに学校の現場に導入するのではなく、カリキュラム・マネジメント、スクール・マネジメントの一環として実装することにより、一般的に「評価疲れ」と呼ばれるような、現場の負担を増やさないように努めるというのも、協働型プログラム評価の特徴のひとつである。

#### Box.1: プログラム評価とは

プログラム評価は、1980年代のアメリカで考案され、普及した評価の考え方である(Rossi et al. 2004=2010; 山谷他 20XX)。取り組みの成果が予想し難い、教育や保健医療などの社会的介入プログラムを評価するための方法として考え出された。プロセスにおける変化やダイナミクスに適應するため、PDCA サイクルの「C」を評価の段階ととらえる「点の評価」とは異なり、「P」の段階から活動の流れに沿って並走する「線の評価」である(米原 2016)。

プログラム評価には、以下の 5 つの評価段階が含まれ、これらの段階が対象となる取り組みの計画段階から実施、評価、改善への流れに沿って、一連の評価活動として機能していく(Rossi et al. 2004=2010)。プログラム評価実践の中でも、一般的な「参加型」以上に当事者との協働を重視するアプローチを「協働型プログラム評価」と呼んでいる(源 2014;2016)。

- 1) ニーズ評価: 受益者のニーズを明らかにする。例えば、「この学校の状況を踏まえると、どのような ESD プログラムが必要か」を当事者間で検討する。
- 2) セオリー評価: ニーズ評価の結果に基づき、具体的にどのようなプログラムを策定するのかを検討する。次節で紹介するロジックモデル等のツールを用いて、「自分たちが ESD を通して実現したい価値や目的(アウトカム)は何か、その目的を実現するためにどのような教育活動(手段)を行うのか」といったことを当事者間で具体的に検討し、「この学校の ESD プログラム」を可視化する。同時に、ロジックモデルに照らして「この目的や活動はどのような指標で成果を判断するのか適切か」についても当事者間で議論し、独自の評価指標を策定する。
- 3) プロセス評価: セオリー評価を通じて策定したプログラムを実行に移し、その成果を当事者が策定した指標でモニタリングする。
- 4) 効率性評価・アウトカム評価: モニタリングによって得られた評価情報を分析し、ロジックモデルに照らして改善に向けての検討を行う。効率性を重視しない性質の取り組みの場合は、効率性評価(費用便益分析など)は行われないこともある。本取り組みにおいては、取り組みの特性に照らして、効率性評価は行わない。

#### Box.2: 「協働(co-production)」概念とは

近年、学校経営や教育行政の現場で「協働」という言葉が頻繁に使われるようになってきているが、公共経営論のなかではいわゆるパートナーシップ(partnership)と協働(coproductio)は異なる概念として使い分けられている(Bovaird and Loeffler 2012; Ostrom 1996)。下図が示すように、パートナーシップとは、あるサービスの提供者間の協力関係を意味する(例:産学連携事業)。小学校と教育委員会が協力してよりよい教育を提供しようとする取り組みなどは、パートナーシップの良例ということになる。

一方、協働(coproductio)とは、あるサービスの提供者と利用者(受益者)が一緒になって、共に(co)公共的なサービスを創り出す(production)という協力関係を意味する(例:市民参加型の政策評価)。Bovaird and Loeffler(2012)は、

協働によって、異なる立場にいる関係者たちが、互いの知見や資源を共有することで、より質の高い公共サービスが提供できるといふメリットを、多くの実践事例をもって指摘している。学校・地域・保護者がアイデアを出し合ってより良い教育課程を創出しようとする「社会に開かれた教育課程」のための熟議、そしてそのような熟議を踏まえた教育活動の実践はこの意味での「協働」であると言えよう。

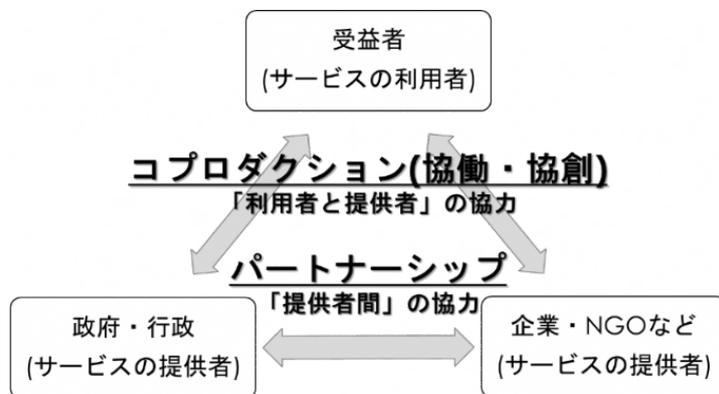


図2 パートナーシップと協働の違い

(出典) Bovaird and Loeffler (2012), Ostrom (1996) を参考に筆者作成

### 3. ESD の評価とマネジメント：学校現場から生まれた工夫と知見

MM 本町小学校 (2018 年 4 月開校) には、6 学年 16 学級に 442 名の子どもたちが学んでいる (2022 年 5 月現在)。開校宣言の中に「豊かな資源を活かし持続可能な社会の担い手を育む小学校として発展する」という文言が含まれている通り、開校当時から学校全体で ESD に取り組んでいる。MM 本町小学校の独自性は、ESD の考え方を、教室の中の教育活動だけではなく、スクール・マネジメントやカリキュラム・マネジメントにも取り入れ、全校的に活かそうとしている点にある。この点においてプログラム評価との親和性が高く、開校当初から協働型プログラム評価が導入され、実践されてきた。以下では、過去 4 年にわたって行われてきた様々な取り組みうち、要点となる取り組みを概観する。詳細については過去の報告書および『ESD Book feat.MM』を参照されたい。

#### (1) 一年目：じぶんたちの ESD ロジックモデルづくりと評価指標策定

一年目の主要な取り組みは、プログラム評価におけるニーズ評価・セオリー評価の ESD ロジックモデルづくりであった。教職員研修や重点研究の機会を活用し、何度かワークショップを繰り返し、「持続可能な社会の担い手を育む小学校」としてどのような子どもたちを育てたいのか、その大きな目的 (最終アウトカム) を意識化・言語化することを試みた。これにより、学校教育目標 (『みな[皆]とみらい[未来]を創る子』) と、育てたい 5 つの資質が言語化され、ホームページやフライヤーに可視化されることとなった。

さらに、当事者である先生方が自ら作成した最終アウトカムのもと、それらを実現するためのより具体的な目的 (中間アウトカム、直接アウトカム) と具体的な教育活動 (手段) を可視化・言語化するための

ワークショップやミーティングを重ね、最終的には MM 本町小学校独自の ESD の取り組みを一望できる「ESD ロジックモデル」が策定された。この ESD ロジックモデルは、その後も定期的に見直され、改善され、また、研修や研究会の機会にも度々活用されている。

### Box.3:ESD ロジックモデルの4つの機能

#### ① 上位のアウトカムを明確化・具体化・自分事化する

ESD の上位アウトカムは抽象的な概念で示されることが多い。例えば「グローバル人材を育成する」というアウトカムは、「グローバル人材とはどのような人物か」という定義が具体的に言語化されていなければ達成不可能な目的である。プログラム評価におけるセオリー評価の段階では、ワークショップや対話をとおして、自分たちの言葉・表現でアウトカムを明らかにしていく。また、より上位のアウトカムが具体的になると、そのアウトカムを実現するためには何が必要なかが芋づる式に明らかになっていく。このように多様な教育活動がより具体的なアイデアとして描出されることにより、教育目標がお題目化することなく、日々の教育活動に活かされやすくなる。また、その言語化の過程が関係者の間で共有されることにより、納得感が生まれ、上位のアウトカムがひとりひとりの自分事になる。

#### ② 上位のアウトカムと具体的な活動との関係を論理的につなぐ

ESD の教育活動は、その多様性ゆえに、個々の活動の質が高くても、学校全体・学年全体としてみたときに有機的な関連性に欠けるケースが多い。ロジックモデルで全体の関連性を可視化することで、個々の活動の位置づけや意味付けが明確になり、「様々な活動の単発・やりっぱなし状況」を「異なる活動間のシナジー効果の創出」へ転換することができる。さらに、「総合学習の活動」と「遠足や運動会などの学校行事」など、種類の異なる教育活動を同じ目的に向かう手段としてみることができ、異なる手段を連携させるなど、より有機的に教育活動を計画することができるようになる。

#### ③ 異なる当事者間のコミュニケーション・ツールとなる

ESD の教育活動は、その包括性ゆえに、学校内外の多くの主体を巻き込むことがあり得る。例えば、「PTA の活動」や「地域との協働」などの取組みについては、PTA や地域の関係者とのコミュニケーションが必要となる。ここで求められるコミュニケーションは、単なる情報の周知ではなく、どのような教育意図(アウトカム)をもってこの活動を行おうとしているのか、この教育活動の成果をどのように活かしていきたいと考えているのか、といった大きな方向性についての相互理解を深めるためのコミュニケーションである。しかしながら、その全体像を度々説明するのは困難で、それができる時間も場も限られているのが現実である。ESD に関する学校全体の取り組みを可視化したロジックモデルは、視覚的に全貌を伝えるツールとしても役立つ。ロジックモデルを校内に掲示したり、保護者や学校運営協議会に対する説明資料として活用することで、コミュニケーションの質を高めることができる。

#### ④ 指標策定の基礎となる

上述の通り、ESD の評価に際しては、当事者が自分たちの価値観に従って評価指標を策定し、自らが考案した教育活動の成果をモニタリングすることが理想的だが、評価指標というと、往々にして「数字にしやすいもの」や「一般化しやすいもの」に偏る傾向がある。ESD 評価を行う際の重要なポイントは、既存の指標にとらわれず、「自分たちが実現したい価値」をどう具体化するのかについて、関係者の間で十分に議論と考察を重ねることである。このときにロジックモデルを活用し、モデル中の「重要なアウトカム・活動」に注目して、それに関連した指標——指標は必ずしも既存の数値指標である必要はなく、質的な指標や、主観的な指標があっても構わない——を考案するとよい。「指標が多様でありうる」という設定自体が、子どもたちや関係者に対して、「価値の物差しは多様でいい」というメッセージを発信することにもなるだろう。

上記の①～④の機能を図示すると以下のようなになる。

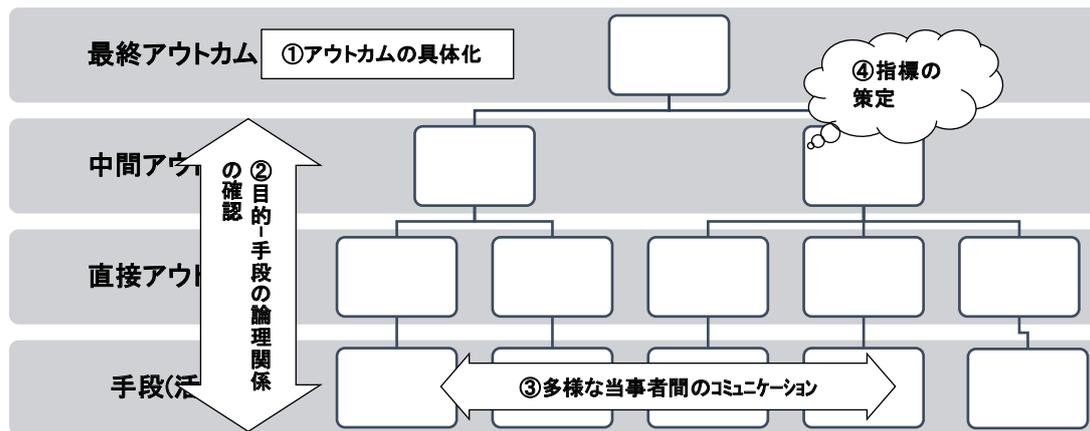


図3 ロジックモデルの機能(筆者作成)

MM 本町小学校では、先生方が考案した評価指標を用いてアンケート調査票を行い、評価データの収集・分析を行っている。アンケート調査票に掲載されている項目は、ロジックモデルに基づいて策定された指標であり、したがって、収集されたデータは、ロジックモデルに示されたプログラムの進捗状況をモニタリングするための情報源となる。定期的に同一のアンケート調査を行うことにより、期待する変化が実際に起こっているかどうかを確認することができ、ここから具体的な改善に資する情報提供が可能になる。この「評価指標に基づくデータの収集と評価分析」(図1)の結果は、毎年の『ESD BOOK feat.MM』に掲載され、関係者との共有が図られると同時に、次年度のESDロジックモデルの改善にも活かされている。

## (2) 二年目：ESDロジックモデル改定の手続き

PDCAサイクルを検討する際に最も重要なのは、「PDCA」のいずれかではなく、それらが形骸化することなく、「サイクル」として、改善に向けて回っていることである。現実には、「評価はやったものの、やりっぱなし」「アンケートはとったものの、とりっぱなし」というケースは少なくなく、評価の結果が実際に改善に活かされるためには、ひと工夫が必要になる。二年目に試されたのは、サイクルを回す仕組みを作り出し、それを意味のあるかたちで機能させることができるかという点であった。

MM 本町小学校では、下図に示されるように、「PDCAサイクル」ならぬ「CDAPサイクル」が考案され、次年度のESDロジックモデルの改善が実践されている。「CDAPサイクル」のワークでは、①アンケートの結果に基づき、それが何を意味しているのか、そこから何が読み取れるのかを、ワークショップを通じて議論していく。ここで評価調査の結果に基づく議論がなされることにより、教員個人の主観的な経験や印象のみに縛られない「エビデンスに基づく改善」が実現されている。同時に、②その調査結果はどのような教育活動がもとになって生まれた結果なのか、という「Do(実施)」に対する「振り返り(Did)」が行われ、③次年度に向けてどのような改善が必要か、具体的な方策が検討される。ここでは各教員の試行錯誤の経験の共有や、悩み相談のようなやり取りも行われ、ピア学習の機会にもなっている。これらの過程を経て、④次年度の計画や方針が立てられ、ESDロジックモデルの改訂が行われる。

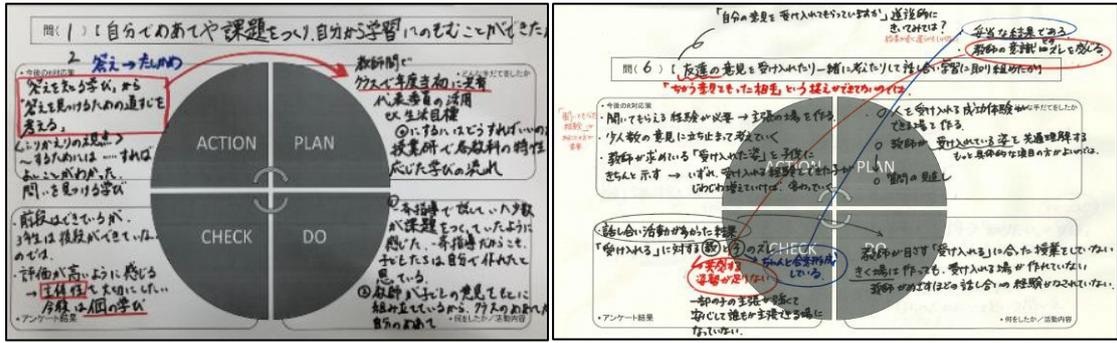
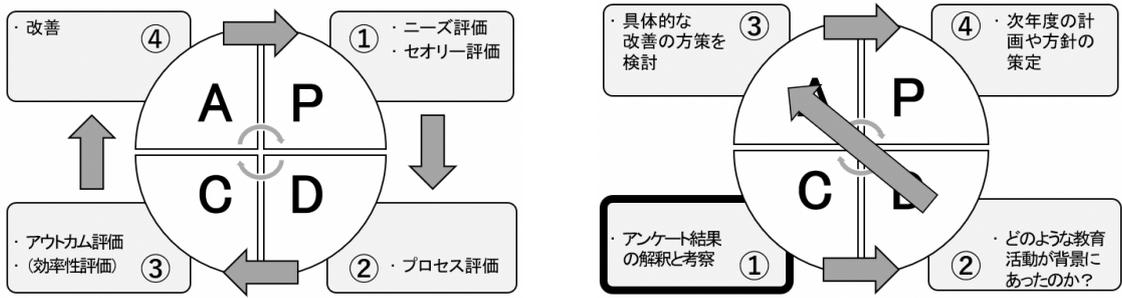


図4 重点研究会で行われたCDAPサイクル・ワーク  
(出典) みなとみらい本町小学校提供

(3) 三年目：学校運営協議会におけるESDロジックモデル・ワーク

サイクルを回すことに成功したMM本町小学校が3年目に挑戦したのは、いわば、サイクルの「半径」を広げること、すなわち、学校教職員以外の関係者を協働型プログラム評価に巻き込むことであった。具体的には、学校運営協議会の場で、協議会の委員とともに、ESDロジックモデルの作成ワークを行った。

MM本町小学校の学校運営協議会は14名のメンバーで構成されている(2021年現在)。地域の自治会や地元組織、地元の社団法人などの地域住民を代表する4名、保護者の代表が2名、地域学校協働本部の代表者と放課後キッズクラブの代表者がそれぞれ1名ずつ、学識経験者として、地域の民間企業や市の関係組織、近隣の小中学校の校長、大学教員(筆者)が5名、そしてMM本町小学校の小正和彦校長である。ここにMM本町小学校の先生方が事務局として毎回数名参加している。

2021年11月27日に行われた学校運営協議会では、60分を超える時間が「ESDロジックモデル」のワークショップに費やされた。このワークの目的は以下のように説明された。

ESDプログラムを可視化したロジックモデルに基づき、本校では学校評価に取り組んできたが、今までは学校運営協議会委員の皆様には、評価結果に関してご意見をいただくことが多かった。そこで、ESDロジックモデル改訂に合わせて、作成段階から委員の皆様よりご意見をいただき、ESDロジックモデルに反映させていくことで、様々なステークホルダーが参加した「協働型プログラム評価」をより推進したい。(下線部は筆者；学校運営協議会当日配布資料より抜粋)

従来は「学校から協議会への情報提供」そして「協議会から学校への意見提供」というキャッチボール的な関係性であったが、そこからさらにもう一步進んで、ともにESDの教育プログラムを作っていくという呼びかけが読み取れる。「協働」という趣旨を活かすため、また、形式的な会議に終始しないため、ワークショップのファシリテーションに際しては、以下の諸点に留意した運営を心掛けた。

- 着座の会議方式ではなく、自由に歩き回りながら付箋にアイデアを書き出して、各自で模造紙に貼り出していく「立ち歩き方式」で行う。
- 貼り出された付箋の内容が全員で共有できるよう、一段落したところでファシリテーター（MM 本町小学校の担当教員）が全部読み上げる。
- 「誰が書いたか」に左右されないよう、付箋は無記名で書いてもらう。
- 必ず全員に書いてもらう（遠慮がちな方が「見るだけ」にならないように配慮する）。
- 全体としてあまり深刻な雰囲気にならないように気を付ける。「立ち歩き」をしながら参加者同士が気軽に雑談を交わせるくらいの、少しざわつきがあるくらいがよい。

以上のような実践は、既に多くの学校現場でも取り入れられている典型的な参加型のワークショップの手法であり、これ自体は特に目新しいものではない。今回特に重視したのは、「結論を急がないコミュニケーション」、すなわち、ワークの時間内に議論をきれいにまとめようとしないうこと、また、まとまらない状態を恐れないことである。たとえ参加型の形式を採っていても、時間内にまとめなければならないというプレッシャーがかかっていると、結論ありきの形式的なワークとなってしまう、一見ワークショップの形式を取っていても、本質的にはワークショップとしての機能を果たしていないというケースも実際にはあり得るためである。

一方で、「自由に議論して下さい」という丸投げ方式では議論がなかなか深まらず、表層的な意見交換のみで時間切れとなってしまうがちであるため、協議会委員にとっては既知である、MM 本町小学校のESD ロジックモデルのうち、「活動主体」が「地域の多様な人びと」である「直接アウトカム」を模造紙に拡大印刷し、その「直接アウトカム」を具体化するというワークを行った。

このワークによって、「地域の多様な人々」だからこそその視点——例えば、「どのようなまちにしたいか」といった「まちづくり」の視点や「学校と地域の間には何らかの橋渡しが必要だ（ダイレクトには繋がりにくいのが現状だ）」といった現実的な視点——が導入され、学校の内部からの捉えとは異なる視点からESDの取り組みを見直すきっかけとなった。さらにこの機会によって、これまで協議会委員という外部者・第三者的な立場から助言をしていたメンバーが、ESD ロジックモデルの策定に関わる「当事者」として自らの立場を再考する契機ともなった。現実に複数の委員から学校外でのESDプログラムが提案・実行され、この年の報告書『ESD Book feat. MM』には、協議会委員の写真とコメントが掲載されていることが象徴的である。

#### （4）四年目：児童との協働による学級単位のロジックモデル策定

3年目にプログラム評価による活動半径を学校運営協議会にまで展開したMM 本町小学校は、4年目には外部展開に加えて「掘り下げる」活動、つまり、各学級のレベルでより深く評価活動を活用する取り組みに挑戦した。これは、スクールマネジメント（学校経営）からクラスマネジメント（学級経営）への深化であると言える。

具体的には、「クラス・ロジックモデル」を導入し、児童と協働して、その学級ごとの学級目標を示した独自のロジックモデルを作成するという試みに取り組んだ。このモデルは各教室に貼りだされ、「朝の会」や「帰りの会」といった機会に、「一日のめあての確認」や「一日の振り返り」に活用されている。加えて、全校的な

ESD ロジックモデルのアンケートと同様に、クラス・ロジックモデルに基づくアンケートも実施されており、形成評価の一環として、児童は自己評価の機会に、教員は児童とともに日々の成長を感じつつ指導の改善を図る機会に、そのアンケート結果（評価結果）を活用している。

さらに昨年10月には、クラス・ロジックモデルを活用した授業研究が行われ、児童アンケートの結果に基づき、「ロジックモデルの上位目標を達成するには、教科や教材の特性を生かしたどんな手だてを講じる必要があるか」という視点で授業提案が行われた。この授業研究では、従来からESDと親和性が高いと考えられている総合的な学習の時間や道徳に加えて、算数も取り上げられた点を特筆したい（図5）。ESDの本質的な教育活動の意義や効果は、ESDを独立科目や特定のイベントのように単独・単発に扱っては期待できない。深いESDの成果は、あらゆる教科で、また、学校行事や委員会活動あるいは休み時間の過ごし方なども含めたすべての教育機会において、その教育方針や教育哲学が「沁み込んで」いて初めて実現するものである。ESDロジックモデルの「深化」とは、モデルに示された上位のアウトカムが、児童や教職員の日常性のなかに「沁み込んで」いく取り組みになっていることを指している。そして、「クラス・ロジックモデル」は、「私たちがESDを通じて/に基づいて実現したい価値」を日常性のなかに位置づけることをサポートしている。

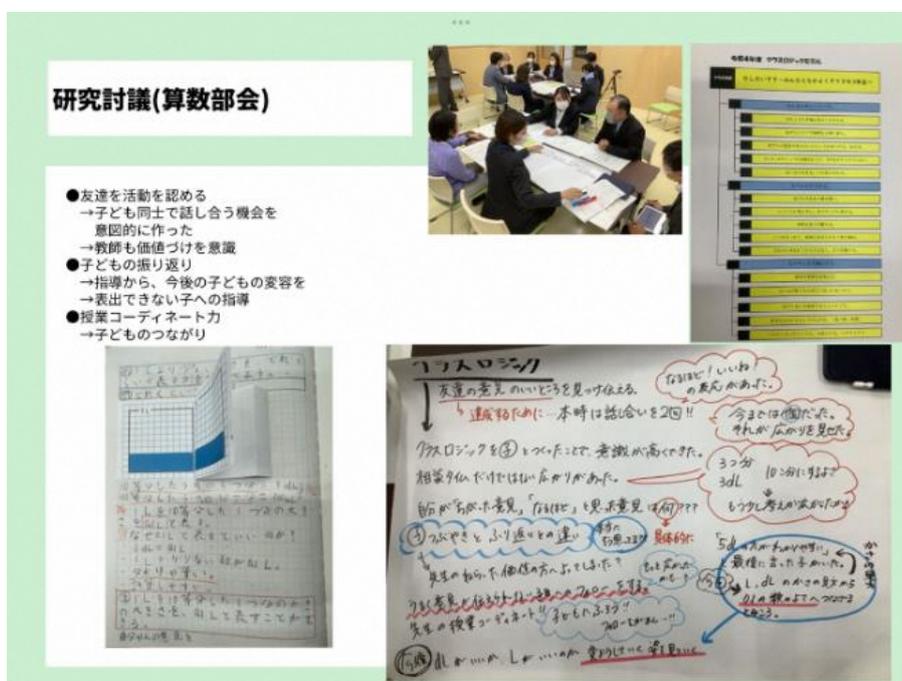


図5 算数部会で行われたクラス・ロジックに基づく授業研究  
(出典) みなとみらい本町小学校提供

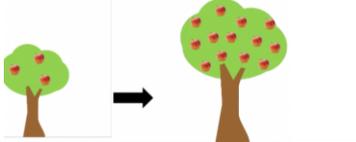
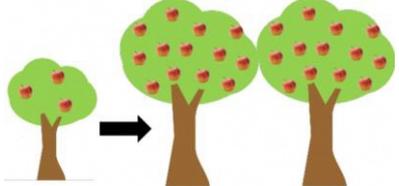
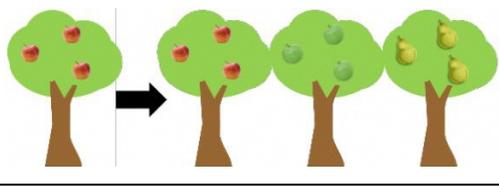
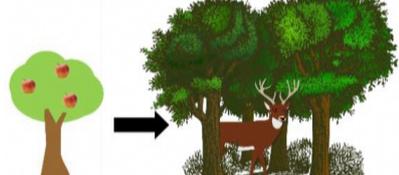
また、総括報告書としての本報告書には、例年のような資料編は添付しないが、本年もESDアンケート（評価調査）を通じた量的・質的データ分析が行われていることも、また、これらのデータに基づく教育改善が継続されていることも看過すべきではない（図6）。過去約4年にわたるMM本町小学校の取り組みのなかでは、もはや当たり前前化してしまっているが、エビデンスに基づく政策形成や政策改善が求められる昨今、これらの要求にこたえることが「義務」や「説明責任」のためだけに矮小化されることなく、それぞれの学校のそれぞれの価値の多様性を共有するために、また、その価値の豊かさをより大きく膨らませるために、活用されることが求められている。そのような、広い意味での改善に繋がるエビデンスの活用が、小学校の現場においても可能であることが示されているといえるだろう。



(1) どのようにして他校に拡げるのか：スケーリング・アウトから革新的スケーリングへ

ある取り組み（事業など）を拡張することを「スケーリング（scaling）」という。和製英語の「スケールアップする」といった表現などは日本語としても馴染みのあるものだろう。McLean & Gargani (2019; 2022)によれば、スケーリングにはいくつかの類型がある（表）。

表1. 拡張(スケーリング)の類型

<p>①スケーリング・アップ(Scaling Up)</p> 	<p>同じ取り組みの中でより多くの成果を目指す</p> <p>⇒それぞれの学校(あるいはモデル校)における取り組み</p>	<p>モデル校のこれまでの取り組み</p>
<p>②スケーリング・ディープ(Scaling Deep)</p> 	<p>同じ取り組みの中でより高質な成果を目指す</p> <p>⇒それぞれの学校(あるいはモデル校)における取り組み</p>	
<p>③スケーリング・アウト(Scaling Out)</p> 	<p>その取り組みを地理的に広げる</p> <p>⇒モデル校の取り組みを、そのまま他校に広げるアプローチ</p>	<p>紹介・共有(新たなインプット不要)</p>
<p>④スケーリング・アウトと、アップあるいはディープの合成(Scaling Out + Up/Deep)</p> 	<p>その取り組みを地理的に広げつつ、同時にそれぞれの新たな場所で、より多くの高質な成果を目指す</p> <p>⇒モデル校の取り組みを他校に広げつつ、それぞれの学校で、その取り組みを量的・質的に改善するアプローチ</p>	<p>(新たなインプットや試行的な実践が必要)</p> <p>モデル校以外も「育てる」取り組み</p>
<p>⑤水平スケーリング(Horizontal Scaling)</p> 	<p>その取り組みを地理的に広げつつ、それぞれの場所で多様な異なる成果が生まれることを推奨する</p> <p>⇒モデル校の取り組みを他校に紹介しつつ、それぞれの学校で、独自の取り組みを開発していくアプローチ</p>	
<p>⑥革新的スケーリング(Transformational Scaling)</p> 	<p>その取り組みの拡張をきっかけとして、従来とは全く別のシステム変革(transformation)を目指す</p> <p>⇒モデル校の取り組みをきっかけとして、その地域全体(e.g. 横浜市)で従来とは全く異なるシステム(e.g. ESD協働スクール構想[仮])を構築していくアプローチ</p>	<p>本事業の範囲を越えたり包括的・抜本的な変化</p>

(出典)McLean & Gargani (2019; 2022)を参考に筆者作成

これまでこの調査研究事業は、MM 本町小学校をモデル校として、スケーリング・アップ (①) とディープ (②) に努めてきた。4年間の試行錯誤を経てその成果が一定程度かたちになった今、この成果をどのように拡張するのかを検討すべき段階に来ている。

教育の分野で新たな手法が導入された際にとられるスケーリング手法は、報告書や発表の機会を通じた「良例の共有」であろう。本報告書や毎年の交流報告会などの場がこれに該当する。これは、上表のスケーリング・アウト (③) に該当する。今後はこれを、スケーリング・アウトとアップあるいはディープの合成 (④) や、水平スケーリング (⑤)、あるいは革新スケーリング (⑥) につなげていく必要がある。

スケーリング・アウトとアップあるいはディープの合成 (④)、または水平スケーリング (⑤) のためには、単にモデル校の取り組みを「知る」だけではなく、それぞれの学校がもつ文脈の中で「どう育てるのか」を具体的に実践する必要がある。具体的には、協働型プログラム評価の導入に関心のある学校を対象に、個別の相談を行ったり、セオリー評価ワークショップのファシリテーション支援を提供するなど、新たなインプットを伴う具体的な行動をとる必要がある。その際に留意すべき点は、モデル校の取り組みがそのままのかたちで導入しやすいケース (スケーリング・アウトを基本とするアプローチ) もあれば、独自の取り組みとして開発する余地が大きいケース (水平スケーリング) もあるという点である。協働型プログラム評価の最も重要な特徴は、それぞれの文脈や時機に応じた柔軟性と創発性にある。その点を損なわないスケーリングを行うことが求められる。

これらのスケーリングに際して、各学校で共有しやすい手順は以下のように要約できるだろう。

Box.4: 協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメントのスケーリング手順

手順①【知識のインプットと全体計画】MM 本町小学校の事例を概観する

⇒導入初年度の計画を立てる(手順②以下のスケジュールを確認する)

手順②【セオリー評価の実践】「ESD ロジックモデルづくり」ワークショップの実践

手順③【指標作成の実践】「ESD ロジックモデル」に基づく評価指標づくり

手順④【評価調査の準備】評価指標を活用した評価調査の計画づくり

手順⑤【評価調査の実施】評価調査とデータの収集・分析

手順⑥【プロセス/アウトカム評価の実践】調査結果を使った改善ワークショップの実施

手順⑦【評価結果の公表と共有】報告書の作成や関係者への情報発信

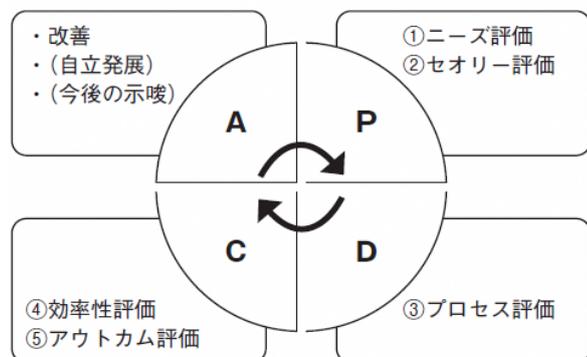


図3-1. プログラム評価の5段階とPDCAサイクル

(出典) 米原(2021)より

最後の革新的スケーリングは、この事業をきっかけとして、横浜市の ESD、あるいは教育全体に抜本的な変化をもたらされることを意味している。例えば、横浜市の ESD コンソーシアムでは、既に ESD 推進校の制度や毎年交流報告会のような機会が用意され、機能している。これらは既に十分先進的な取り組みであるといえるが、批判的に見れば、「それぞれの学校ごと」の取り組みを共有するという域を出てはいない。そこからさらに踏み出して、例えば『ESD 協働スクール構想[仮]』のような、従来のシステムのなかでは想定されてこなかった新たな構想を打ち出すのが革新的スケーリングのアプローチである。

一例として構想するならば、複数の学校あるいは推進校と、これまで学校や教育委員会との組織的な関わりがなかった「かながわ SDGs パートナー (<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/bs5/sdgs/partner.html>)」などの別組織との協働でひとつの ESD プログラムを構築し、それを一過性のイベントとしてではなく、正規の年間カリキュラムに組み込まれた ESD プログラムとして導入するといった新たなしくみも考えられる。あるいは、児童生徒ではなく、教職員の学びの場として『ESD 協働スクール構想[仮]』を捉え、授業企画からマネジメント・評価までをセットにした研修プログラムを、行政機関や大学と協働開発するといった新たなアプローチがあっても良いかも知れない。このような、既存のシステムのもとではできない（と思われてきた）ことや可能な選択肢として想定されてこなかったレベルに向かうスケーリングが、革新的スケーリングである。

## (2) 拡張の際の留意点：協働型プログラム評価のキモ

本総括報告書の最後に、協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメントを応用・拡張する際の留意点をまとめて締めくくりとしたい。

この手法の「スケーリング手順」を上で示しはしたが、本質的には、協働型プログラム評価による ESD スクール・マネジメントに既定のマニュアルは存在しない。むしろこの手法は、マニュアル化し難い実践の多様な展開——個々の文脈の独自性に合わせて目標を設定したり、評価指標を策定したりすること、あるいはそこから予想もしていなかったような新たな活動が創発されること——を後押しするための手引きのようなものである。しかしながら、この評価手法が形骸化することなくその存在意義を発揮するための条件（キモ）として、以下の3点が指摘できる。

### ① 評価的コミュニケーション

「協働(co-production)」の意味は本報告書にも記したとおりだが、協働でセオリー評価を行ったり、ロジックモデルや評価指標を策定したりする際に、関係者の間でどれだけ本質的な「評価的コミュニケーション」ができるかという点が、この評価手法の本質を左右する。

評価的コミュニケーションとは、評価的思考 (evaluative thinking) をもった個人同士のコミュニケーションを指す。評価的思考とは、「知的好奇心とエビデンスの価値に対する信頼に動機付けられた批判的思考」のことであり、この思考は、「仮説を明らかにし、思慮深い疑問を投げかけ、省察と他者視点の取り込みによってより深い理解を追究し、行動に向けて準備することを決意する」ものであると定義されている (Buckley et al. 2015)。思い込みや権威ではなく、知的好奇心とエビデンスに基づいて、省察的に、また時には他者の立場に立って議論を展開し、そして議論に終始することなく行動への志向性を持ったコミュニケーションが不可欠である。

## ② 創造的サーバント・リーダーシップ

どのような段階のどのような場面であれ、協働型プログラム評価の評価活動に大きな影響を与えるのは、「参加・協働・挑戦」を促すような場の雰囲気である。上に挙げたセオリー評価のようなコミュニケーションの場面だけではなく、日常性のなかに「参加」すなわち「想定されているエリアの外側からのヒトやアイデアの参入」を歓迎する雰囲気があること、「協働」すなわち「参加してきたヒトやアイデアと一緒に何かを作り出そう」とする雰囲気があること、そして「挑戦」すなわち「その新たな取り組みが成功しようが失敗しようがとりあえずやってみる」ことを応援する雰囲気があることが不可欠である。

このような雰囲気を作り出すことがサーバント・リーダーの役割となる。サーバント・リーダーシップは、支配型リーダーシップやカリスマ型リーダーシップと対比して、奉仕型リーダーシップと呼ばれる。サーバント・リーダーに求められるのは、そのリーダー（管理職）のもとに集う個人（教職員）が主体的に意思決定できるように、「指示・命令」の代わりに「支援・傾聴」を提供することである。加えて、ESD スクール・マネジメントの文脈における創造的サーバント・リーダーには、「参加」の障壁を下げ、「協働」の機会や場を積極的に設け、「挑戦」に伴うリスクやコストを軽減することで、教職員ひとり一人の創造力を向上させることも求められる。

## ③ 「評価」に対する理解と期待

そもそも論として、このような評価活動にかかわる個人が、評価に対するネガティブな理解——管理・監査、ダメ出し、行政当局やクレーマーに対する説明責任、数値による比較、現場の役に立たない情報搾取など——をもっているのは、いかなる評価活動も生産的にはなり得ない。したがって、「価値を引き出す(extract-value)活動としての評価」に対する理解と期待が存在することがすべての前提になる。本事業による MM 本町小学校の 4 年間の取り組み、そして本稿を含むこれまでの報告書が、「ESD による教育活動をより豊かにするためのしくみづくり」に向かう評価理解の一助となっていれば幸いである。

— 終 —

## 引用文献

- みなとみらい本町小学校編 (2019-2021) 『ESD BOOK feat.MM』  
(<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minatomiraihoncho/index.cfm/1,0,73,212,html>  
最終閲覧日 2023 年 1 月 30 日)。
- 源由理子 (2014) 「地域ガバナンスにおける協働型プログラム評価の試み」『評価クォーターリー』30、pp.2-17。
- 源由理子 (2016) 『参加型評価：改善と変革のための評価の実践』晃洋書房。
- 山谷清志、源由理子、大島巖 (2020) 『プログラム評価ハンドブック：社会課題解決に向けた評価方法の基礎・応用』晃洋書房。
- 米原あき (2016) 「『学び』の一環としての『評価』：協働型で行うプログラム評価の可能性」岡山大学編『文部科学省「日本／ユネスコパートナーシップ事業」ESD の教育効果（評価）に関する調査研究報告書』 pp.52-61。
- 米原あき (2021) 「協働型プログラム評価を用いた ESD スクール・マネジメントの実践」本図愛実編『グローバル時代のホールスクールアプローチ』ジダイ社。
- Bovaird, T., & Loeffler, E. (2012). From engagement to co-production: The contribution of users and communities to outcomes and public value. *VLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*, 23(4), 1119-1138.
- Buckley, J., Archibald, T., Hargraves, M., & Trochim, W. M. (2015). Defining and Teaching Evaluative Thinking: Insights From Research on Critical Thinking. *American Journal of Evaluation*, 36(3), 375-388.
- McLean, R., & Gargani, J. (2019). *Scaling impact: Innovation for the public good*. NY: Routledge.
- McLean, R., & Gargani, J. (2022). *Scaling impact: New ways to plan, manage, and evaluate scaling*. Notes from COE Workshops on Scaling Impact. 30th November 2022 in Delhi, India.
- Ostrom, E. (1996). Crossing the great divide: Coproduction, synergy, and development. *World Development*, 24(6), 1073-1087.
- Rossi, P. H., Lipsey, M. W., and Freeman, H. E. (2004). *Evaluation: A systematic approach* (7th ed.). Sage publications. (=大島巖、平岡公一、森俊夫、元永拓郎監訳 (2010) 『プログラム評価の理論と方法』日本評論社。)

# 第3章

2022年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会  
(教育委員会としてのESDの推進)

## 横浜市 ESD 推進コンソーシアム交流報告会

日時：児童生徒の部

交流会 2022年10月13日(木) 14日(金) 19日(水) 20日(木)

交流報告会 2023年1月25日(水) 26日(木) 27日(金) 31日(火) 2月1日(水) 2日(木)

教職員の部 2023年1月28日(土) 13:30~16:45

会場：児童生徒の部 オンライン(Meet)開催(市役所14階共用会議室)

教職員の部 ハイブリッド(JICA横浜/Zoom)開催

### I 児童生徒の部(10月13日~20日及び1月25日~2月2日)

今年度はオンライン(Meet)で中間期の10月と年度末の1・2月に実施した。児童生徒の部は、13:30~14:30(6日間)または、15:40~16:40(4日間)に3校程度で実施した。参加は任意(よこはま子どもピースメッセンジャー※<sup>1</sup>も含む)とし、視聴のみでの参加も可能とした。児童生徒や教職員、ESD推進関係者を合わせて約1200名の参加があった。

#### 交流報告会の流れ

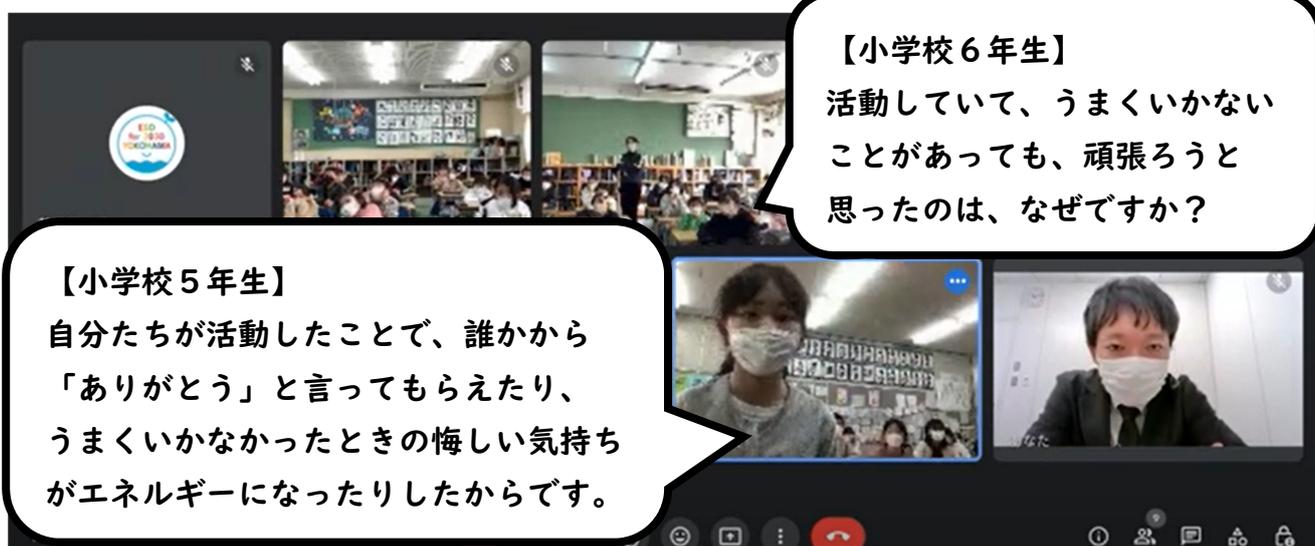
- ①めあて
- ②各校の発表と質問・感想交流
- ③振り返り・まとめ

各回3校程度で、「発表と質問・感想交流」を行った。率直な質問や意見のやり取りをする中で、自分たちの課題を解決するために、どの学校の取組も専門家の方々と連携を図っているという共有に気づき、協働して課題を解決していくことの価値を見いだしていた。そして、誰かのために地域のためにといった、相手意識や目的意識をもって活動することが大切ということを多くの児童生徒が発言したり、振り返りに表現したりしていた。

また、よこはま子どもピースメッセンジャーから、国連やユニセフとの国際平和交流についての報告を聞いた児童生徒は、自分たちの地域だけでなく、国際的な広い視野も取り入れながら活動することの重要性にも気づき、これからの自分たちの活動を見直すきっかけになっていた。

#### ①めあて

- ・他の学校の発表と自分たちの取組を比べて、感じたことや考えたことを表現する。
- ・今までの学習活動や今日の交流報告会を通して大切にしたいことを見つける。



※1 よこはま子ども国際平和スピーチコンテストで市長賞を受賞した児童生徒4名

【E S D推進校交流会～児童生徒の部～（中間期 10月実施）】

日時	参加校と振り返りの抜粋（下線部はE S Dで重視する能力・態度）
10/13(木) 15:40～16:40	本牧中学校 生徒会 市ヶ尾中学校 生徒会本部役員 新井中学校 生徒会、専門委員会 西柴中学校 3年生 ・今回の交流会を通して私達の学校でもペットボトルのフタの回収とか古着の回収とか提案してみたいなと思いました。学校だけでなく、 <u>地域の人たちと協力して取り組んだり、家でもできることに挑戦したりしていきたいです。</u>
10/14(金) 13:30～14:30	旭小学校 SDGs委員会 恩田小学校 5-2 ・旭小学校にはSDGs委員会があって、子どもも先生も学校全体がSDGsのことを考えられる環境になっているなと思ったので、 <u>恩田小にも作るか、今ある委員会の中でグループを作りたいと思います。</u>
10/14(金) 15:40～16:40	南希望が丘中学校 保健委員会 中和田中学校 生徒会 希望が丘中学校 生徒会 ・一つだけのプロジェクトに集中するだけではなく複数のプロジェクトをしていて、それらを成功させていたので、自分たちの学校もしっかり「 <u>フードドライブ</u> 」をやり遂げていきたいと思いました。
10/19(水) 13:30～14:30	みなとみらい本町小学校 4-2 本牧南小学校 羽沢小学校 5-1 幸ヶ谷小学校 5-1 ・他の学校の発表と自分たちの取り組みを比べて、同じ小学生で同じくSDGsに取り組んでいるのに全く違う話題で <u>すごく視野が広がった</u> と思います。 ・自分たちは、コロナで高齢者の人が運動できていなかったから運動できるようにゆるスポーツを作っているけど、幸ヶ谷小学校はパンで魅力アップという目標でやっているから、 <u>町をよくしようと考えているのが同じだった。</u> ・SDGsの取り組みは、 <u>違うけれど人々のために行動していることは同じで、思っていることは同じだ</u> と思った
10/20(木) 13:30～14:30	大門小学校 5-3 永田台小学校 4-1 ・大門小学校の方々は商店会の役に立ちたい、私たち永田台小は学校だけでなく永田台を自然豊かにしたい。 <u>それぞれ大きな夢があっていいな</u> と思いました。 <u>私が目指しているのは、自然豊かな永田台を走り回ること</u> です。
10/20(木) 13:30～14:30	相沢小学校 6年生4クラス 三保小学校 6年生4クラス ・交流を通じて、 <u>違う学校の取り組みを知れてよかった</u> と思うからこれからも、 <u>いろいろな学校と交流できたらすごくいい</u> と思いました。

【E S D推進校交流報告会～児童生徒の部～（年度末 1・2月実施）】

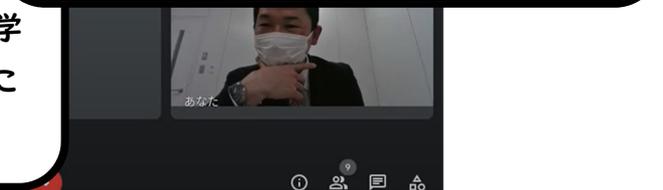
日時	参加校と振り返りの抜粋（下線部はE S Dで重視する能力・態度）
1/25(水) 15:40～16:40	新井中学校 2年生 小田中学校 生徒会本部 ・小田中学校は、1つの取組みを詳しく行っているが、新井中学校の皆さんは複数の活動をしていることを比べてみて <u>まだまだ課題は山程あるのだ</u> なと改めて感じた。 <u>不要になったものを生まれ変わらせるという発想が2校とも同じで、ゴミが減ることで課題が減る場合が多い</u> と感じた。
	中和田中学校 生徒会本部 中川西中学校 3年生（ピースメッセンジャー） 東高校 サステイナブル研究部 ・学校によって取り組んでいることの特徴が <u>違う</u> と感じました。SDGsの12番について特に取り組んでいたり、 <u>国連へ行き、色々な方と会談をしたりと様々な報告が聞けて面白かった</u> です。また、他の方たちと比べる事で自分達の活動も特別なのだと見直すことができました。 ・東高校では部活動として取り組んでいるということで、 <u>その熱量に感動</u> しました。

1/26(木) 13:30~14:30	羽沢小学校 5-1 幸ヶ谷小学校 5-1
	<ul style="list-style-type: none"> <li>この活動は、今年だけでなく来年になっても、<u>大人になっても続けていくことが大切だ</u>と思った。</li> <li>今までは地域の人が少しでも笑顔になって欲しいという思いがあったけど交流会を通して地域の人を笑顔にするだけではなく、<u>どんな人でもというところも大切にしたい</u>と思った。</li> </ul>
	相沢小学校 6年生4クラス 永田台小学校 6年生3クラス
	三保小学校 6年生4クラス 本牧南小学校 6-1
	<ul style="list-style-type: none"> <li>相沢小や三保小がいろいろなことをSDGsに絡めて活動してよかったと思います。特にジェンダーレスってというのが世界中のひとが差別されないようにするために必要だから、<u>自分も意識しよう</u>と思いました。</li> </ul>
1/27(金) 13:30~14:30	幸ヶ谷小学校 5-2 西寺尾小学校 6年生 (ピースメッセンジャー) 岡津小学校 6年生 (ピースメッセンジャー)
	大門小学校 5-3
	<ul style="list-style-type: none"> <li>他の学校はCMを作ったり、ピースメッセンジャーの方たちはニューヨークに行って色々なことを勉強したりしていて、<u>僕達ももっと大規模なことを活動していきたい</u>です。</li> <li>地域の人と関わり、<u>どんな失敗をしても決めた目標を達成しようとする気持ち</u>が大切だと思った。</li> </ul>
1/31(火) 13:30~14:30	恩田小学校 4-3 旭小学校 6-4
	荏田西小学校 5年生4クラス
	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からないことがあったら、いろいろな人と相談して、<u>少しでもいい方向に進めようとする姿</u>が大切だと思いました。</li> <li>全部の学校がプロの人とかかかわっていて、<u>みんな一回は失敗している</u>ことに気づきました。</li> </ul>
2/1(水) 15:40~16:40	希望が丘中学校 市ヶ尾中学校 生徒会本部役員、図書委員長、環境委員長
	本牧中学校 生徒会
	<ul style="list-style-type: none"> <li>ESD交流報告会を通して、「誰のためにやっているのか」そして、「世界をどう変えたいのか」を他校と話し合い、よさを共有したり取り入れたりが大切だと思いました。</li> <li>SDGsは環境だけではないことを再認識した。</li> </ul>
	南希望が丘中学校 保健委員会 中川西中学校 生徒会
	西本郷中学校 生徒会
	<ul style="list-style-type: none"> <li>交流報告会を通して、他の学校の取り組みを知って自分たちの学校だけでなく、<u>視野を広くもち活動することが大切だ</u>と改めて感じました。</li> </ul>
2/2(木) 13:30~14:30	幸ヶ谷小学校 5-4 大門小学校 3-1
	羽沢小学校 5-3
	<ul style="list-style-type: none"> <li>色々なことを知ることで、みんなの地球を守ることができる。</li> <li>予想以上にやっていることが違って驚いた。また、<u>どの学校でも地域の人や学校にいない人と関わっていて、いい</u>と思った。</li> </ul>



**【中学校1年生】**  
他の学校の取り組みをしって、自分たちの学校だけでなく、視野を広くもち、活動することが大切だと感じました。

**【中学校2年生】**  
どんな活動をするにも、目的やターゲットとなる人やものの現状をよく理解することが大切だと改めて感じました。



## II 教職員の部（1月28日）



市内だけでなく、全国から80人以上の参加申込みがあった。第1部として講演とグループ協議を、第2部を実践報告とグループ協議の構成で実施した。

### 本日の流れ（前半）

- 13:30 横浜市教育委員会 挨拶  
横浜市ESD推進コンソーシアムコーディネーター挨拶  
東京都市大学教授 佐藤 真久 氏（オンライン出演）
- 13:45 第1部 講演及びグループ協議  
「ESDの価値を引き出し、推進に反映するための、  
数値化されたデータの見方」～非認知能力を考える～  
講演40分 グループ協議30分 全体共有・まとめ10分  
東京大学学校教育高度化・効果検証センター 上野 雄己 氏  
東京大学大学院教授 北村 友人 氏  
(横浜市ESD推進コンソーシアム委員)
- 15:10 休憩 15分

### 本日の流れ（後半）

- 15:25 第2部 実践報告及びグループ協議  
座談会25分「自ら学び 社会とつながり  
ともに未来を創る人」の育成を目指す取組  
グループ協議30分 全体共有・まとめ5分  
登壇校 横浜市立羽沢小学校 横浜市立幸ヶ谷小学校  
横浜市立市ケ尾中学校 横浜市立南希望が丘中学校  
ファシリテーター 横浜市教育委員会事務局 指導主事
- 16:30 振り返り (formsへの回答にご協力ください) 10分  
クロージング 5分
- 16:45 閉会

## 1 オープニング 横浜市ESD推進コンソーシアム委員・コーディネーター挨拶 東京都市大学教授 佐藤 真久 氏（パリよりオンライン出演）

ESDは、教育の新たな方向付けであったり、持続可能な開発を目指したESD 1.0 から、社会変容と自己変容をつなげる学びであったり、複雑性に向き合う学習と協働の連動性を目指したESD 2.0、そして現在ESD3.0の時代に突入している。

ESD 3.0時代の背景としては、変動性と不確実性、複雑性、曖昧性を意味するVUCA社会がある。キーワードとしては、社会情動的知性やホールスクール、人間の安全や安心保障、Well Being、変化の担い手としてのESD、生涯を通じての質の高い教育の権利保障、共通善としての教育強化、事前を基礎とした人類の生存・成長などがある。

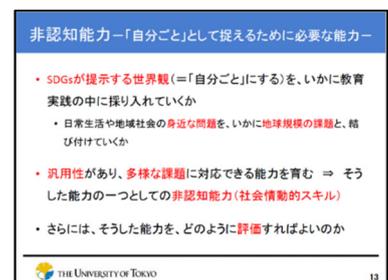


## 2 講演及びグループ協議

### (1) 講演「ESDの価値を引き出し、推進に反映するための、数値化されたデータの見方」～非認知能力を考える～

東京大学学校教育高度化・効果検証センター 特任助教 上野 雄己 氏  
東京大学大学院（横浜市ESD推進コンソーシアム委員） 教授 北村 友人 氏

令和元年度に横浜市で実施した、ESDに関する質問紙調査の結果から、子どもたちも、教師たちも、身近な問題に対する関心は高く、実際の行動にも結びついているが、グローバルな課題に対しては、知識は有していても、実感し理解することや行動へと結びついてはいないこと。そして、ホールスクールアプローチを導入し、地域と連携している学校ほど、取り組みが活発であることが分かっている。このよ



うなことから、最も大きな課題は、「自分ごと」として捉えることであり、SDGsが提示する世界観をいかに教育実践の中に採り入れていくのか、汎用性があり、多様な課題に対応できる能力（そうした能力の一つとしての非認知能力（社会情動的スキル））を育み、さらにそれをどのように評価すればよいのかについて、考えていくことが重要である。（北村）

非認知能力は、不確実性が高く予測不可能なこの時代において、単なる学力の高さだけが求められてはならず、社会全般で汎用性のある多様な能力の育成が求められており、ESDを含めた様々な教育がもたらす効果（アウトカム）を考える必要がある。非認知能力とは、認知能力以外の心理学的な個人差特性であり、その条件としては、生産性や測定可能性、成長可能性がある。認知能力と非認知能力には、動的相互作用があり、スキルの高い子どもは、知識を向上させるような手段を選択したり、成長のためのさらなる機会を求めたりする可能性が高い。非認知能力は、心身の健康やパフォーマンス、社会経済的地位など個人の社会、適応全般に繋がるものであり、近年注目が高まっている。

具体的な非認知能力の例としては、ビッグ・ファイブやレジリエンス、好奇心、自尊感情、批判的思考など、社会の中でより良く生きるためにさまざまなものがあり、目に見えないそれらの測定には心理尺度（人の態度や意識、行動といった抽象的な概念を定量化するために用いられる「モノサシ」）が用いられる。観測可能な事象から構成される概念（構成概念）は直接図ることはできないため、どの側面から測定するかを考える必要がある。また心理尺度は、単なるアンケートとは異なり、統計学を用いて信頼性（まとまり・安定性）と妥当性（概念の反映）が担保されていることが必要であり、この開発にはとても多くの労力がかかっている。

非認知能力の教育可能性を示すデータとしては、知能の遺伝率は約50%から80%とされている一方で、パーソナリティの遺伝率は約50%、もしくは50%以下のものもあるとされており、可変的で学習可能なものであることが挙げられる。一方で忘れてはならないのは、例えばビッグ・ファイブ（外向性や神経症傾向、開放性、協調性、勤勉性）のバランスは、個人の環境や状況によって異なり、高ければ良い、低ければ悪いというものではない。一般社会で悪いとされている資質についても、ポジティブになる可能性があり、アウトカムにする指標によって、非認知能力の影響は多様である。学校教育では、生徒の将来を見据えて、生徒の非認知能力を総合的に把握するツール（心理尺度）として利用することが大切である。（上野）

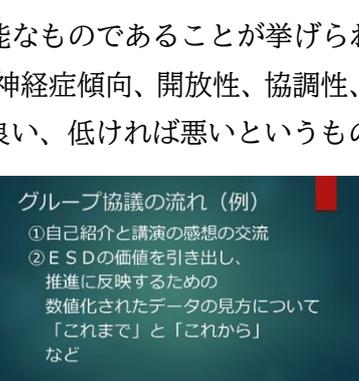
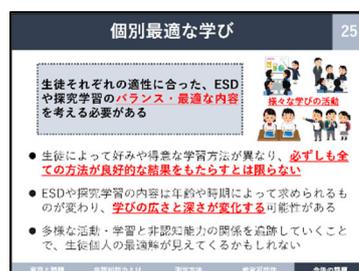
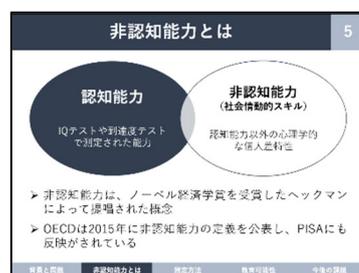
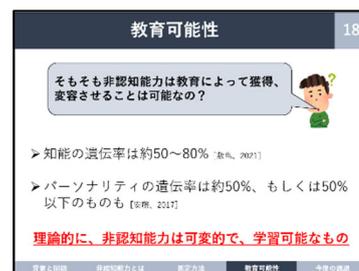
②グループ協議 ③全体共有・まとめ

### 3 実践報告及びグループ協議

#### (1) 座談会

横浜市立幸ヶ谷小学校 宗像 北斗 教諭  
横浜市立市ヶ尾中学校 安藤 大奈 教諭

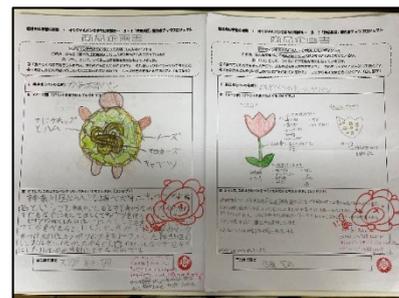
横浜市立羽沢小学校 矢島 康平 教諭  
横浜市立南希望が丘中学校 前田 裕美 養護教諭



羽沢小学校5年1組では、地域の高齢者が要介護状態の前段階である「フレイル」の方がいることを知り、誰でも一緒にできる「ゆるスポーツ」を開発することで、解決を目指す活動をしていて、実際に地域の高齢者に体験してもらって意見をもらうことで、よりよいものにしようと取り組んでいる。10月の交流会への参加は、自信をつけるためのきっかけになればといったものだったが、オンラインで発信ができたことが自信となり、市庁舎アトリウムで行われたエコフォーラムでの発表や、近隣の小中学校に取組を発信するなど、次の取組への意欲につながった。



幸ヶ谷小学校5年1組では、地域が住みたい街ランキングの上位なのに、住み続けたい街ランキングではあまり上位ではないことを知り、街の魅力をよく知ってもらって、住み続けたい街にしようと、地域の専門学校に依頼して、街の魅力の発信につながるパンの共同開発に取り組んでいる。10月の交流会への参加は、考えを整理できる機会になればといったものだったが、表現する活動を通して、自分たちの立ち位置が確認できて、同じ神奈川県同士で互いの活動の意見交換ができたという偶然も重なって、その後の活動は熱量や相手意識が高まり、街の声で解決したいと考えるようになったようだった。



市ヶ尾中学校では、「市中から世界を変えよう」をテーマに生徒会活動が行われている。自分たちができることを、アンケートなどを通して、多くの生徒の意見を取り入れて進め方を検討するスタイルが浸透していて、案として挙げられたランドセルの寄付活動は、寄付したいという生徒が思ったより多くないことが分かって断念するなど、活動ありきではない、主体的な活動になっている。10月の交流会への参加は、刺激を受けられればといったことだったが、他の学校の真剣な取組を聞いて、活動において何が大切なのか、自分の学校でもできることはないかと考える機会となった。



南希望が丘中学校では、保健委員会を中心に活動しており、“届けよう、服のチカラ”プロジェクトやWFP（国連世界食糧計画）のレッドカップキャンペーン、コンタクトレンズ容器の回収活動など、世界のために自分たちにできることを考えて取り組んでいる。

10月の交流会への参加は、ESD推進校として2年目なので参加したいといったことだったが、「全部やってみたい」や「来年は何に取り組もうか」といった声があがり、同じ中学生の他校の取組を聞いて大いに刺激を受けていた。

矢島教諭は、「ゴール14の海の豊かさを守るを活動をしたい」という海から離れている地域性とのギャップを感じる児童の声に、発達段階に合わせて地に足をつけたESDに取り組む難しさ感じていたが、地域の方のためにできることをともに考えることで「ゆるスポーツ」に行き着くことができた。今回の取組をきっかけに、近隣中学校とつながることができたが、中学生が取り組んでいることは地域よりも広く、社会課題の解決を目指していた。つながる活動にしていきたいと今後の展望を描いている。



宗像教諭は、発達段階に合わせた、SDGsにつながる授業づくりは簡単ではなく、17のゴールをどこまで意識させるべきか悩み、ゴールが示す世界があまりに広すぎると感じていたが、子どもたちが手応えを感じられるものにしたと考え、地域のことをテーマに取り組ませることができたと、試行錯誤を語った。

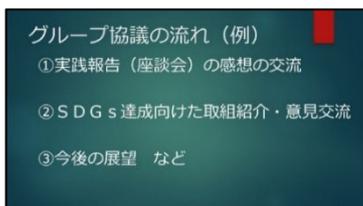


安藤教諭は、生徒の変容を捉える取組について、SDGs達成につながる活動が減っていると感じる教員が多くなった一方で、生徒の90%が自分たちは取り組んでいると考えていることが分かるなど、ギャップを生んでいるが、こうした結果も生徒と教員で共有し、行事や授業などあらゆる取組につなげ、生徒のやりたいに伝えていきたいと展望を語った。

前田養護教諭は、生徒の変容を捉えようとアンケートを実施したことで、活動が浸透していないことに気づくとともに、アンケートそのものが、多くの生徒を巻き込む手段になっていると感じていて、今回は少人数の交流ができたが、もっと

多くの生徒同士が交流できる仕組みづくりに期待を寄せた。

登壇された4名の教諭やESDを推進する学校は、育成を目指す子ども像を、しっかりとしたイメージとして持っている。発達段階や学校の実態に応じて、自分ごととして捉えられるような、課題解決に取り組む仕掛けがある。各校の実践は、その学校だからできることだと言われがちだが、それは必然である。だからこそ、実践を聞く際には、その実践が目指していることや教員の思い、悩みや引き出すことができた価値などを含めて知ることが大切であり、さらに、鉄は熱いうちに打つように、感想や疑問を即時的に交流することが、参会者それぞれの場所におけるESD推進につなげるためには不可欠です。登壇された4人に報いる意味も込めて、この後のグループ協議をその時間にしてください。(岡本)

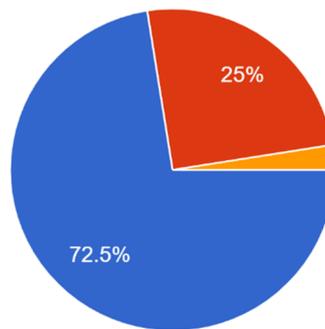
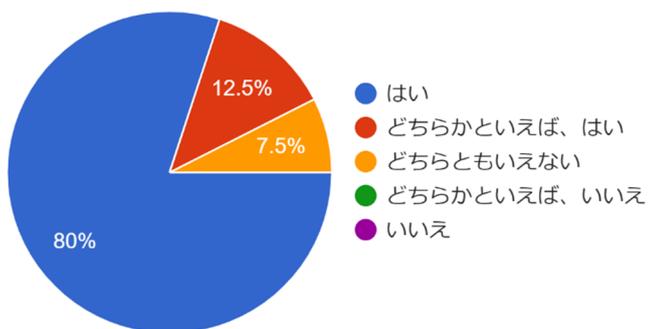


②グループ協議 ③全体共有・まとめ

3 振り返り・まとめ (Google Forms によるフィードバック)

○ 本会合が、1年間の活動をSDGsやESD、非認知能力の視点と結びつけ、その意義を考える機会となりましたか。

○ 本会合が、次年度のSDGs達成に向けた取組やESDの取組につながるものになりましたか。



- 交流会を通して得られたことや分かったこと、及び課題と感じていることをご記入ください。
- ・地域の特性をしっかりと先生が分析し、地に足のついた実践を充実させている中で、子どもたちが実社会でしっかりと活用できる力の育成に取り組まれていると感じた。
  - ・非認知能力の育成、評価をどうするか、ホールスクールアプローチでESDを推進するためにどうするかを改めて課題と感じるとともに、意見交流で課題解決のための手がかりを得ることができた。
  - ・基調講演、座談会および交流の機会をいただき、ESDの理解が深まりました。
  - ・正解がないESDの取組の難しさと同時に、思いがあれば形にとらわれずに取り組むことができる可能性を感じました。
  - ・横浜市のESDがしっかりと変容の視覚化に取り組み、共有されていることを学んだ。自校でのより効率的な検証方法と追加調査手法の開発が課題と感じた。

令和4年度  
横浜市ESD推進コンソーシアム 交流報告会



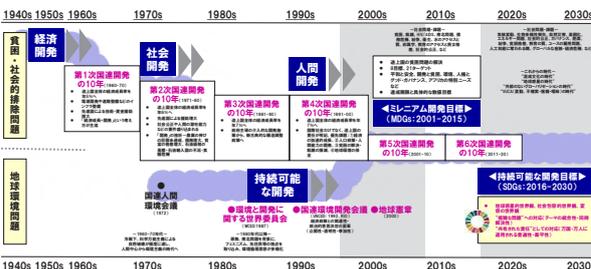
# ESD 3.0

## VUCA社会における 持続可能な社会の担い手づくり

@ZOOM  
2023年1月28日  
佐藤真久  
東京都市大学大学院 環境情報学研究所 教授  
m-sato@tcu.ac.jp / masahisasato@hotmail.com

© All Rights Reserved, Masahisa SATO, Ph.D.

### 持続可能な社会の構築にむけて ～開発アプローチの変遷(佐藤真久, 2020)



1940s 1950s 1960s 1970s 1980s 1990s 2000s 2010s 2020s 2030s

経済開発 → 社会開発 → 人間開発 → 持続可能な開発

1940s 1950s 1960s 1970s 1980s 1990s 2000s 2010s 2020s 2030s

他者・外部のないグローバル化の時代

© All Rights Reserved, Masahisa SATO, Ph.D. 2

### ESD 3.0 ～その意味合い



**ESD 1.0**  
文化・社会・環境

**ESD 2.0**  
個人実習・社会実習

**ESD 3.0**  
VUCA社会(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)  
持続可能性キー・コンピテンシーと社会・情動的知性(SEI)  
構造的変容/ホールスクール  
人間の安全・安心保障/Well Being  
変化の担い手としてのESD(教育の質と社会課題解決)  
生涯を通じて質の高い教育の権利を保障  
共通善としての教育強化  
自然を基礎とした人類の生存・成長

© All Rights Reserved, Masahisa SATO, Ph.D. 3

### 横浜市ESDモデル(2017) ～ESDの4レンズを通した見直し活動

#### ESDを考える、キーワード



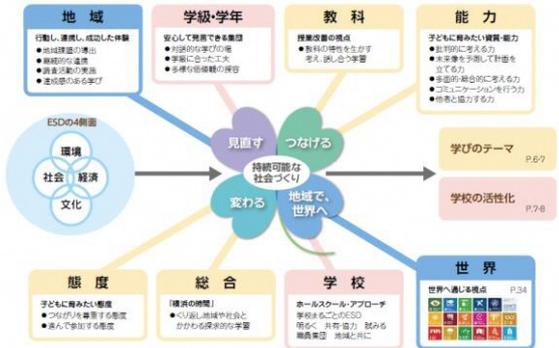
ユネスコのESDの会議でも次の言葉で、この4つのキーワードが重要だとしています

ESDを充実させる4つのレンズ

- 批判的なレンズ「見直す」  
課題の再設定・捉え直し、意味づけ、問いを持つ
- 統合的なレンズ「つなげる」  
課題・資源・時間・空間をつなげる、関連づける
- 変容的なレンズ「変わる」  
個人の実習、組織の変容、社会の変容
- 文脈的なレンズ「地域で、世界へ」  
身近な文脈、世界の文脈、歴史や文化の文脈

© All Rights Reserved, Masahisa SATO, Ph.D. 4

### 横浜市ESDモデル(2017) ～ESDフロー



地域 (環境、社会、経済、文化) → 学級・学年 → 教科 → 能力 → 世界

見直す (持続可能な社会づくり) → つなげる (地域で、世界へ) → 変わる (協働)

学びのテーマ (P.67) → 学校の活性化 (P.78)

世界へ通じる視点 (P.34)

© All Rights Reserved, Masahisa SATO, Ph.D. 5

### SDGsのための教育(UNESCO, 2017) ～“持続可能性キー・コンピテンシー”



社会・情動的知性(SEI)  
(マインドフルネス、共感、思いやり、批判的探究)

統一的問題解決  
自己認識  
批判的思考  
協働

システム思考  
予測(時間軸)  
規範  
戦略

© All Rights Reserved, Masahisa SATO, Ph.D. 6

# 横浜市 ESD 推進コンソーシアム交流報告会



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、  
児童生徒の交流報告会はオンライン（Meet）で実施します（非公開）。

**日時 2023年1月28日（土）13：30～16：45（受付13：00～）**

**会場 JICA 横浜 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1**

▶第1部 講演とグループ協議

・「ESDの価値を引き出し、推進に反映するための、数値化されたデータの見方」～非認知能力について～（仮題）

東京大学学校教育高度化・効果検証センター 上野 雄己 氏

東京大学大学院教授 北村 友人 氏（横浜市ESD推進コンソーシアム委員）

▶第2部 実践報告とグループ協議

・横浜市立SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校の実践報告とグループ協議

SDGs達成の担い手育成（ESD）推進校教職員

下のURL・二次元コードからアクセスして申込みをしてください。Zoom ミーティング ID・パスコードをお送りします。  
オンライン参加の場合は、講演及び実践報告を視聴いただけます。グループ協議につきましては、オンラインの方で行えるよう準備  
いたしますが、通信状況や機器の不具合等でご迷惑をお掛けする可能性もあります。是非、会場参加をご検討ください。

申込み期限 2023年1月23日（月） 参加人数に上限があるため、期日前に申込みを終了することもあります。

申込みURL

<https://forms.gle/mTPmSYKiMtQBBX8BA>



主催 横浜市教育委員会  
お問合せ 小中学校企画課 045-671-3265  
E-mail ky-esd@city.yokohama.jp



本事業は文部科学省のSDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業として行われています。

## 本年度のSDGs達成の担い手育成（ESD）推進校

横浜市立永田台小学校	横浜市立本牧中学校
横浜市立幸ヶ谷小学校	横浜市立小田中学校
横浜市立市ヶ尾中学校	横浜市立中川西中学校
横浜市立みなとみらい本町小学校	横浜市立相沢小学校
横浜市立東高等学校	横浜市立旭小学校
横浜市立三保小学校	横浜市立本牧南小学校
横浜市立羽沢小学校	横浜市立飯島小学校
横浜市立日枝小学校	横浜市立新井中学校
横浜市立恩田小学校	横浜市立南希望が丘中学校
横浜市立荏田西小学校	横浜市立豊田小学校
横浜市立大門小学校	横浜市立鉄小学校
横浜市立中和田中学校	横浜市立希望が丘中学校
横浜市立西本郷中学校	横浜市立並木中学校
横浜市立西柴中学校	横浜市立緑園義務教育学校

(2022年度指定28校)

## 本報告書の執筆・作成協力（第1章以外）

東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久  
(横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター)

東洋大学社会学部社会学科 大学院社会学研究科  
現在 インド工科大学 教授 米原 あき  
(横浜市ESD推進コンソーシアム委員)

編修・発行 横浜市教育委員会事務局学校教育企画部小中学校企画課  
横浜市ESD推進コンソーシアム